持出禁止

長崎県文化財調査報告書 第141集

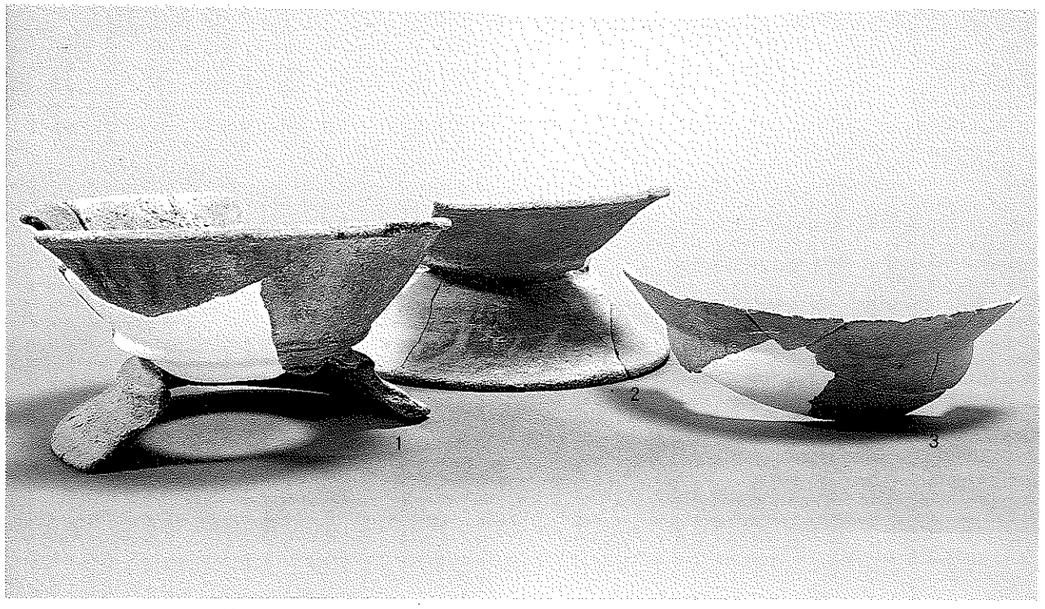
大　浜　遺　跡

集

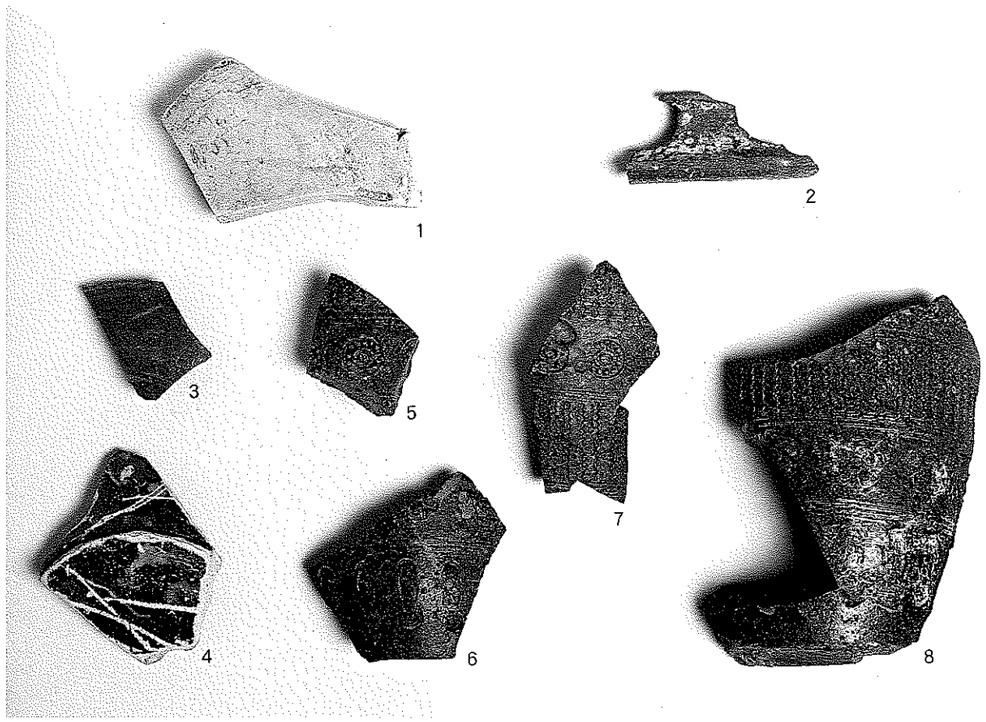
遺物取扱

1 9 9 8

長 崎 県 教 育 委 員 会



1～2 鼓形器台　3 鉢



1 墨書土器　2 円形透し器台　3・4 緑釉陶器　6～8 印花文土器

鼓形器台、鉢・印花文土器・緑釉陶器

発刊にあたって

長崎県は日本の最西端に位置し、我が国の歴史上文化の窓口として非常に大きな役割を担ってきました。その窓口となったのが、玄界灘・東シナ海に点在する多くの島々であり、それぞれに交流の歴史を示す遺跡が残されています。

五島列島もその一つで、７～９世紀の遣唐使の最後の寄港地として知られる福江島の三井楽は、当時の日本にとって中国の政治・文化を学ぶための交通の要衝であったことがよく知られています。ここで報告する大浜遺跡の遺物も、この遣唐使の時代を主体とするもので、この頃の五島列島の文化を知るうえで重要であることはもちろん、古代における日本と中国、中央と地方との関わりを知るうえでもたいへん貴重な遺跡であるといえます。

この調査報告書を通し、県民の皆様の文化財に対する理解と愛護の精神の育成、また国際交流の窓口としての長崎の歴史を理解するための一助となることを願ってやみません。

平成10年３月31日

長崎県教育委員会教育長
中　川　　忠

例　　言

1．本書は、平成８年８月１日～８月30日までの試掘調査をもとに、同年11月11日～12月20日と平成９年３月３日～同年３月14日まで本調査をおこなった大浜遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、長崎県五島土木事務所を事業主体とし、試掘調査を松崎義治（福江市教育委員会社会教育主事補）が、本調査を副島和明（長崎県教育庁文化課埋蔵文化財班係長）・福田一志（長崎県教育庁文化課文化財保護主事）・東貴之（同課文化財調査員）が担当した。

3．本書の執筆は、福田がおこなったが、動物遺存体の分析については京都大学大学院人間・環境学研究科の宮路淳子氏の玉稿を頂いた。また炭素年代については（株）古環境研究所に委託した。

4．遺物のスケールについては、土器・須恵器・大形の石器を３分の１、剥片石器・骨角器を２分の１で掲載している。スケールはそれぞれ図面下に記載している。

5．地図については、基本的に上方を北とするが、グリッド配置図、遺構実測図については各図面上に方位を記した。またグリッドに関する方角名は便宜上北東側を北として報告上扱っている。

6．本書の遺物実測は荒木美穂、徳永妙子、トレースは斉藤いづみ、写真撮影は大平由里子の協力をえた。

7．土師器については、宮崎貴夫（原の辻遺跡調査事務所係長）の協力を得た。

8．本書関係の資料は、現在長崎県教育庁文化課立山分室に保管している。

9．本書の執筆・編集は、福田が担当した。

本　文　目　次

Ⅰ．遺跡の地理的歴史的環境 …… 1
　1．地理的位置 …… 1
　2．周辺の歴史的環境 …… 3
Ⅱ．調査の経緯 …… 7
　1．調査経緯 …… 7
　2．調　　査 …… 9
Ⅲ．土　　層 …… 10
　1．土層について …… 10
　2．土層からみた環境復元 …… 12
Ⅳ．遺　　構 …… 15
　1．配石遺構 …… 15
Ⅴ．出土遺物 …… 18
　1．Ⅶ・Ⅴ層出土の遺物 …… 18
　　a．Ⅶ層出土の土器 …… 18
　　b．Ⅴ層出土の土器 …… 21
　　c．石　　器 …… 24
　　d．骨 角 器 …… 26
　2．沼出土の遺物 …… 28
　　a．弥生土器 …… 28
　　b．須 恵 器 …… 30
　　c．土 師 器 …… 40
　　d．中世輸入陶磁器 …… 47
　　e．木 製 品 …… 52
　　f．その他の遺物 …… 52
Ⅵ．自然遺物について …… 55
　1．大浜遺跡出土の動物遺存体 …… 55
　2．大浜遺跡における放射能炭素年代測定結果 …… 61
Ⅶ．総　　括 …… 62
　1．大浜遺跡からみた五島列島の古代・中世 …… 62
Ⅷ．五島列島の古代・中世年表 …… 68

挿 図 目 次

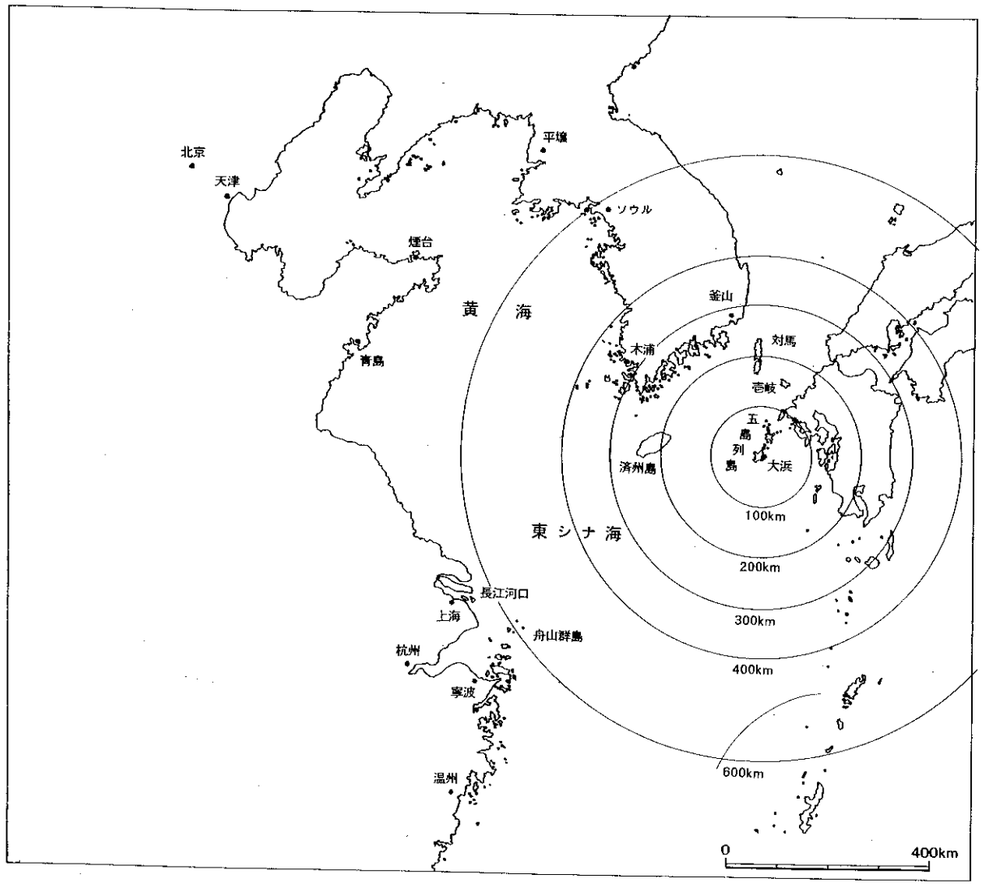
第１図　大浜遺跡位置図 …… 1
第２図　大浜遺跡周辺地形図 …… 2
第３図　五島列島における時代別遺跡分布図 …… 3
第４図　大浜地区調査地点図 …… 7
第５図　中島遺跡ドングリ貯蔵穴実測図 …… 8
第６図　グリッド配置図 …… 9
第７図　土層図 …… 11
第８図　大浜遺跡古環境復元図 …… 13
第９図　大浜海岸沿革図 …… 14
第10図　２号配石墓 …… 15
第11図　１号配石墓 …… 15
第12図　１号配石墓出土の貝輪実測図（1/3） …… 16
第13図　一本木遺跡集石墓実測図 …… 16
第14図　Ⅶ層出土の土器実測図（1/3） …… 19
第15図　Ⅴ・Ⅶ層出土の土器実測図（1/3） …… 20
第16図　Ⅴ層出土の土器実測図（1/3） …… 22
第17図　Ⅶ層出土の石器実測図（1/2） …… 24
第18図　Ⅶ層出土の石器実測図（1/3） …… 25
第19図　Ⅶ層出土の骨角器実測図（1/2） …… 27
第20図　弥生土器実測図（1/6） …… 28
第21図　弥生土器実測図（1/3） …… 28
第22図　弥生土器実測図（1/3） …… 29
第23図　印花文土器実測図（1/3） …… 30
第24図　須恵器坏蓋実測図（1/3） …… 31
第25図　須恵器坏身実測図（1/3） …… 32
第26図　須恵器甕・壷実測図（1/3） …… 33
第27図　須恵器甕・壷実測図（1/3） …… 35
第28図　須恵器壷実測図（1/3） …… 36
第29図　その他の須恵器（1/3） …… 37
第30図　色々な叩き文様・ヘラ記号 …… 39
第31図　土師器実測図（1/3） …… 41
第32図　土師器碗・坏・皿実測図（1/3） …… 44
第33図　土師器碗底部・瓦器碗実測図（1/3） …… 45
第34図　緑釉陶器実測図(1/2) …… 46
第35図　輸入陶磁器実測図（1/3） …… 49
第36図　輸入陶磁器実測図（1/3） …… 50
第37図　木製品実測図（1/3） …… 53
第38図　その他の遺物（1/3） …… 54

表 目 次

表１　主要遺跡調査履歴 …… 5
表２　舶載陶磁器と国産土器の割合 …… 51
表３　ニホンジカ四肢骨計測値 …… 58
表４　大浜遺跡動物遺存体の出土割合 …… 59
表５　動物遺存体関係表 …… 60
表６　須恵器個体別出土頻度 …… 62
表７　大浜遺跡編年表 …… 64
表８　陶磁器の系統別出土割合 …… 67

図 版 目 次

巻頭カラー（鼓形器台、鉢・印花文土器・緑釉陶器）
PL-１，遺跡近景・土層 …… 75
PL-２，遺構・遺物出土状況 …… 76
PL-３，Ⅴ・Ⅶ層出土土器（1/3） …… 77
PL-４，Ⅶ層出土石器（1/2） …… 78
PL-５，弥生土器（1/3） …… 79
PL-６，須恵器坏蓋（1/3） …… 80
PL-７，須恵器坏身（1/３） …… 81
PL-８，須恵器甕（1/3） …… 82
PL-９，須恵器甕・壷（1/3） …… 83
PL-10，須恵器壷・その他の須恵器（1/３） …… 84
PL-11，土師器（1/3） …… 85
PL-12，土師器碗・皿・坏（1/3）表 …… 86
PL-13，土師器碗・皿・坏（1/3）裏 …… 87
PL-14，土師器碗・瓦器碗（1/3） …… 88
PL-15，輸入陶磁器（1/3） …… 89
PL-16，輸入陶磁器（1/3） …… 90
PL-17，Ⅶ層出土の骨角器・その他の遺物 …… 91
PL-18，動物遺存体・炭素年代提出資料 …… 92

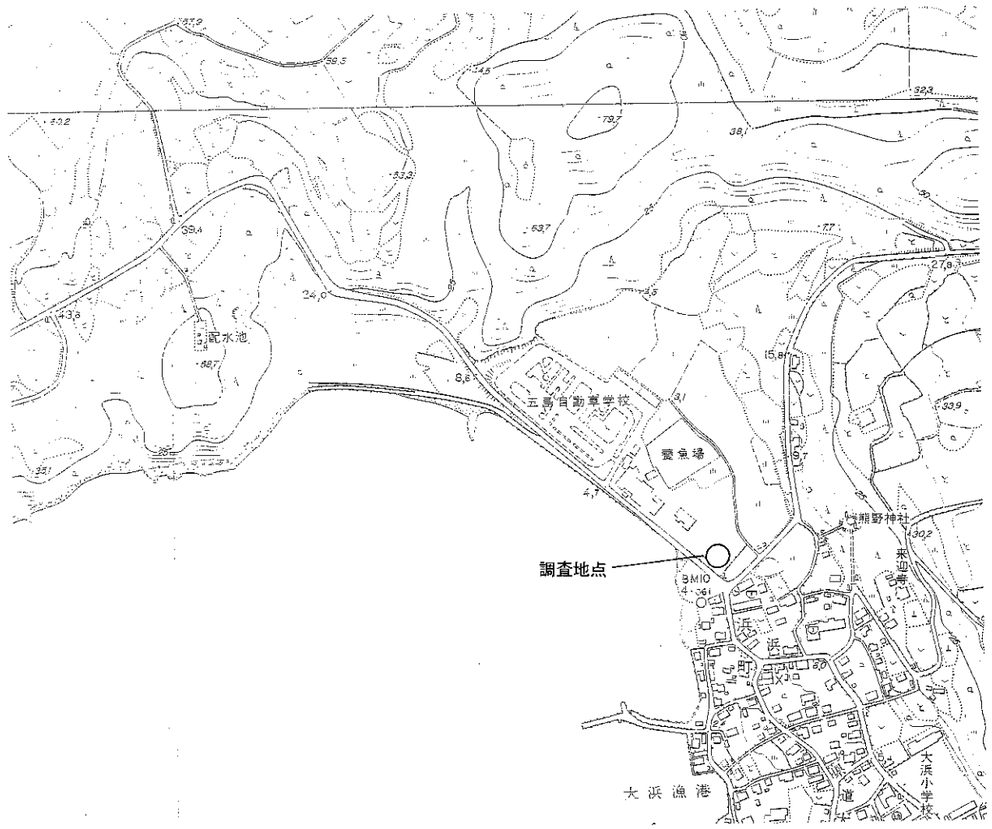


大浜遺跡を中心とした位置関係図

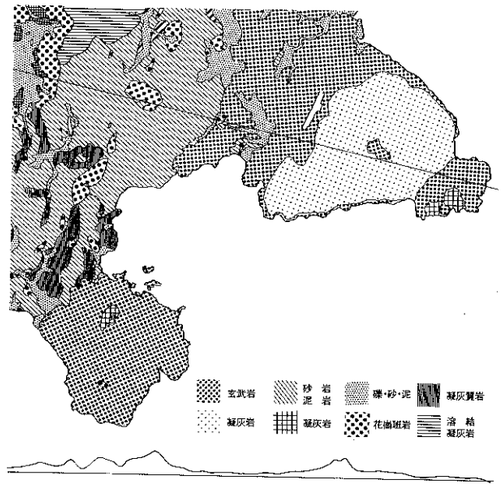
Ⅰ．遺跡の地理的歴史的環境

1．地理的位置

長崎県の範囲は、西に五島列島、北に対馬、東に島原を結んだ二等辺三角形にたとえられる。この二等辺三角形のほとんどが海で占められ、その中に小さな島々が数多く点在しているが、この中で代表的な島として挙げられるのが対馬島・壱岐島・五島列島である。その中でも五島列島は面積的に一番広く、715.48km²、次に対馬島の708.30km²、壱岐の138.33km²となる。ただし、他の島がほぼ一島で形成されているのに対し、五島列島はその名のごとく五つの大きな島からなり、それゆえに他と違った独特の文化を多く育んでいる。北から宇久島・小値賀島・中通島・若松島・奈留島・久賀島・福江島よりなり、行政区分上、宇久・小値賀が北松浦郡、他が南松浦郡と福江市に所属する。通常五島とは宇久・小値賀を含めるが、昭和34年の総理府告示によれば２島は平戸諸島に編入され、南松浦郡と福江市をもって五島としている。ただし、地理的な位置等を考えると、この２島も五島列島として捉えることがより理解しやすいといえよう。五島列島を中心とする他地域と



第１図　大浜遺跡位置図



第２図　大浜遺跡周辺地形図

の距離は、福江島から長崎まで約100km、済州島まで200km、韓国の釜山まで約250km、中国舟山群島まで約600kmを測る。遣唐使船の遭難記録等をみれば、日本最西端で中国に近いといっても古代の航海がいかに困難なものであったかが知られる。

先に五島列島の面積を表示したが、五島列島のなかでも福江島は394.93km²の広さを有し五島列島全体の約55％を占めている。福江島は福江市・富江町・岐宿町・三井楽町・玉之浦町の一市四町からなり、三井楽町の京ヶ岳、富江町の只狩山、福江市崎山地区の鬼岳などの新規火山がそれぞれ島の三方に突出している。特に福江市の鬼岳と富江町の只狩山が作り出した熔岩台地は、富江湾という南東に開口した大きな湾を形成すると同時に、溶岩による海岸線は良好な魚礁を造りだし、大規模な遺跡を形成する要因ともなっている。西側の鬼岳の溶岩流が作り出した溶岩台地と、東側の翁頭山（429.3m）から西側に続く溶岩台地とに挟まれた地域は、広大な谷底平野を形成しており、現在水田となっているが、もともと深田で水の供給が多い地域であったことが理解される。この地域の南側に一つの細い丘陵を挟んでに大浜遺跡が位置する。この細い丘陵が自然堤防の役目を果たし、谷底平野の土砂の海側への供給を阻み、平坦な盆地を形成しているものと思われる。大浜遺跡には先の谷底平野からの水の供給や、東西にそびえる鬼岳・翁頭山の縁辺に位置することから水源には事欠かない環境にあり、このことが大浜地区の中島遺跡のドングリ貯蔵穴の設営に大きく関わったものであろう。現在、遺跡周辺は福江と富江を結ぶ分岐点として知られ、前面に広がる砂浜は夏になると海水浴客で賑わう。富江湾内にはこうした砂浜が何カ所か知られており、湾内における砂の供給が多いことを物語る。この砂浜については後述するが、江戸時代の文献によれば現在よりかなり沖合まで砂浜が続いていたらしく、近代における温暖化の現象は広大な砂浜の景観さえ奪おうとしている。

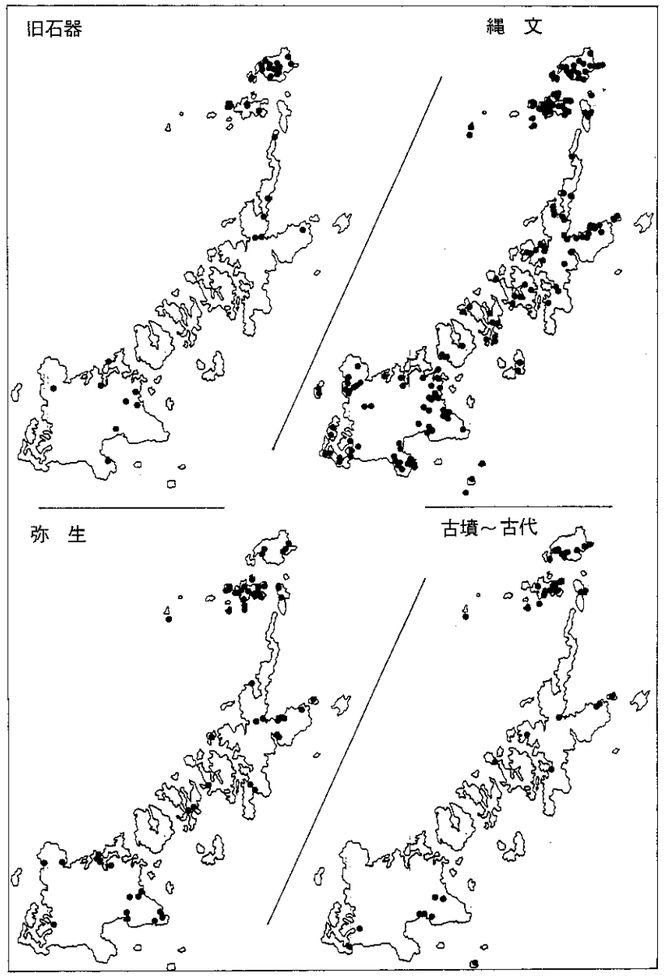
［参考文献］
長崎県1982「肥前江ノ島・小値賀・立串・肥前赤島」『土地分類基本調査』
福江市史編集委員会1995『福江市史』上巻　福江市

２．周辺の歴史的環境

五島列島には旧石器時代から中世にかけての多くの遺跡が知られているが、特に縄文時代の遺跡の数が群を抜いており、縄文時代の海に対する意識の強さがうかがえる。長崎県遺跡地図によれば、五島列島での遺跡数は旧石器時代の遺跡が33ヶ所、縄文時代の遺跡が169ヶ所、弥生時代の遺跡が55ヶ所、古墳時代の遺跡が42ヶ所確認されており、全体で299ヶ所となっている。全体的に宇久・小値賀島に濃厚に分布するのは、この地域に地元の研究者が多いということも否めないが、中通島などの急峻な山が海側まで迫り出した地形とは相違し、平坦な丘陵地帯で構成される宇久・小値賀の地形も遺跡の数に反映されているものと思われる。地形的には同様な傾向をもつ福江島では、宇久・小値賀に比べ遺跡数は少ないが、今後増加する可能性はおおいにあり、期待されるところである。

旧石器時代の遺跡

五島列島は、日本の最西端に位置するということから、考古学的にも注目されるところである。五島列島の旧石器が最初に注目されるようになったのは瀬尾泰平が宇久城ヶ岳遺跡で採集した細石核をもとに、麻生優がその形態・技術の特異性に注目して宇久島型細石核と位置づけた（麻生1965）。その後、五島各地で旧石器時代の遺物が発見され急速に遺跡数も多くなってきた。1970年代には上五島高校教諭、久原巻二らにより中通島でも５ヶ所の遺跡が確認されている。このようななかで、これらの遺物を総合的に評価したのが下川達彌である（下川1979）。下川は表採遺物ではあるが、地理的に大陸に近いということから積極的に評価する必要があるとし、



第３図　五島列島における時代別遺跡分布図

当時の九州、旧石器の編年との対比をおこなっている。以後発掘調査もおこなわれ、細石器文化については研究も進展しているが、ナイフ形石器文化期については良好な包含層をもった遺跡に恵まれていないため、本格的な調査もなされていないのが現状である。

縄文時代の遺跡

遺跡分布図をみてもわかるように、縄文時代には多くの遺跡が存在する。特に縄文前期と後期に遺跡は集中するようであり、この時期に活発な交流があったことを裏付けできる内容である。縄文前期遺跡としては、福江島では、福江市の江湖貝塚・堂崎遺跡・大板部島洞穴などが調査、報告されており、最近では中通島で、有川町頭ヶ島白浜遺跡が調査されている。江湖貝塚の資料は曽畑式土器研究には欠かせない資料を提供しており、堂崎遺跡・頭ヶ島白浜遺跡の轟式土器についても、その資料は今後の研究に多大な影響を与えるであろう。特に頭ヶ島白浜遺跡からは、韓国隆起文系土器の出土がみられるなど、この時期の朝鮮半島との交流を考えるうえでも重要な遺跡であることが知られている。縄文後期になると先にも述べたように、遺跡の急激な増加が見られる。またこの時期は貝塚の形成が盛んになり、遺跡からも骨角器が多量に出土している。五島でのこの時期の土器の主体は、南福寺式・坂の下式などを中心とする一群と、鐘崎式・北久根山式を中心とする一群がある。これらの土器群は中期末～後期初頭と後期中葉に位置づけられる一群であり、この時期が五島において縄文人が一番活発な行動をとる。主な遺跡としては、福江市白浜貝塚・同市中島遺跡・岐宿町鰐川貝塚・富江町宮下貝塚などが知られており、貝塚を形成しているため遺物の量も膨大である。これらの貝塚からは先述した阿高式系の土器と御手洗式・出水式土器などの土器も出土し土器形式も多岐にわたる。石器においても鈴桶技法による縦長剥片の生産が始まり、剥片鏃や石鋸などの特殊な石器が出現する。石鋸は韓国の東三洞貝塚からも出土しており、骨角器においてはＴ字形釣針、回転離頭銛など中国沿岸から朝鮮半島との関連遺物が出土している。すべての遺物について頻繁な交流の足跡がみられる。このように活発な交流をみせる阿高式系土器から北久根山式土器の時期は、西平式土器を境に後期後葉とされる三万田式土器の時期になると遺跡数は減少し、規模も小さくなる。ただし、縄文晩期黒川式期にはいくらか遺跡数も増加をみせるようである。(註1)

弥生時代の遺跡

五島の弥生時代については、小田富士雄による論考がある（小田1983）。小田によれば五島の中で最初に弥生文化が渡来したのは前期初頭板付Ⅰ式土器が出土した宇久島松原遺跡、夜臼式・板付Ⅰ式を出土した福江島の白浜遺跡であるとし、前期後半から中期前半の段階が五島列島の弥生時代の盛期であるとしている。また、須久Ⅱ式の欠落を指摘し、畑作に適した台地がある福江島については後期までの遺跡がたどれるとしている。現在においても板付Ⅰ式土器の存在は先の２遺跡だけでしかなく、小田のいうように、そのほとんどが中期前半の遺跡で占められ、後期にいたっては依然福江島で確認されるだけである。この大浜遺跡についても中期を主体とし、後期の土器が若干出土するという状況にあり、久原や宮崎貴夫が指摘するように、弥生中期海進が弥生時代におよぼした影響がいかに強かったかを知らしめる状況にある（宮崎1995、久原1986）。

	遺跡名	所在地	時代	出土遺物	遺構	調査年	文献
1	蓉神貝塚	岐宿町	弥生	土器(板付Ⅱ・城ノ越),石器(石斧・石鏃・掻器), 骨角器(ヤス・結合式釣針・貝輪)	住居址10,炉6,墓坑1	1962	長崎県教育委員会1964『五島遺跡調査報告』 長崎県文化財調査報告書 第二集
2	大浜遺跡	福江市	弥生	土器(中期～後期),石器(磨製石斧・石鏃) 骨角器,貝輪,人骨9体,鉄鏃1	配石・敷石墓5基		長崎県教育委員会1964『五島遺跡調査報告』 長崎県文化財調査報告書 第二集
3	蓉神貝塚	岐宿町	弥生	土器(中期前半)石器(石斧・石匙・凹石・石鏃) 骨角器(ヤス)貝輪2			長崎県教育委員会1964『五島遺跡調査報告』 長崎県文化財調査報告書 第二集
4	宮下貝塚	富江町	縄文	土器(並木式・南福寺式・鐘崎式・北久根山を主体、他に船元式) 曽畑式・轟式),石器(剥片鏃・石鋸・石斧・石錘・礫器) 骨角器(単式釣針・結合釣針・鈎衝製装身具)人骨	集石石斧	1965	賀川光夫1968『宮下遺跡調査報告』図録篇 長崎県文化財調査報告書 第7集 賀川光夫1971『宮下遺跡調査報告』解説篇 長崎県文化財調査報告書 第9集
5	鰐川貝塚	岐宿町	縄文	土器(阿高式系・出水式・鐘崎式)石器(石鏃・磨製石斧・石錘) 垂飾品,貝輪		1972	正林　護1982『長崎県埋蔵文化財調査集報』V 長崎県文化財調査報告書 第57集
6	水の窪遺跡	福江市	縄文	土器(黒川式を主体とし、阿高式系)石器(扁平打製石斧・石鏃)	礫群8基	1976	高野晋司1976『水の窪遺跡』 福江市埋蔵文化財調査報告書 第1集
7	浜治遺跡	有川町	縄文	土器(轟式・曽畑式・阿高式系)石器(石鏃・石錐・掻器・礫器)		1976	安楽・藤田1977『Ⅲ浜治遺跡』『長崎県埋蔵文化財 調査集報』Ⅱ　長崎県文化財調査報告書第45集
8	宇久松原遺跡	宇久町	弥生	土器(弥生前期後葉～中期前葉)	甕棺墓20,石棺墓3 石蓋土坑墓2	1977	宮崎貴夫1983『宇久松原遺跡』『長崎県埋蔵文 化財調査集報』Ⅵ 長崎県文化財調査報告書 第66集
9	城ヶ岳平子 遺跡	宇久町	縄文	土器(隆起線文土器・押引文土器) 石器(細石核・細石刃・ブランク)	炉址	1982	下川達彌1983『城ヶ岳平子遺跡』長崎県立美術博物館
10	神ノ崎遺跡	小値賀町	弥	土器(弥生時代前期末～6世紀中葉の土器) 板付Ⅱ・陶質土器・土師器・須恵器、坏・壺 鉄斧2・勾玉・管玉	甕棺墓・石棺墓 地下式板石積石室墳	1983	塚原　博1984『神ノ崎遺跡』小値賀町文化財調査報告書 第4集
11	殿崎遺跡	小値賀町	縄文	土器(阿高式系・出水・鐘崎・北久根山式) 石器(石鏃・剥片鏃・石鋸・石錐・磨製石斧・礫器) 石製垂飾品		1983	福田一志1986『殿崎遺跡』長崎県文化財調査報告書 第83集
12	大板部洞窟 遺跡	福江市	縄文	土器(轟式土器主体・塞ノ神式)石器(掻器)		1984	横　昌信1986『五島大板部洞窟の調査』 大板部洞窟調査団
13	殿寺遺跡	小値賀町	弥生	土器(弥生前期後半～中期前半の壺・甕)	壺棺1,甕棺2,石棺1		正林　護1980『殿寺遺跡』小値賀町文化財調査報告書 第3集
14	中島遺跡	福江市	縄文	土器(阿高式・鐘崎式・北久根山式・黒川式、 弥生、須久式、須恵器)石器(石斧・礫器・石錘・叩石) 骨角器類	ドングリ貯蔵穴12基	1985	村川逸朗1987『中島遺跡』福江市文化財調査報告書 第3集
15	西ノ股遺跡	新魚目町	縄文	土器(轟式・曽畑式・阿高式系) 石器(石匙・石鏃・スクレイパー類)瑪瑙製大珠		1985	久原巻二1986『西ノ股遺跡』新魚目町文化財 調査報告書 第2集
16	小浦遺跡	上五島町	縄文	土器(北久根山主体、弥生須久式、須恵器)石器(礫器・石斧)		1985	藤田和裕1987『小浦遺跡』上五島町文化財調査報告書 第1集
17	蓉神貝塚周辺 遺跡	岐宿町	縄文	土器(押型文土器1点) 石器(ナイフ形石器・石鏃・石槌・石匙・石斧)		1989	小野ゆかり1990『蓉神貝塚周辺遺跡』 岐宿町文化財調査報告書 第2集
18	堂崎遺跡	福江市	縄文	土器(轟式土器を主体・曽畑式・須恵器) 石器(石斧・石錘)		1990	安楽　勉1991『福江・堂崎遺跡』福江市文化財調 査報告 第4集
19	宮ノ首遺跡	宇久町	古代	土器(轟式・阿高式系、8c代須恵器・製塩土器)石器(石鏃・石鋸・石斧)		1990	宮崎貴夫1991『宮ノ首遺跡』宇久町文化財調査報告書2
20	宮下貝塚	富江町	縄文	土器(北久根山式主体、中世、11～16世紀)		1991	宮崎貴夫1993『県内重要遺跡範囲確認調査報告書』 長崎県文化財調査報告書 第109集
	白浜貝塚	福江市	縄文	土器(鐘崎式・北久根山式を主体、弥生では板付Ⅱ主体) 石器(石斧・礫器・石鏃・石鋸・縦長剥片・石錘) 骨角器(アワビ越し・ヤス・貝輪・垂飾品),石製垂飾品 人骨2体		1979	安楽　勉1980『白浜遺跡』福江市文化財調査報告書 第2集
22	一本木遺跡	福江市	弥生	土器(縄文晩期、黒川期主体。組織痕土器、弥生中期～終末) 石器(石鏃・扁平打製石斧・磨石・石皿)	甕棺2,集石墓3	1992	寺田正剛1993『一本木遺跡』福江市文化財 調査報告書 第7集
23	白浜貝塚	福江市	縄文	土器(並木式・阿高式系),石器(石鋸・石鏃・石斧)		1992	川口洋平1994『県内重要遺跡範囲確認調査報告書』Ⅱ 長崎県文化財調査報告書 第114集
24	曲古墓群	若松町	中世	土師皿・瓦質土器、弥生土器	隠印塔・五輪塔群	1994	安楽　勉1996『曲古墓群』若松町文化財調査報告書 第1集
25	宇久松原遺跡	宇久町	縄文	土器(夜須式土器主体)貝輪	支石墓6基, 土壙墓3基	1996	川道　寛1997『宇久松原遺跡』宇久町文化財調 報告書第4集
26	浜郷遺跡	有川町	近世	土器(17～19世紀、近世陶磁器)		1994	古門雅高1996『県内重要遺跡範囲確認調査報告書』Ⅳ 長崎県文化財調査報告書 第130集
27	宇久松原遺跡	宇久町	中世	土器(15～16世紀代の陶磁器。周防型足鍋)		1994	本田秀樹1996『県内重要遺跡範囲確認調査報告書』Ⅳ 長崎県文化財調査報告書 第130集
28	頭ヶ島白浜 遺跡	有川町	縄文	土器(轟式B式・曽畑式・尾田式・並木式・阿高式系 瀬戸内系中期土器・韓国隆起文土器) 石器(石鏃・石鋸・石匙・石斧)		1996	古門雅高1996『頭ヶ島白浜遺跡』 有川町文化財調査報告書 第1集
29	中島遺跡	福江市	縄文	土器(曽畑式・阿高式系・鐘崎式・北久根山式・三万田式) 石器(石斧・石鏃・石鋸・石匙・石錘) 骨角器(T字形釣針)垂状木製品	ドングリ貯蔵穴3基	1995	川道　寛1997『県内重要遺跡範囲確認調査報告書』Ⅴ 長崎県文化財調査報告書 第133集

表１　重要遺跡調査履歴

古代の遺跡

古代の遺跡については、小値賀島の神ノ島遺跡の墳墓群に代表される（塚原1984）。神ノ島遺跡では南九州に起源をもつ、５～６世紀代の地下式板石積石室墓が出土し、『肥前国風土記』値嘉郷条に記載されている容貌が隼人に似ているという記述と照応することが指摘されている。高塚墳についても６世紀後半～７世紀代のものが小値賀島で２基確認されており、このころには大和政権との関わりをもったとされ、塚原はこの事象について６世紀後半からの国際的緊張関係の中で大和政権の五島に対する介入が高塚墳の出現と関連するとしている（小田1984）。また宮崎は宇久町の宮ノ首遺跡から確認された６世紀代のアワビ貝の貝塚から、古代の税制に関連する古代の生産遺跡として認識している。また出土した馬の歯から『肥前国風土記』の牛馬に富めりという記事との関連や、牧の存在をも推定している（宮崎1995）。これに対し、福江島で古代に関連する遺跡の調査はなく縄文や弥生を主体とする遺跡の調査の中に須恵器が散見できる程度である。また、高塚墳の存在も知られていない。ただし７世紀から９世紀には遣唐使の寄港地としての福江島の果たす役割は大きく、この時代に関連する遺跡の調査が待望されているのが現状である。

中世の遺跡

中世については、遺跡地名表には掲載していないが『青方文書』から多くの小豪族が割拠していたことが知られている。最近の調査から知られる所を列挙する。最近の調査では、宇久町宇久山本遺跡・宇久松原遺跡が知られる。宇久山本遺跡では13世紀代の遺物を中心に、柱穴などの遺構が出土している。宇久氏の当初からの館跡とされているが、主体部周辺の調査であったため全貌は掴めていない（甲斐田1997）。宇久松原遺跡では15～16世紀代が中心の遺跡であるが、周防型足鍋の出土があり当時の五島と周防との関係を知る上で重要な意味をもつ遺跡である（本田1996）。日本最西端に位置する五島列島の中世は、倭寇との関連なくしては語れない。この倭寇の果たした中世での位置付けについては、多くの論考があり、今後も体系的な取り組みが必要であり、調査による資料増加が期待される。

註

註１　筆者は『伊木力遺跡』Ⅱのなかで後期の石器群の変遷について論考を加えたことがある。五島など外海に面した遺跡は、阿高式系土器～北久根山式土器以後、遺跡は縮小化し衰退するとした。その接点となる土器として西平式土器を挙げ、三万田式土器以後は島原半島などの平野部に移っていくとし、その要因として農耕との関連のなかで捉えたことがある。

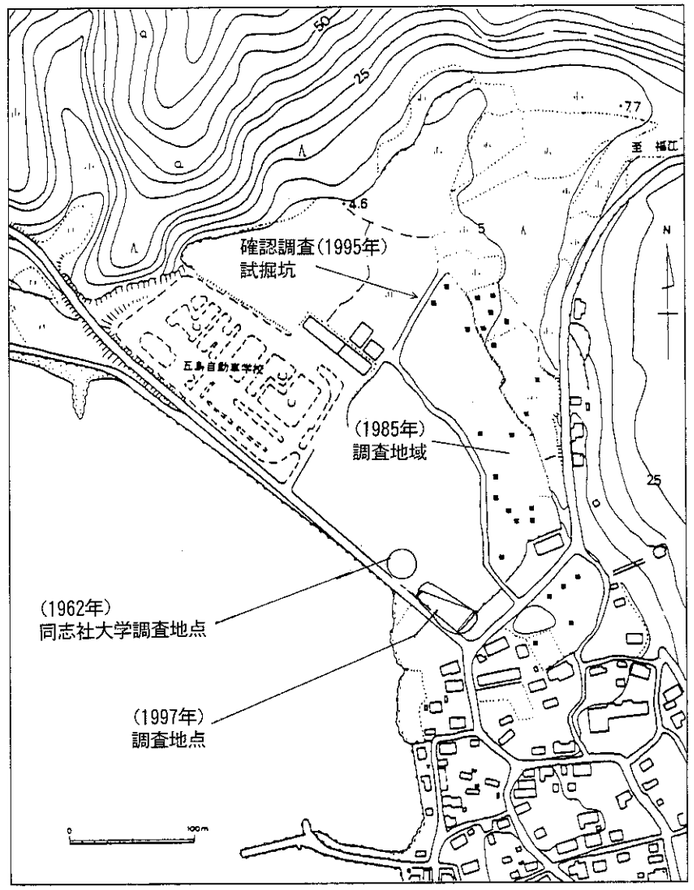
参考文献

麻生　優1965「細石器文化」『日本の考古学』Ⅰ
下川達彌1979「日本最西端の旧石器資料」『考古学ジャーナル』　167号　ニューサイエンス社
小田富士雄1985「西北九州」『三世紀の考古学』下巻　　学生社
甲斐田彰編1997『宇久山本遺跡』（宇久町文化財調査報告書題３傳）宇久町教育委員会
久原巻二1986「今福遺跡の地理的環境」『今福遺跡』Ⅲ　長崎県教育委員会
小田富士雄1984『神ノ崎遺跡』小値賀町教育委員会（
本田英樹1996「宇久松原遺跡」『県内重要遺跡』範囲確認調査報告書Ⅳ』
（長崎県文化財調査報告書第130号）長崎県教育委員会
宮崎貴夫1995「五島列島の弥生・古墳時代の墓制と文化」『風土記の考古学』５　肥前国風土記の巻　同成社

Ⅱ．調査の経緯

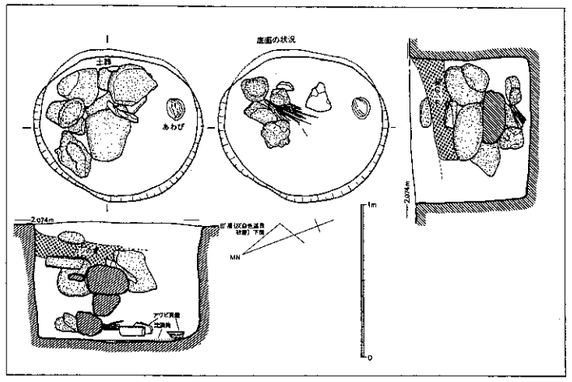
１．調査経緯

大浜遺跡が世に知られるようになったのは、大正14年の台風の折、偶然に甕棺が出土したことに始まる。この甕棺からは女性人骨・管玉・鉄剣・貝輪が発見されており、弥生中期から後期のものとされている。その後、昭和10年にはすでに調査がなされているが、調査の内容について知ることはできない。調査者である桑山龍進はこのときの出土遺物について「・・縄文式土器・打製石斧・磨石斧・扁平石皿・石鏃・石鋸及び貝製品・・」が出土したとしている（桑山1936）。また、大正14年の台風で偶然出土したという貝製品についてものち論考を加えている（桑山1941）。この中で桑山は、「・・大浜では平地地帯に縄文式（阿高式）土器を主体とする地域、砂浜では弥生式系統の遺跡がある・・」ことをすでに指摘している。これらの調査成果をもとに、戦後に入ってからは、さらに本格的な調査が始まった。長崎県教育委員会は昭和37年・38年に五島遺跡総合調査会を編成し、岐宿貝塚（寄神貝塚）・三井楽貝塚の調査、五島全域の一般調査と共にこの大浜遺跡の調査が選定された（酒詰1964）。大浜遺跡の調査は、同志社大学の酒詰仲男を中心に進められ、多くの成果を残している。この時の調査では、弥生の人骨９体と墓壙群が出土しており、墓壙の埋葬形態として石囲いと石敷とが確認された。墓壙からは牛歯やイノシシ骨、アワビなどが出土しており、これらのものは副葬品として把握され、牛の歯については「魏志倭人伝」における牛馬なしという記述との整合性を巡って話題となった。この調査により、大浜遺跡が弥生時代の一大墓地であることが確認され、墓の構造も配石をおこなうものや石敷をするものなど西北九州の弥生時代の墓制では珍しい形態を呈することが確認された。弥生時代における牛の存在については、その後の弥生



第４図　大浜遺跡調査地点位置図

時代の研究に一石を投ずることとなった。その後の調査としてこの地区の排水路設置に伴う調査が、1985年長崎県教育委員会によりおこなわれた。この地域は前回同志社大学が中心となって調査した区域より150m以上北東側に位置し、中島遺跡として報告がなされている（正林1987）。このときの調査では縄文後期を主体とするもので、多量の土器、石器、骨角器とともに、ドングリ貯蔵穴12基が確認されている。縄文時代の漁撈活動や採集活動が、遺物や遺構を通して理解できる貴重な資料を提供した。この中島遺跡の調査や、同志社大学の調査により、先に桑山が指摘したように平地に縄文時代の遺跡が、砂浜では弥生式系統の遺跡があるという指摘が検証されたこととなった。この中島遺跡については、1995年に長崎県教育委員会により、重要遺跡内容確認調査の対象に選ばれ、再度調査がおこなう機会を得ている。この調査は遺跡の範囲を特定することに重点がおかれており、大浜遺跡の北東側に２ｍ×２ｍのグリッドを25箇所設定している。調査によりドングリ貯蔵穴の分布域や、水田の中央部に貝塚が拡がること、遺跡の範囲そのものも広域に、しかも縄文前期から古墳時代の遺物までをも含むことが確認された（川道1997）。このように何回かの調査によってこの遺跡が大規模であり、しかも長い間遺跡が使用されていたことが徐々に解明されていった。この間にも地元の郷土史家、松崎久磨治氏が表面採集されていた墨書土器が『日本三大実録』の中で値賀嶋を分離独立させた記事との関連が指摘されるなど、大浜遺跡に新たな重要性が見いだされてきている（註１）。



第５図　中島遺跡ドングリ貯蔵穴
（正林・村川1987より転載）

註１　長崎外語短大助教授の木本雅康氏は『日本三大実録』の内容として「肥前国松浦郡庇羅・値嘉の二郷を合わせて、上近・下近の二郡を建都し、値嘉嶋を設置するというものである。」とし、十世紀初めに編纂された『延喜式』では確認できないため値嘉嶋は長続きせず、やがて廃止され、旧態に復したのであろう。としている。また下近郡家の位置については不明であるが、福江市大津に郡津があった可能性を指摘している（木本1996）。

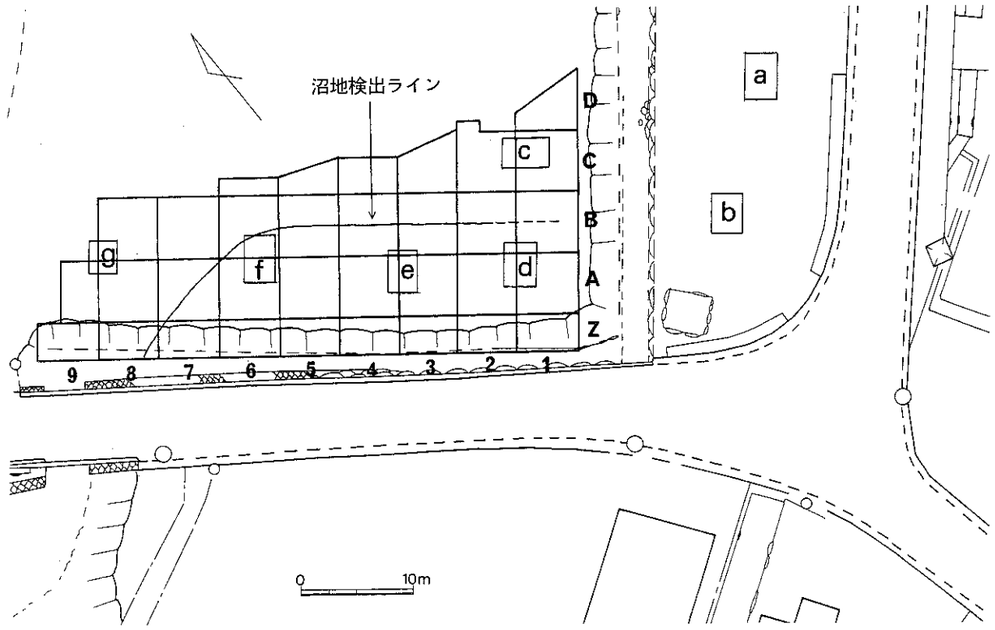
［参考・引用文献］

桑山龍進　1936　「橘湾沿岸に於ける史前遺跡に就いて」『長崎談叢』第18輯
酒詰仲男　1964　「大浜遺跡」『五島遺跡調査報告』長崎県文化財調査報告第２集　長崎県教育委員会
村川逸郎・正林護1987『中島遺跡』福江市文化財調査報告書第３集　福江市教育委員会
宮崎貴夫　1995　「五島列島の弥生・古墳時代の墓制と文化」　『風土記の考古学』５　肥前風土記の巻　同成社
木本雅康　1996　「値賀嶋の設置」『図説　長崎県の歴史』　河出書房新社
川道　寛　1997　「中島遺跡」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅴ』長崎県文化財調査報告書　第133集　長崎県教育委員会

２．調　　査

今回の調査は、主要地方道福江・富江線の拡幅工事に伴うもので、範囲確認調査を福江市教育委員会が、本調査を長崎県教育委員会がおこなった。範囲確認調査に先立ち、この地区が造成により３ｍ以上客土をしていたことから、重機による客土の除去をおこない、その後に３×４ｍを基本に９箇所のグリッドａ～ｉを設定した。調査の結果、グリッドａ・ｂ以外から遺物包含層が確認でき、本調査の範囲をｃからｉの範囲とした。この範囲確認調査では、ｆグリッドから弥生時代の配石墓を確認したほか、その他のグリッドでも須恵器を中心として、中世輸入陶磁器・土師器のほか獣骨などの動物遺体や植物などの自然遺物が多量に出土した。なお、ｈ・ｉ区については、砂丘の高台にあり、同志社大学の調査区に至近距離であったことから範囲に入れることとなったが、のちにこの区については工事範囲外となったことから、本調査の対象となったのはＣ～Ｇグリッドの範囲となった。1964年に同志社大学がおこなった調査では弥生時代が中心であったことや、遺物から古代の本格的な遺跡である可能性があり、五島の古代を考える上でも重要であることが予見できた。本調査では公共座標Ｘ＝1176.867，Ｙ＝-1066.660からＸ＝-1206.256，Ｙ＝1040.563を見通したラインから90度北側に振ったラインを南北軸とし、それに合わせてそれぞれ５ｍ間隔で90度振ってグリッドラインとした。一番北側をＺ区、以下北に向かってＡ～Ｄまでの記号を、東西には１～９までの番号を付けグリッド番号とした。

表土を剥ぐと、すぐに砂地であったが、黒くなった部分が半円状に南側に確認でき、調査が進行するにしたがい沼地であることが確認された。この沼地に弥生時代から中世にいたる遺物が膨大な量出土するとともに、動物遺体も出土した。また、砂丘下に縄文時代後期～晩期の包含層も確認できた。



第６図　グリッド配置図　ａ～ｇは試掘

Ⅲ．土　　層

1．土層について

遺跡の調査以前は、発掘調査地点は２ｍ程の埋土で覆われていた。そのため今回の調査に先立ち、重機による埋土の除去作業をおこないグリッド設定をした。本来、砂層は東側に向かって緩やかに傾斜していたものと思われ、昭和30年代頃までは今回調査した地点は、県道から見下ろす水田であったことがわかっている。

Ⅰ層　灰茶褐色粘質混砂層　（土壌化しているが、砂と貝の微少砕片含む。遺物は近・現代の遺物から弥生土器、須恵器、中世の遺物を含む。この地域が昭和30年代まで水田であったことの名ごりで、水田を作るための造成であろう。）

Ⅱ層　灰青色混貝砂質土層　（Ａ－２区から南東側に薄く堆積する層で、Ａ－５区以西には現れない。Ⅰ層と同様な遺物で構成されるため、この層も水田をつくる際に入れ込んだ土であろう。）

Ⅲ層　（砂質がやや強いⅢａ層と、植物性の堆積物からなるⅢｂ層とに分けられる。このⅢ層は、調査地点のなかでも半円形状に検出された沼の堆積物で、他では確認できない層位である。ただし、縄文時代の遺物を除く遺物のほとんどはこの沼の中から出土している。以下Ⅲａ層とⅢｂ層に分けて説明する。）

Ⅲａ層　黒褐色粘質土層　（黒みが強く、やや砂質を帯びる。Ｚ～Ａ－１区列側では粘性が強いが、３区列以降はやや締まった層になる。これはＺ～Ｃ－１列側の横に小川があることから、ここからの水の供給が多いためであろう。

遺物は近・現代の遺物は含まれず、弥生土器・土師器・須恵器・中世陶磁器を中心とする。また、獣骨や木片の自然遺物が多量に出土する。）

Ⅲｂ層　茶褐色粘質土層　（Ⅲａ層以上に有機質が強い。植物質の堆積物が細かなラミナを形成しており、窪地に沈殿堆積した状況を呈する。この層にもⅣ層の砂がブロック状に入り込む。遺物は須恵器を主体とするが、Ⅲｂ層と内容はほぼ同じである。）

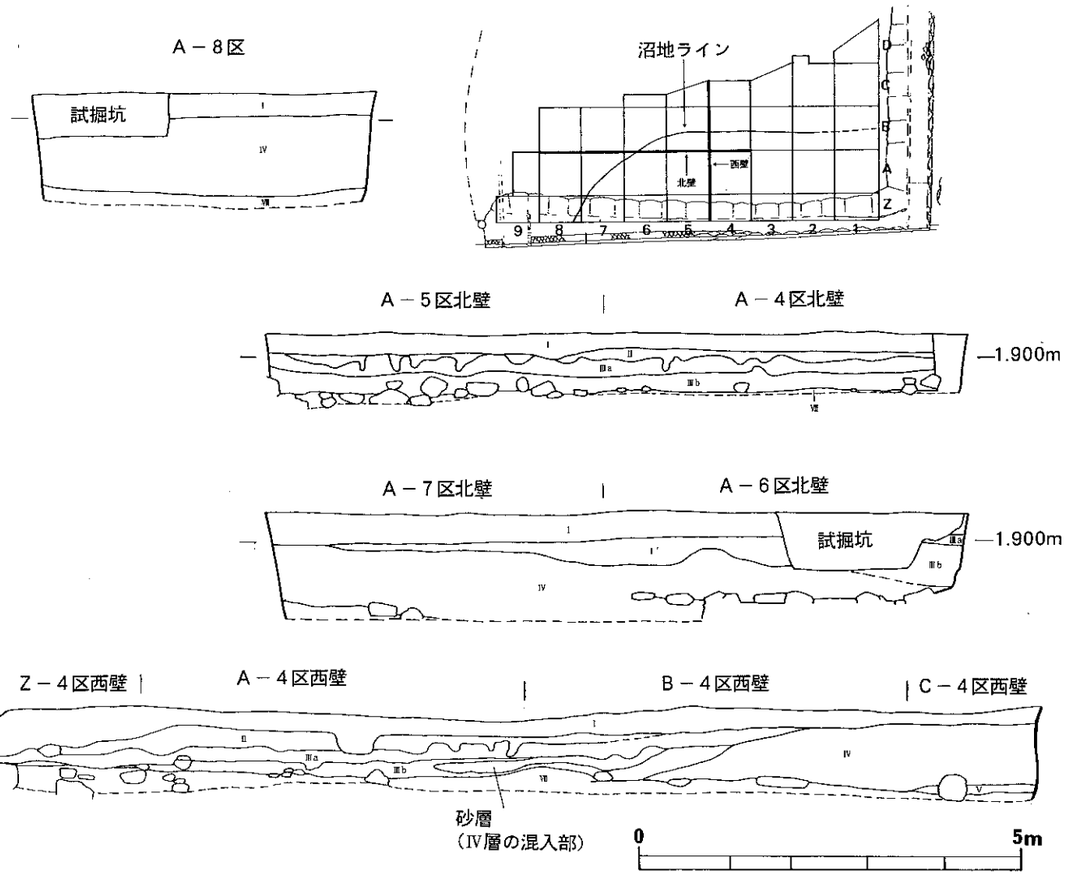
Ⅳ層　黄白色砂層　（粒子が細かく均一な砂層であるため、風成砂であろう。遺跡周辺全体がこの層に覆われており、砂丘を形成する。調査区は砂丘内の窪地であり、さらにＢ区列中央から南側に傾斜して窪地を形成する。この砂丘の窪地に水が供給され沼を形成している。この層は無遺物層である。）

Ⅴ層　茶褐色混貝砂礫層　（Ｃ－２～５区などを中心に堆積しており、Ａ区・Ｚ区などでは薄くなる。マンガンあるいは鉄分の沈着化が進んでおり、遺物の表面も明褐色に変色する。２～３㎝大の小礫と多量の貝で構成される。

遺物は縄文晩期で構成され、動物遺存体も出土する。この層の直上にⅣ層の砂層が堆積するため、晩期の終了後に砂丘が形成されたことが理解される。

Ⅵ層　灰黄色粘土層　（純粋な粘土層であるが、遺物は認められない。この層はＡ－１区でしか認められなかったが、中島遺跡でドングリ貯蔵穴を掘込んだⅥ層の茶褐色粘土層に相当するものであろう。

Ⅶ層　灰青色混貝砂礫層　（今回の調査区全域に広がる層で、鬼岳を起源とする溶岩の上に乗る、砂礫層で貝を含む。灰青色を呈し、やや大きめの礫と粗めの砂で構成され、礫は溶岩から遊離した転石である。貝の中にはマテ貝などを含むため、やや潟に近い状況であったのであろう。



第７図　土層図

2．土層からみた大浜遺跡の環境復元

Ⅴ層の縄文晩期の出土層位直上のⅣ層は、２m近く砂層が堆積しているが、このⅣ層が大浜遺跡の環境復元をおこなうにあたってのおおきな鍵になるものと考える。今回の調査区は砂丘間の窪地であることから、調査区については１m～２mの砂が堆積しているだけであったが、昭和37年の調査区あたりでは３～５mの砂が供給されていたことが予想される。このように砂がある一時期に大量に供給された要因について考えなければならないと思う。ここでは大まかに１期から４期まで分けて時代ごとに地形復元の概念図を作成し、大浜遺跡の地形環境について説明する。

１期、縄文後期から晩期

1997年の中島遺跡の調査から、海岸段丘上に縄文前期（曽畑式土器）・中期（阿高式土器）が出土している。今回の調査部分あるいは、中島遺跡の低地部分でも前・中期の遺物出土はないため、縄文時代前・中期には低地部分は積極的な利用はなかったものと考えられる。これに関しては、前期海進が大きくかかわっていたことを示すのであろう。後期初頭になると、ドングリ貯蔵穴がやや山裾側に設営され、その前面に貝塚が形成される。貝塚については、今回の調査区においても獣骨と貝類で占められた混貝砂層の７層が検出されていることから、今回の調査区が貝塚の縁辺であることも考えられる。生活址は、ドングリ貯蔵穴や貝塚の在り方からこの周辺に生活の場があったものとして捉えられよう。1997年の調査でも後期主体の層の上に純砂層が確認されており、この時期にも汀線から離れた所においては小規模な砂層が形成されていたことが理解される。なお、図における汀線については、縄文晩期～弥生の時期に急激に海面が後退したことに対する概念的な設定であり、この時期が温暖であったと言うことではない。むしろ、後の寒冷な時期の初段階にあたり、砂丘形成の初段階としても捉えられよう。

２期　縄文晩期（黒川期以降）から弥生時代前期

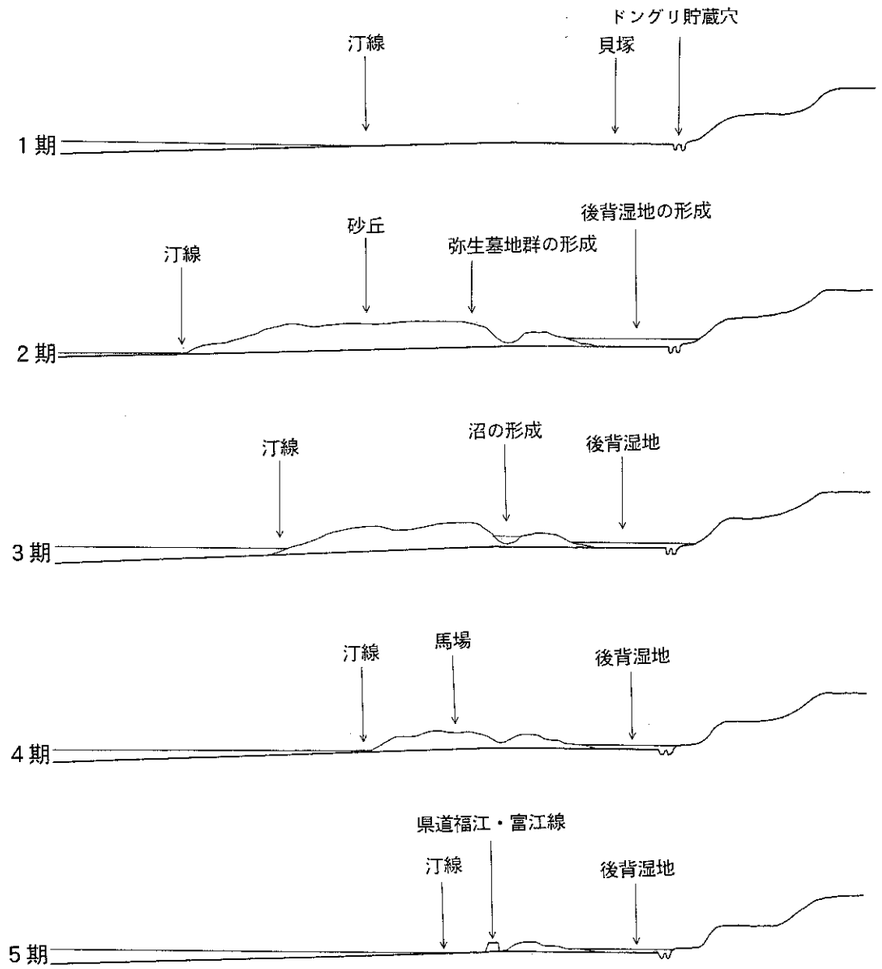
この時期に急激な海退がおこり、砂丘が形成される時期である。このことは５層とした晩期直上に４層とした砂層が厚く堆積していることから、縄文晩期以降の海退により陸化した部分に砂丘が形成されたことが考えられる。出土遺物のなかには縄文晩期の突帯文土器・板付Ⅰ式土器などの遺物は見られないことからこの時期のおいて砂の供給がピークをむかえたと考える。砂丘の形成がおさまったのは、砂丘上で墓地が設営され始めた時期であろうと考えている。砂丘の北東側では、砂の供給が始まった段階で徐々に後背湿地が形成されていったであろう。弥生時代の生活の場としては、周辺が湿地や砂丘であることから、遺跡の東南側である溶岩台地上（現在の集落部分）を考えている。

３期　古代・中世

砂丘に形成された窪地に水が入り込み、沼地を形成する時期である。弥生時代に作られた配石墓がこの沼地に沈んだかたちで検出されたことから、配石墓が作られた時期以降にこの沼が形成されたことは明瞭である。ただこの配石墓の時期そのものについては即断できないが、弥生時代の遺物の比率からすれば中期～後期、特に後期後葉にピークがあることから、この時期に沼地が形成されたと想定しておきたい。したがって古代から中世の時期に沼の形成があったと考え、この時期になんらかの目的のために沼地に遺物を投げ込んだものと思われる。

４期　近世

昭和63年に刊行された『大浜海岸沿革図誌』によれば、寛政十一年（1799年）、五島藩による流鏑馬が大浜村で催され、以後明治の中頃まで続いていたとされる。その場所が遺跡前方の浜で、現在より200m程先まで砂浜であったことが知られる。ただし、このころから砂の流出が激しく1847年には大浜代官峰何右エ門が護岸用の堤防を構築しており、競技用の馬場も湾の内側に設定せざるを得なくなっている。

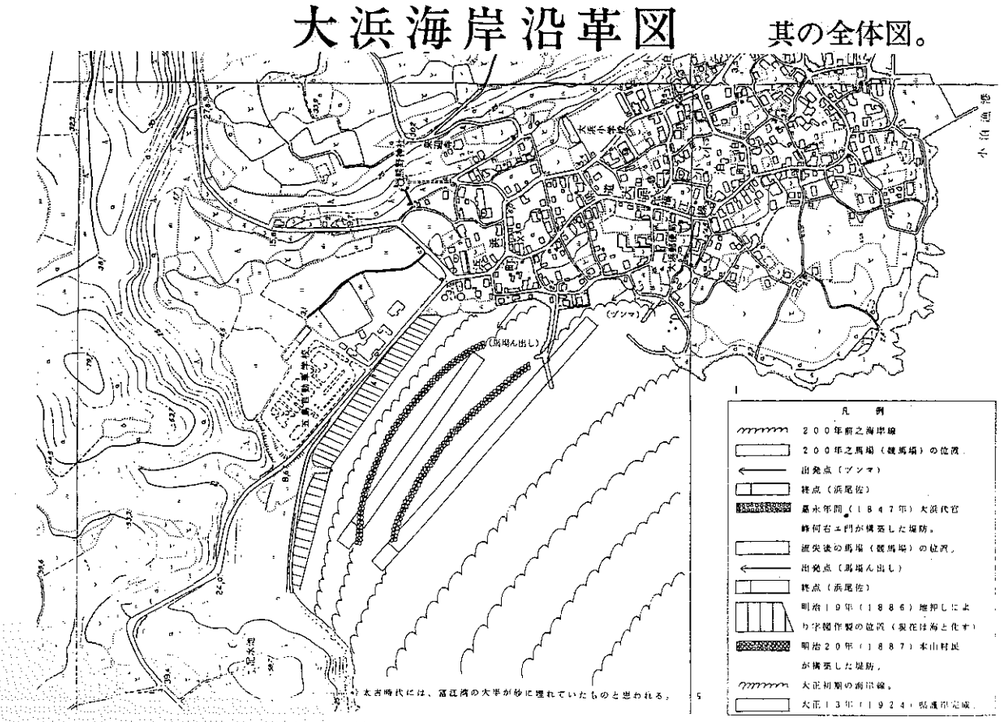


第８図　大浜遺跡古環境復元概念図

5期　現代

さらに砂の流失は激しくなったものと思われ、1887年、明治20年には本山村民により、さらに内側に堤防が構築されている。先の流鏑馬が明治時代にはおこなわれなくなったということも砂の流失と無縁のことではなかろう。また、『大浜海岸沿革図誌』には、江戸時代の護岸工事から明治の護岸工事までの40年間で、60mの砂が流失したと推定されている。砂の流失がいかに急激であったかがわかる。昭和35年（1960）の台風以前まで、100m先まで耕作地であったことも記載されていることから、近年において急速に砂丘の崩壊が進み現在に至っており、調査区である沼地の部分も半分消失してしまったものであろう。近現代における急激な温暖化現象が、大浜地区の砂の流失に大きく関わっていることが理解できる。

以上のことから縄文晩期（黒川期）以降に急激な寒冷な時期があり、海岸線の後退により陸地化した部分に砂が供給されたことが理解できた。また砂丘上で生活の痕跡が認められるようになるのは砂丘上の出土遺物から、弥生時代前期（板付Ⅱ）の段階であり、活動が活発化する時期を弥生時代中期から後期とした。また弥生時代の遺物のなかでも、後期の段階の遺物が多くなることから、弥生時代終末頃に砂の供給が少なくなったものと判断される。つまりこのころを境に温暖化が進み、海水面の上昇がはじまるものであろう。この縄文時代後期から弥生時代にかけての気候について甲元は、「4000年ぐらい前頃から、目立って気温が低くなったことが花粉分析によって知られています。」弥生時代については「こうした最悪の気候が少しよくなり」と解説している。（甲元・山崎1984）。



第９図　大浜海岸沿革図誌より転載

今回の調査でも土層の観察から同じような成果が得られた。このような状況は福江市白浜貝塚においても看取され、報告の中で「砂丘は、縄文時代後期には未発達の状態にあり、（中略）弥生時代前後、砂丘の形成は急激であったと考えられる。」とあり、本遺跡と同じような砂丘形成があったことが知られる（正林1980）。また、有川町頭ケ島白浜遺跡（古門1996）では、後期初頭の段階ですでに砂丘が形成し始め、形成期に作業の場としていたことが指摘されている。このことについても１期でふれたように、大浜遺跡の後方に位置する中島遺跡でも、小さいながらも砂層の堆積が認められていることから、後期初頭ころには寒冷期になり、地域の地形的な環境によって砂層の堆積の在り方が相違してくるという例を示しているのであろう。

［引用・参考文献］

安楽勉編　1980『白浜貝塚』福江市文化財調査報告書　第２集　福江市教育委員会

甲元真之・山崎純男　1984『弥生時代の知識』考古学シリーズ５　東京美術

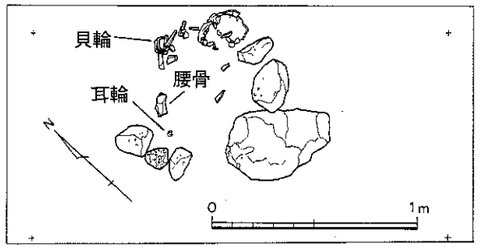
大浜地区浜友会老人クラブ連合会　1988『大浜海岸沿革図誌』

古門雅高編　1996『頭ケ島白浜遺跡』有川町文化財調査報告書　第１集　長崎県有川町教育委員会

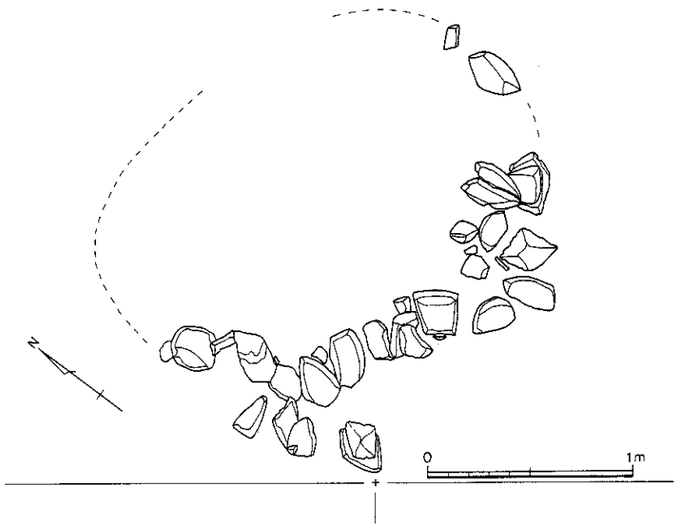
Ⅳ．遺　構（第10・11図）

１．配石遺構

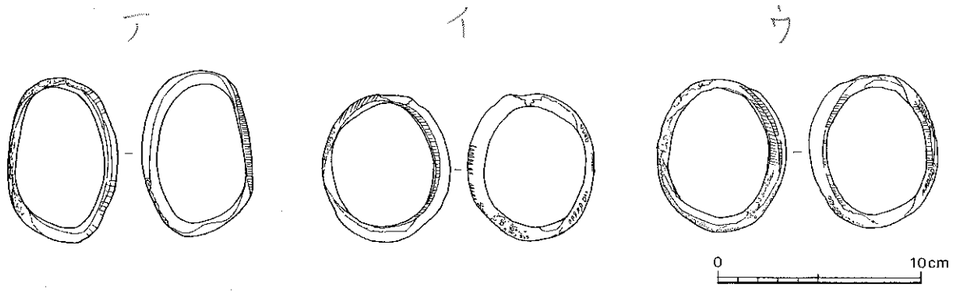
試掘調査で配石遺構が１基（１号配石墓）、また、本調査でも配石遺構状のものが１基（２号配石墓）出土している。1964年の調査地点が砂丘上に位置するするのに対し、それより約50東側の砂丘の窪地に形成されている。試掘調査で確認された配石遺構は、遺構内に大腿骨２点があったのみで詳細は不明である。また配石内から貝輪３点が出土しており、副葬品と考えられる。配石は欠落しているが、東西に長い楕円形を呈し、内部には石を入れない。この配石は第11図１号配石墓砂丘の窪地底部付近に形成されたもので、長径側を窪地のコンタ上に乗せ、短径側は窪地の底面側に向けやや傾斜する。配石は、20～30cm大の扁平礫や溶岩塊を



第10図　Ｂ－２区検出の２号配石墓



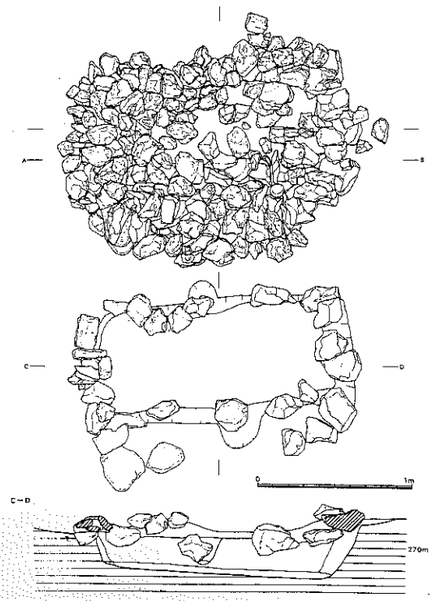
第11図　Ａ－５区検出の１号配石墓



第12図　１号配石墓出土の貝輪実測図（1/3）

配置している。配置した石の下のレベルで砂地に達することから、穴を掘ることなく遺体を埋葬したことが理解できる。遺物としては先の貝輪のほかに、弥生の丹塗壷や須恵器、あるいは中世土師器などが散在するかたちで出土している。このような状況は、１号配石墓が単に遺体の周りに石を並べただけという状況をよく物語っており、その後に多くの遺物が混入したものと思われる。

本調査でも窪地傾斜面に１体の人骨を確認した。人骨は頭部から腰の部分までの骨が残っており、特に頭部と腕の部分の骨の残りは良好であった。他の部分については散在している状況であった。まわりに石があったものの試掘で出土した１号配石墓ほどの整然性はなく、配石とするには疑問が残る。出土人骨は、腕を折り曲げた状態で、右腕に２つの貝輪が装着されていた。肋骨は存在しなかったが、腰骨が一部残存しておりこの付近から金属製の耳環が出土している。この耳環は本来鍍金等を施していたものと思われる痕跡がある。耳環については、1964年の同志社大学調査時においても配石墓周辺から出土しており興味深い。現時点では耳環の帰属する時期については、周辺からの他の遺物との出土状況から考えても、即断はできないものと思われる。



第13図一本木遺跡集石墓実測図

これらの遺構については、弥生時代のものと考えることが妥当であろうが、弥生中期に属するのかあるいは後期に属するかについての即断は避けたい。1964年の大浜遺跡の遺構についても「遺構のなかには古墳時代に下るものもあるのではないか」（宮崎1995）との捉え方もある。一つには遺構の在り方に対し、遺物の出土状況は時代幅があり慎重を期さなければならないという観点からであろう。土層からみた環境復元の項でも記したようにこれら二つの配石遺構は、沼状遺構の中に形成されていた。このことから沼はこの配石遺構を構築したあとに形成されたことに相違ないが、配石遺構の時期決定そのものは現在の段階では慎重を期さなければならない。沼の形成が弥生時代のどの段階かはわからないが、ここでは大きく弥生時代の配石墓構築以後とし、弥生時代後期以後としておきたい。

弥生時代の墓制のなかで、今回のような配石だけをしたケースは極めて珍しい例であるが、これは先に同志社大学が調査した地点の配石墓の状況と同じであり、特徴として、数個の礫を人骨の周りに方形状に配列しただけで、墓坑をもたないと言うことである。ただし、これについて宮崎は「軟弱で締まりのない砂地に直葬されるため、墓坑がのこらず（中略）広義の意味で土坑墓としてとらえてよい」として土坑墓と同列で扱っている（宮崎1995）。ここではあくまでその特徴である配石を重要視し、配石墓の名で扱った。この配石墓は、同志社大学調査地点でも確認されている。また、同志社大学調査地点では人骨の下に石を敷く、敷石遺構も確認されており、この二種において時間的な隔たりがあるかどうかについても再考する必要があろう。このような墓制に近いものとして、福江市の一本木遺跡で確認された集石墓がある。この墓の構築方法についても報告中では例がないとしている。この集石墓は、形状は方形を呈し、全体に礫を入れて墓坑をもつなど大浜遺跡の例とは異なり、時期としてはその副葬品から、弥生時代後期中葉頃とされている（寺田1993）。この形態について宮崎は「対馬や朝鮮半島の積石塚との類似点が看取され」とし、広域な交流を推察している（宮崎1995）。五島列島の福江島では現在のところ、配石墓、甕棺墓、集石墓以外の墓制は確認されていない。今後石棺墓等も確認される可能性は大きいが、現在のところでは、福江島の弥生時代の墓制については他と違った構造をもち、今後この墓制の在り方が、どこから派生したのかについてさらに追求する必要があり、石棺墓等が確認されていないことなども福江島の大きな特徴として併せて再考する必要がある。

［引用・参考文献］

寺田正剛編1993『一本木遺跡』福江市文化財調査報告書第７集　　福江市教育委員会
宮崎貴夫1995「五島列島の弥生・古墳時代の墓制と文化」『風土記の考古学』５　肥前国風土記の巻　　同成社

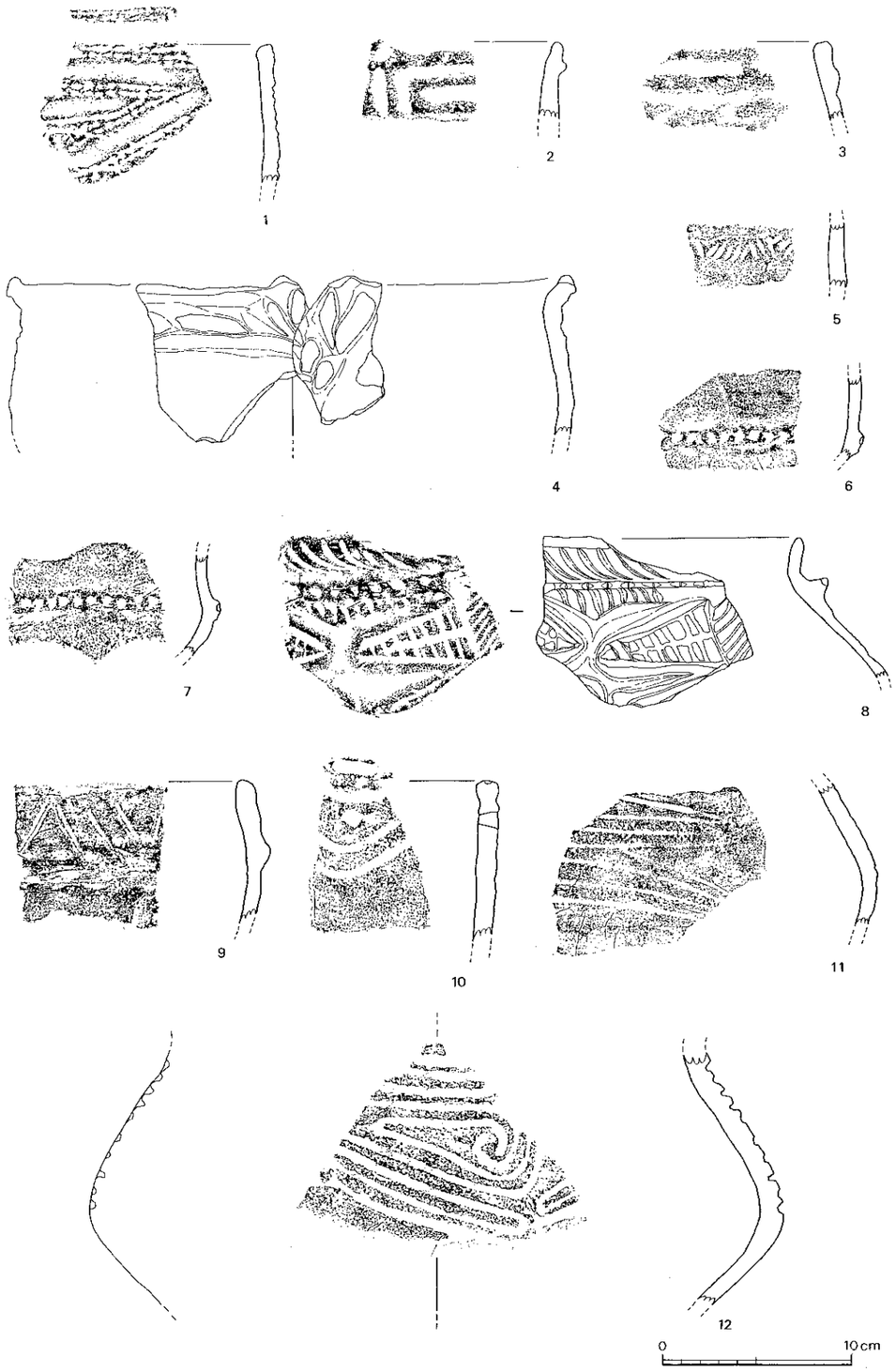
V．遺　物

1．Ⅴ・Ⅶ層出土の土器（第14図～16図）（註１）

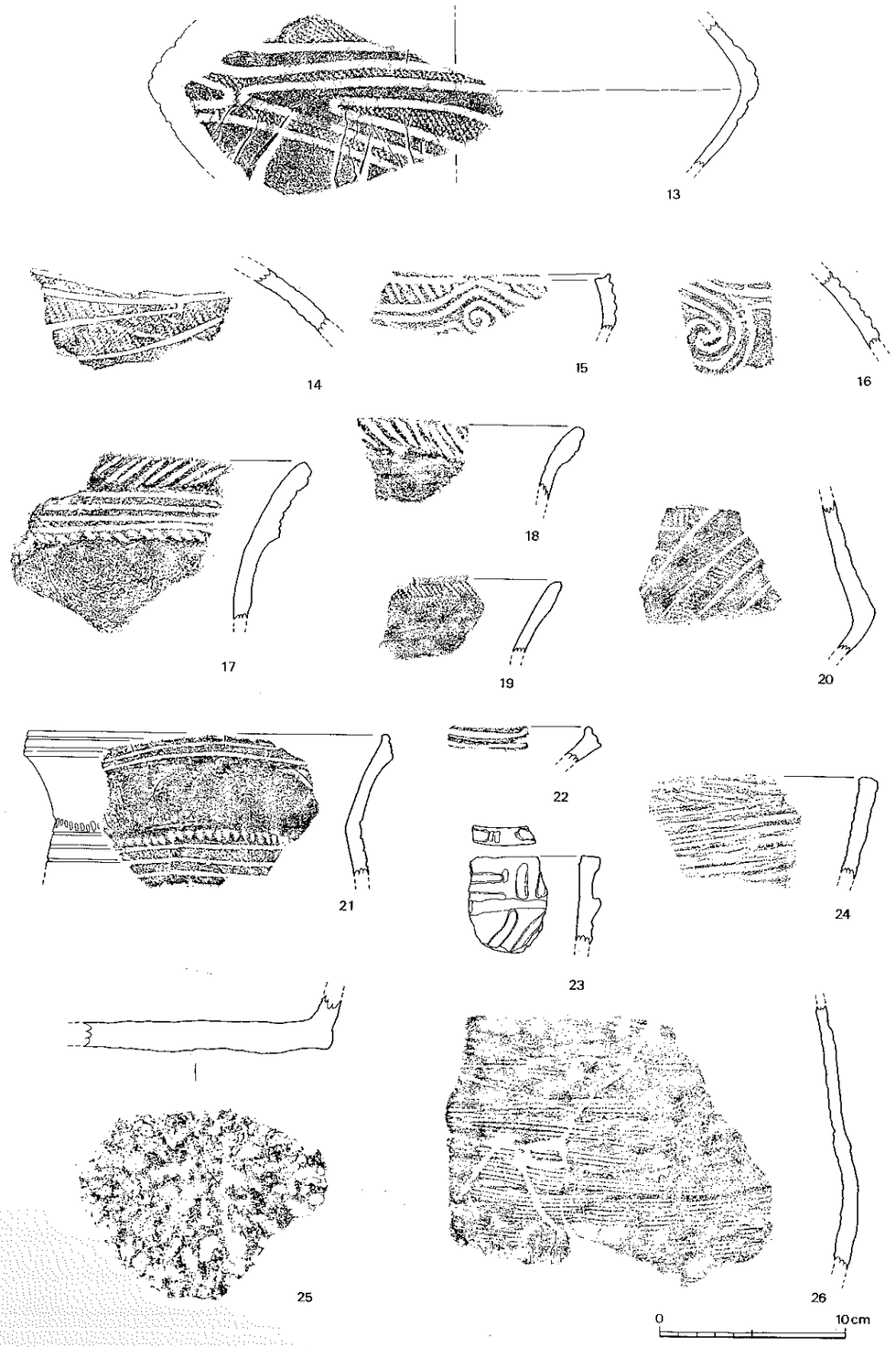
a．Ⅶ層出土の土器（第14・15図１～26）

Ⅶ層では阿高式系の土器から北久根山式土器を中心に出土しており、その主なものを図示した。

1は胎土に多量の滑石を混入した並木式土器の口縁部である。胎土は鉛色を呈し、外面口唇部直下に三条の刺突文を並行して入れ、体部は刺突により三角文を描く。文様を入れた後に指頭による区画を入れる事から並木Ⅱ式に相当するものであろう。口縁部にも二条の刺突文を連続して入れている。**2**・**3**は阿高式系土器の口縁部で分厚い器壁外面に厚めの沈線が入る。**2**は口縁部に突起を有し、雷文を入れている。**4**は坂の下系の土器で、口縁部が外反し、体部を内湾させて深鉢状になる。口縁部直下に二条の凹線文を入れ、四隅あるいは二隅の口縁部に山形状の突起を付け、その直下は太い凹線によって文様をつけている。器表面には炭化物が付着している。**6**・**7**は胴部下半の屈曲部を突帯状に浮き上がらせ、その上に深いＤ字形の刺突を入れた出水式系の土器である。**5**は爪形のみで構成されており、後出のものか。**8**については、太鼓状に胴部が丸く張出し、口縁部が極端に外反する。口縁部直下に鍔状の突帯があり、突帯上に１～1.5cm間隔に深い刻目を入れている。口縁部と突帯の間には、棒状の施文具により左から右下に円弧状に等間隔に施文する。突帯直下には棒状施文具で縦に文様を入れ、その下に左右対称のコ⊂の文様を棒状施文具で削り出した後、指でナデて浮き上がらせているようである。また、区画の中も棒状施文具で三角形を描き中央部に沈線を入れ、それに直口するように沈線を入れて四角い区画を作り出している。この部分の横には斜めに沈線を入れた部分もあり、さらにコ⊂の文様帯の下の部分にも文様があることから、器面全体にかなり複雑な文様帯があったものと考えられる。コ⊂の文様はこれを一組の文様帯として、四組あったものと推定され、基本的には四分割された文様の組合わせから文様が構成されていたのであろう。口縁部の文様からは出水式土器の影響が看取できるが、鍔状の突帯の在り方や突帯部に刻目を入れること、文様の構成の在り方など折衷的な色合いが強い。**9**は、口縁部下に浮線をもち口縁と浮線の間に鋭い工具で山形、谷形の文様を描くもので、出水式系のものであろう。**10**は口唇部に沈線を入れ、その周りをリングの粘土帯で取巻いて装飾している。外面直下には装飾部を意識したようにＵ字形に沈線を入れ、その下には穿孔している。穿孔の下には二本の沈線をＵ字状に描き、その間に擬縄文が施されている。文様は胴部上半部に集約されているようだ。**12**～**17**は鐘崎式系の土器である。**11**は胴部屈曲部にあたる部位で、下半部は文様がなく、上半部に浅い沈線で三角形を描いた後に擬縄文を入れる。内面は貝殻による調整痕が見られる。器壁全体にカーボンが付着する。**12**は器壁全体が肥厚し、沈線も四角い棒状工具で深く施文している。沈線間には擬縄文を充填させており、蕨手文を中心として文様を構成している。**13**は**12**よりやや小ぶりで沈線は丸い棒状工具で沈線を描く。屈曲部下半部にまで施文しているが、蕨手文・渦文等の文様ないタイプである。**14**は**12**・**13**より堅緻で黒褐色を呈する。内面は貝殻による調整が顕著で、外面の縄文は他の擬縄文とは相違するＲＬ単節縄文である。**15**は口縁部を肥厚させ、口唇部に一条の沈線を入れてい



第14図　Ⅶ層出土の土器実測図（1/3）



第15図　Ⅴ・Ⅶ層出土の土器実測図（1/3）

る。外面は渦文を中心に上部には斜行する沈線が見られる。胎土は暗灰色を呈し、砂粒を多く含む。17～20は北久根山式系の土器を取り上げた。17・18は口縁部を肥厚させ、口縁直下に斜行沈線を、17はその下に並行沈線四本とそれに平行させて浮線上に斜めに刺突を入れる。19は口縁部のやや肥厚した部分に擬縄文を施すが、それ以外は文様はない。20は深鉢状の胴部屈曲部で、屈曲部上半部に斜行する沈線と平行する沈線によって区画し、その間に擬縄文を施している。21・22は三万田式土器の深鉢である。21は口唇部に二条の沈線、屈曲部に刺突を入れ、その下に三本の沈線を入れる。胎土は黒茶褐色を呈し、石英粒や雲母片を混入する。

24は粗製深鉢の土器である。胎土は暗灰色を呈し、石英粒を多く含む。口唇部はナデ整形をおこない外側にやや肥厚させる。胴部はほぼ直行するものと思われる。晩期に属する可能性もある。25は鯨骨の圧痕を持つ底部である。このような資料は、阿高式系の土器に多くみられることが知られているが、本資料もその時期に属するものと考えられる。

b．Ⅴ層出土の土器（第15・16図）

Ⅴ層は晩期、黒川式の段階の土器の単純層と考えられる。

26は胴部下半でやや屈曲する大形の深鉢である。外面上部は板状の工具による粗い縦の成形を、左から右に向かっておこなう。下半部は横に成形している。内面は貝殻による明瞭な横方向の条痕が認められる。焼成は良好で、胎土も後期土器に比べ精良である。27は口縁部付近で外湾するもので、堂込秀人の黒川式土器編年で言えば深鉢Ｅ類に属し中様式の段階のものであろう（堂込1997）。28はリボン状突起を口唇部にもつ、深鉢形土器で、26と同様に外面は板状の工具で下から右方向に整形している。内面は丁寧に横方向に整形しており、26のような明瞭な貝殻条痕は認められない。胎土は明黄色を呈し、外面にはカーボンが上半部を中心に厚く付着する。また、中央部に葉の圧痕が認められる。

今回出土の縄文晩期の土器は、粗製の深鉢で占められ、精製土器いわゆる黒色磨研土器の出土がなかった。ただし、中島遺跡の報告中には数点の黒色磨研土器が存在しており、土器の器種による使用の場が相違することを示唆するものではないだろうか。

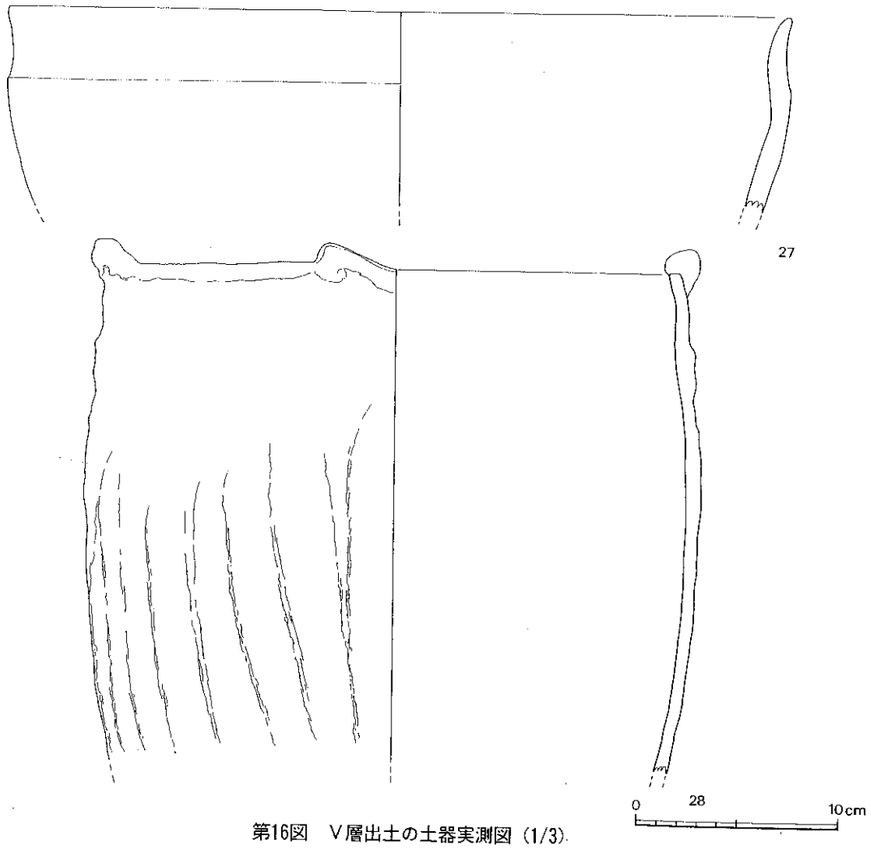
以上のことから、Ⅶ層からは古くは並木式土器が数点出土し、三万田式土器までの出土をみる。そのなかで主体となるものは鐘崎式土器・北久根山式土器の一群で、先の中島遺跡の報告(正林・村川1987)とも照合する結果を得ている。阿高式系土器～北久根山式土器の一群は、西北九州の海岸部では同一遺跡の中で出土する場合が多く、九州の縄文中期における阿高式土器や後期後半とされる三万田式土器などがほぼ単一で出土する状況とは一線を画する。おそらく縄文後期前葉から中葉における海を介しての頻繁な交流が、多くの文化の流入を生み、土器の多様さにも反映されているのではないだろうか。また、縄文晩期でも黒川期以降の遺物は中島遺跡の例をみても皆無であり、次の板付Ⅱ式土器の出現段階までは中島遺跡を含めた大浜地区の空白期間となっている。このことは先に環境復元の項で指摘したように、突帯文土器の時期から板付Ⅰ式土器の間に急激な砂の供給があり、生活するにふさわしくない状況であったことにその要因があったものと理解している(註２)。

註１　ここに図化した土器は、文様をもつものを主体としたが、出土土器のほとんどは貝片を混入する粗製の深鉢土器である。富江町の宮下貝塚（賀川1968・1971）や福江市白浜貝塚（安楽1980）においてもこの傾向は顕著であり、在地の後期土器の特徴として捉えられるようである。ただこの土器は、崩れ易く細片になる率が高いため、ここでは取り上げていないことを付け加えておく。

註２　中島遺跡の報告で、突帯文Ⅲｃ類として突帯文土器があげられているが、遺物をみるかぎり御手洗式土器であり、現在のところ突帯文土器の出土は大浜遺跡、中島遺跡とも皆無である。

［参考文献］

賀川光夫編1968『宮下遺跡調査報告』図録篇　長崎県文化財調査報告書　第７集　長崎県教育委員会
賀川光夫編1971『宮下遺跡調査報告』解説篇　長崎県文化財調査報告書　第９集　長崎県教育委員会
安楽勉編1980『白浜遺跡』福江市文化財調査報告書　第２集　福江市教育委員会
山崎純男・島津義昭1981「九州の土器」『縄文文化の研究』４　雄山閣出版株式会社
安楽勉・藤田和裕1985『名切遺跡』長崎県文化財調査報告書　第71集　長崎県教育委員会
大城康夫編1986『戸板遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会
村川逸朗・正林護1987『中島遺跡』福江市文化財調査報告書　第３集　福江市教育委員会



第16図　Ｖ層出土の土器実測図（1/3）

同志社大学編1990『伊木力遺跡』多良見町教育委員会
福田一志編1997『伊木力遺跡』Ⅱ長崎県文化財調査報告書　第134集　長崎県教育委員会
堂込秀人1997「南九州縄文晩期土器の再検討」『鹿児島考古』第31号

Ｖ層出土の土器実測図（1/3）

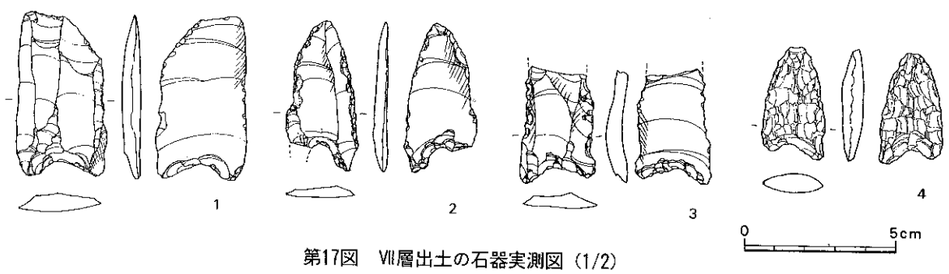
c．**石器**（第17・18図１～13）

Ⅶ層、Ⅴ層の包含層はその土器の出土状況と層の状況から分離したが、Ⅴ層の層厚が薄く石器については積極的に分離することは困難を極めた。また、Ⅴ層の分布範囲が土器の出土状況から、北側の範囲に集中し、南側ではⅦ層のみとなることから、単純ではないが、石器についてはそのほとんどがⅦ層に帰属するものとして報告する。

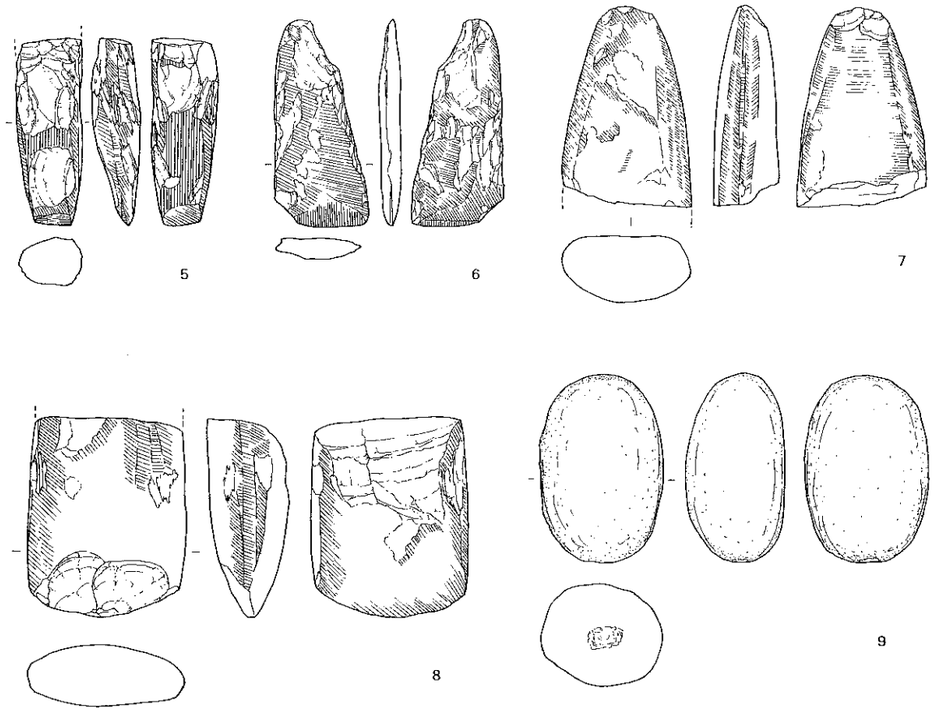
Ⅶ層から出土した土器は鐘崎式・北久根山式土器出土を主体としていることから、出土した石器も、この中に包括される石器群として捉えられよう。この時期の石器は、西北九州沿岸では、独特の石器群を持つことで知られている。すなわち、剥片鏃・石鋸・石銛等の出土であり、骨角器も豊富に出土するなど、この時期に一大漁業文化を形成したとされる。今回出土の石器は剥片石器としては、**1**～**3**のような大形剥片鏃（註１）が３点出土しているのみであるが、大浜遺跡の一部と思われる中島遺跡でも、石鋸・剥片鏃等が出土しており、この時期の剥片石器の特徴をよく示している。図化した３点の剥片鏃は大形のもので、この手の大形剥片鏃は、五島富江町の宮下貝塚（註２）や、対馬峰町の佐賀貝塚などに類例がある（正林1989）。大形の剥片鏃については、石銛としての機能が考えられているが、**1**のように先端部が平坦で加工がなされていないものもあり、機能的に再考する必要があると考える。**4**は、トロトロ石器で器表面が摩滅した状況を示し、脚が外反する。この種の石器は縄文早期のものとして捉えられており、周辺に早期の遺跡が存在する可能性を示唆する資料として注目される。礫石器は、石錘・叩石・石斧が出土している。**5**・**6**・**8**は頁岩製のもので、**5**は方柱状に作りだし、刃部も丁寧に研磨している。**7**は蛇紋岩製である。**9**・**10**は叩き石。**11**～**13**は石錘である。中島遺跡出土の礫石器をみても、石斧の出土量が多く、乳棒状石斧や定角式石斧などがあり石斧の割合が多いことが知られる（川道1997）。また、先述した佐賀貝塚においてもこれを上回る膨大な量の石斧が出土していることなどから、この時期の石斧や、礫石錘にたいする依存度が高かったことが理解される。また宮下貝塚の集積石斧は、石斧の重要性を裏付ける遺構であろう。

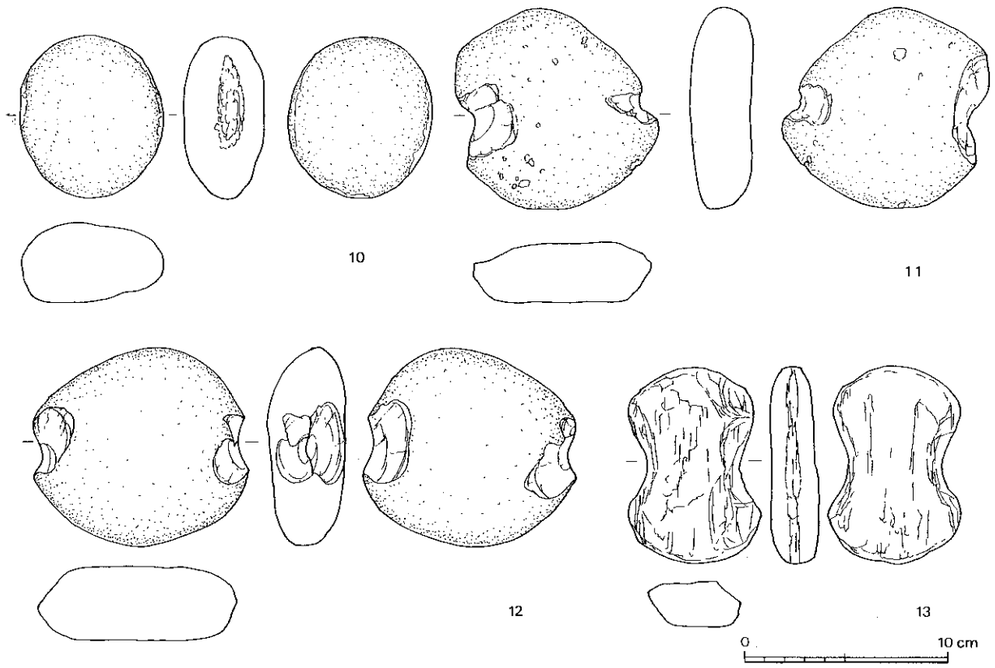
註１　ここで言う大形剥片鏃については現在のところその根拠となるものはないが、幅が2.5cm内外か、長さ５cm内外ものを指しており、将来的に分類しなければという漠然とした考えを持っている。

註２　『宮下遺跡調査報告』解説篇では３～４点出土しており、1996年の長崎県文化課の宮下遺跡の調査によっても大形剥片鏃が出土していることを川道寛から教示を受けた。いずれの大形剥片鏃も先端部が切断したような折れをもつことが特徴的であり、これが使用による折れなのか、最初から別の用途のために折ったものか興味深いところである。



第17図　Ⅶ層出土の石器実測図（1/2）





第18図　Ⅶ層出土の石器実測図（1/3）

d．骨角器（第19図１～14）

Ⅶ層は、粗い砂で構成され、やや潟に近い層であったため、骨角器の残りも良好であった。**1**・**2**は、あわびおこし状の骨角器である。**1**はほぼ完形に近いもので、図左側の中央下半部は丁寧に加工し方形状に作り出すが、上半部は握りやすいように窄めて、やや丸めに作り出す。裏面は平坦に加工し、刃先は片刃状になる。**2**は、上半部が欠損しているが**1**と同様に、裏面を平坦にし、やや片刃状に作り出している。２点とも鯨の骨を使用したものである。福江市白浜貝塚や、壱岐郡勝本町カラカミ遺跡からも同様なあわびおこし状の骨角器が出土しており、縄文～弥生時代にかけての一般的な漁撈用品であったことが理解できる。**3**～**6**・**8**はヤスである。**3**は、エイの尻尾を利用したもので、尻尾の棘をかえりとしてそのまま使用している。先端部、側面をよく研磨し、中央部は緊縛するための凹部を作り出している。**4**～**6**・**8**は鹿角製のもので、先端部を中心によく研磨しており、**5**などは、**3**と同様に胴部に凹部を作り出している。**6**については、後述の逆Ｔ字型釣針の可能性もある。**9**は鹿角製で、一端に小穴を穿ち全面研磨している。側辺の研磨は直に近く、下端部の穿孔部分は別のものと結合するためと思われる水平に削り出された面をもつ。**7**は逆Ｔ字型釣針である。中島遺跡の報告でも３点が確認されているもので、中央部に明らかな抉りが認められる。**10**は、イノシシの牙製の垂飾品と思われ、牙の中央に抉りを入れている。全体的につるつるした感があり、磨きをいれたことも考えられる。小形のイノシシの牙を使用している。**11**・**12**は大形のイノシシの牙を使用したもので、削り痕や研磨痕が見られる資料である。用途については不明であるが、佐賀貝塚の例を見れば、逆刺のついた釣針の可能性も考えられる。**13**はベンケイ貝製の貝輪である。**14**は、シカの角幹を断面四角形状に加工した骨器である。四方を削りだした他は、細部調整はみられないため、何を意図したのか不明だが、角幹部を調整加工し角の先端部を残すものとして、中島遺跡で出土している異形骨角器に類似する。使用している角は小さいことから、子鹿の角を加工したものと思われる。

縄文後期の骨角器については、白浜貝塚・宮下貝塚・中島遺跡で多数出土しており、本遺跡と同様にヤス・逆Ｔ字型釣針などで構成される。

［参考文献］

賀川光夫編1968『宮下遺跡調査報告』図録篇　長崎県文化財調査報告書　第７集　長崎県教育委員会

賀川光夫編1971『宮下遺跡調査報告』解説篇　長崎県文化財調査報告書　第９集　長崎県教育委員会

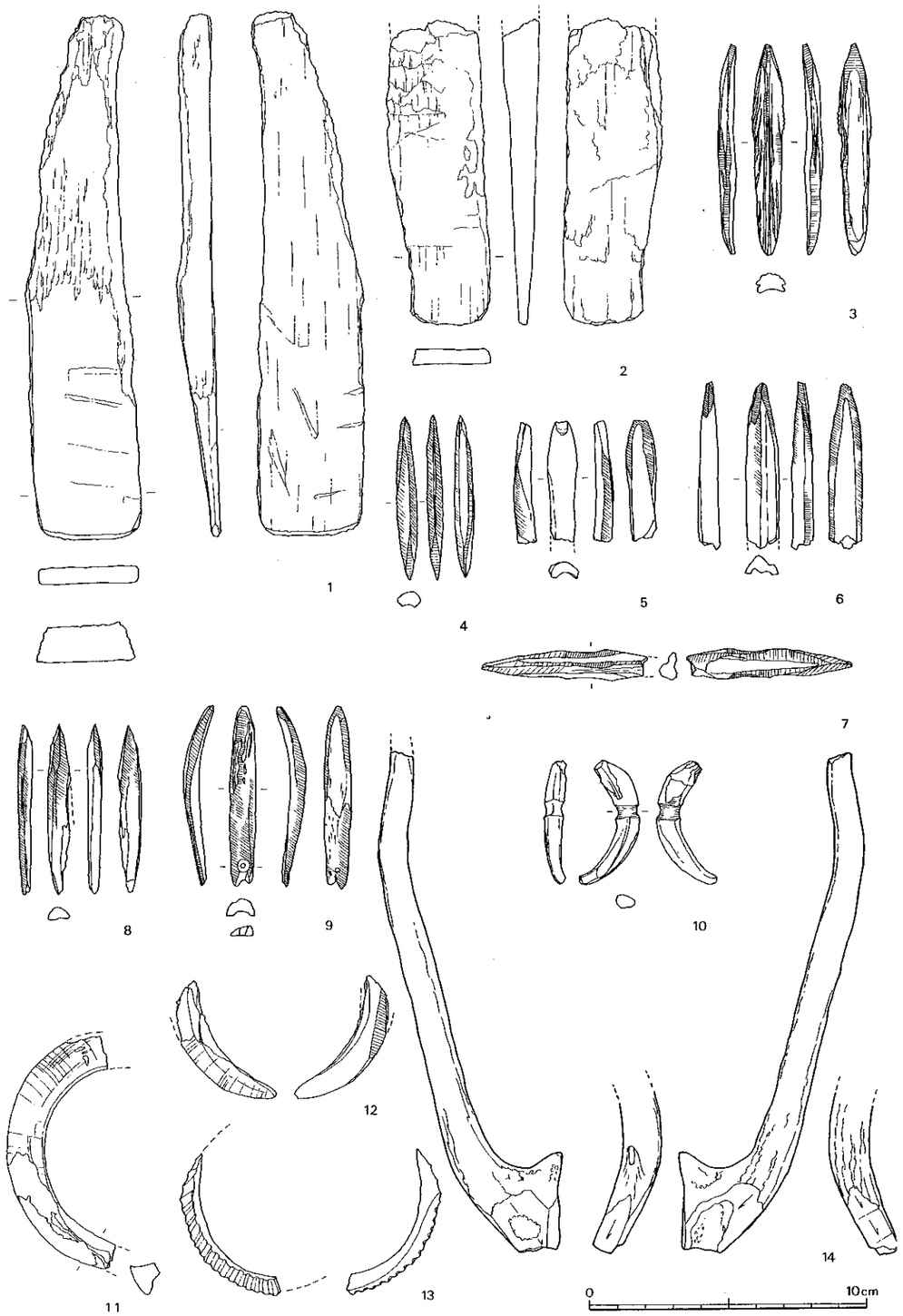
村川逸朗・正林護1987『中島遺跡』　福江市文化財調査報告書　第３集

福田一志編1997『伊木力遺跡』Ⅱ　長崎県文化財調査報告書　第134集　長崎県教育委員会

川道寛1997「中島遺跡」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書』Ⅴ　長崎県文化財調査報告書　第133集

甲元眞之1997「黄渤海沿岸地域の先史時代漁撈文化」『先史学・考古学論究』Ⅱ
熊本大学文学部考古学研究室創設25周年記念論文集　龍田考古学会

甲元眞之1997「朝鮮先史時代の漁撈文化」『古文化談叢』第39集　九州古文化研究会

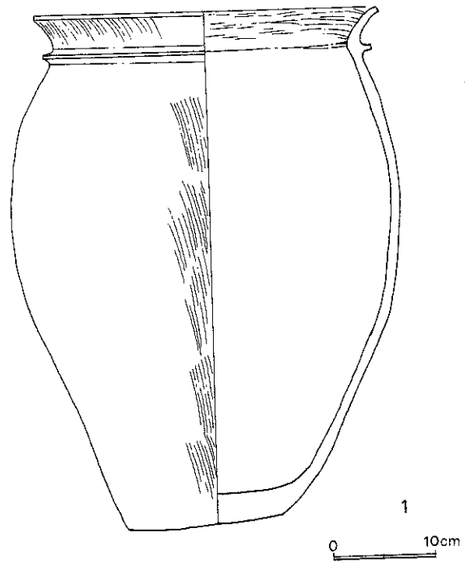


第19図　Ⅶ層出土の骨角器実測図（1/2）

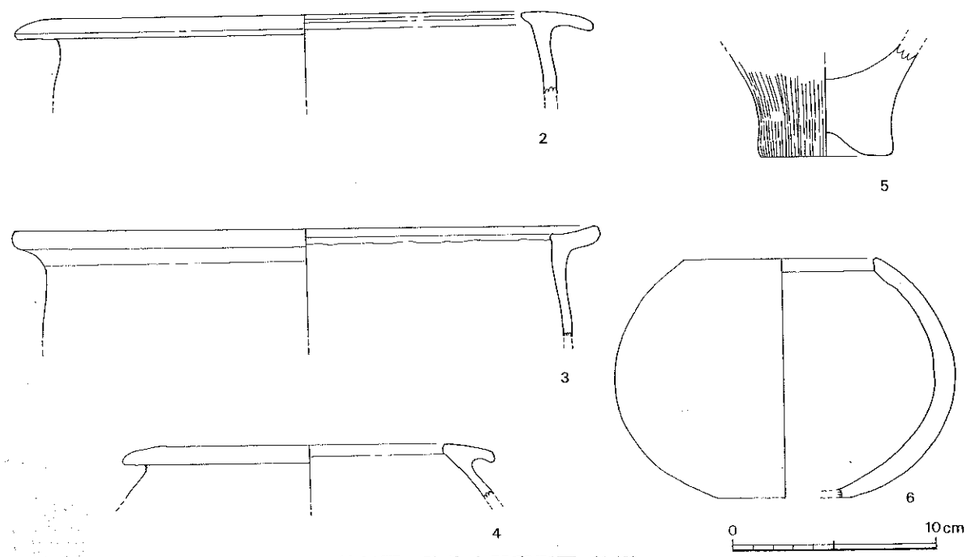
2．沼地出土の遺物（第20図～39図）

a．弥生土器（第20図～22図１～15）

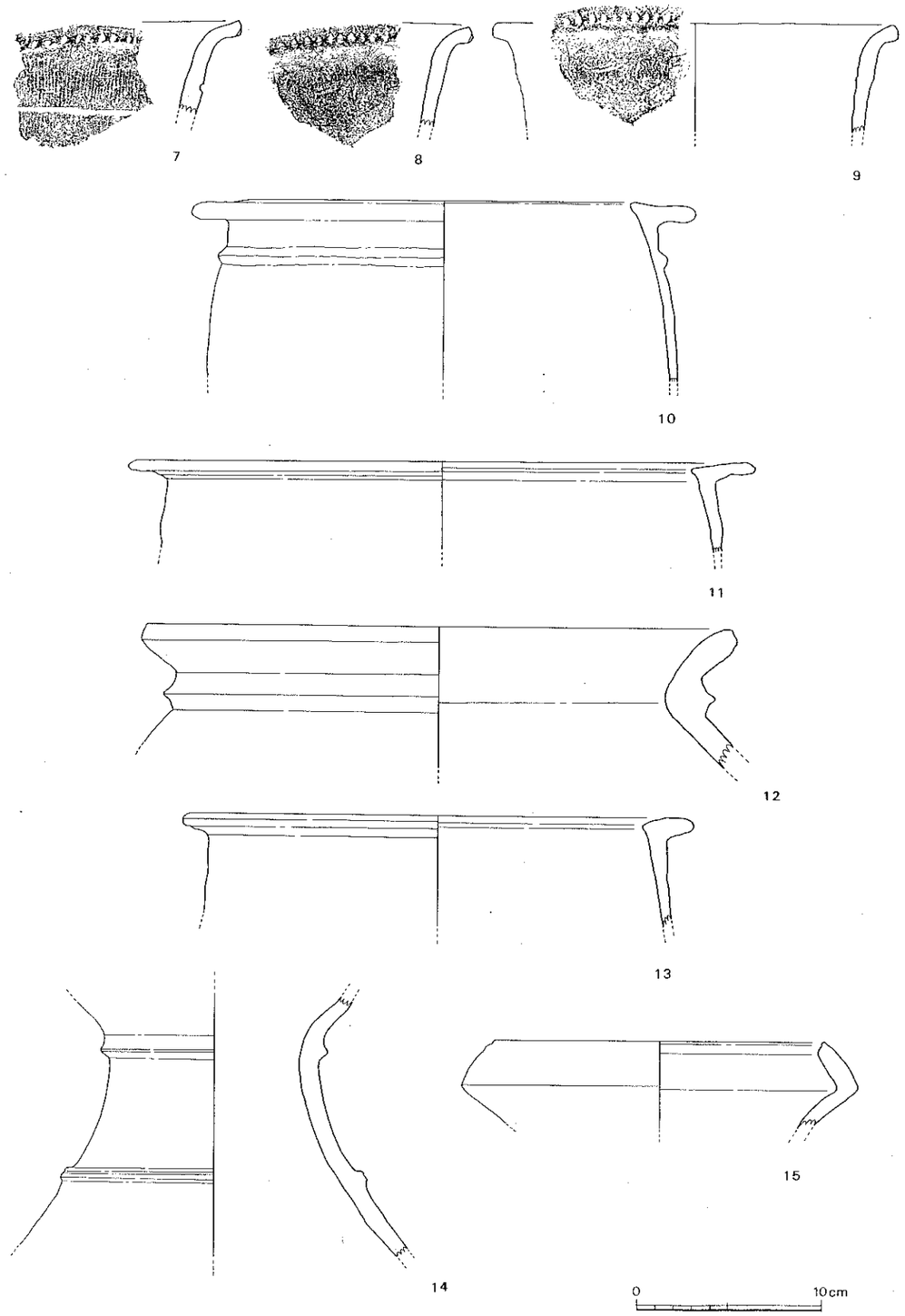
１はＺ－７区の沼地との境の砂上から単棺で潰れた状況で出土した。口縁部直下に一条の細い突帯をもち、口縁部が外側に開く。底部は平底であるが、やや丸みをおびている。口縁内面を横方向に胴部外面全体に縦のハケ目調整をおこなう。後期前半ころのものであろう。後期の資料として、第21図、６の無頸壷、第22図、12の甕、15の複合口縁のものなどがある。中期のものとしては２の鋤先状口縁をもつ甕がある口縁は外側に垂れ下がり須久式のなかでも時期的には下がるものであろう。５は外面全体に縦にハケ目が入り、底部は上げ底状になることから、城ノ越タイプのものと思われる。また14の複合口縁の壷についてはは、第21図の２、第22図10の甕、14・15の袋状口縁を呈する壷などがある。また、板付Ⅱｂ式に属する第22図７・８などがあるがこの２点のみである。



第20図　弥生土器実測図（1/6）



第21図　弥生土器実測図（1/3）



第22図　弥生土器実測図（1/3）

b．須恵器（第23図～29図１～111）

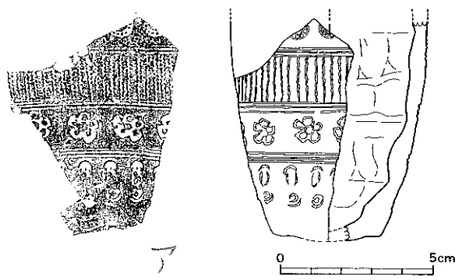
沼地出土の遺物の中で主体となる遺物は須恵器で、数千点出土している。ただし、小破片の数が多いということも数の多さにつながっていることは事実である。出土点数に対し、接合できるものや図上復元できるものが少ないこともこのことを裏付けている。小破片が多いということについては、意識的にこの場で破砕して投棄したのか、あるいは単に他の場所で破損したものを廃棄した状況でこのようになったのか二つのケースが考えられるが、ここでは遺物の説明にとどめ、この問題については別項で記すことにする。また各々の出土須恵器の胎土・焼成などには、かなり相違する部分があり、いろいろな地域の須恵器がこの地に運ばれてきたことを予見させる。

新羅系印花文陶器（第23図）

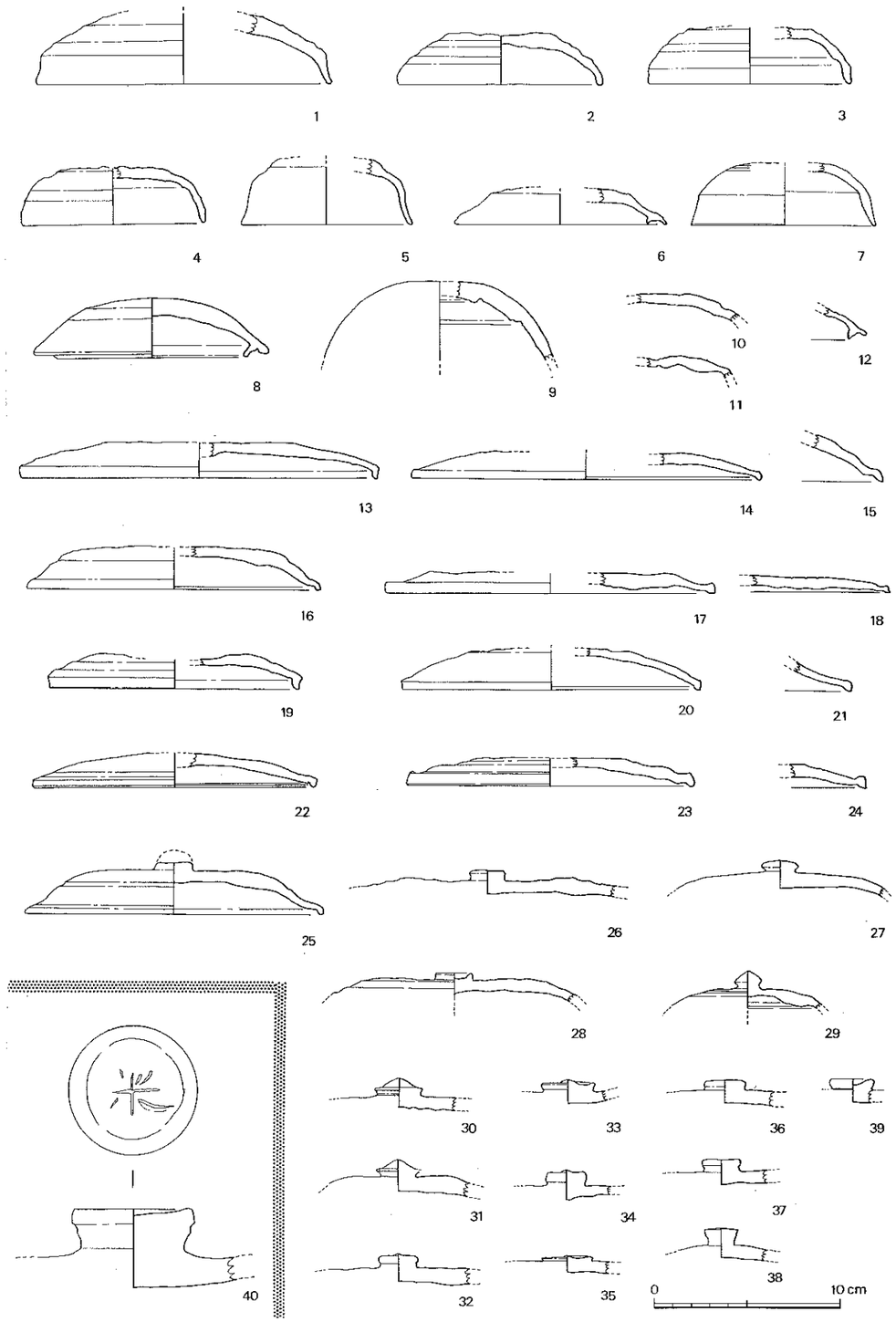
統一新羅系の印花文陶器５片が出土している。すべて同一個体と考えられる。徳利状を呈したものの胴部と考えられ、この胴部の径は約9.6cmである。外面は茶緑色を呈し、光沢があるが、内面は一度成形した後に２～３cmほどの粘土をさらに貼付け、その上から棒状のもので縦に押さえつけ、その後に等間隔で横にナデている。貼付けた部分は縦の押さえつけとその後の横のナデによって区画された中央部が焼成時に火膨れ状に膨らんでいびつになっている。胎土は暗灰色を呈し、黒色の鉱物を含む。外面には、他の破片などとも総合すると胴部の上部から順に三重沈線→縦長連続文（波線）→多弁花文→三重沈線→縦長連続文（波線）→三重沈線→多弁花文→沈線→馬蹄形文→馬蹄形文で底部にいたる。すべて沈線で区画した後にスタンプで文様を入れている。これらの文様構成は宮川禎一の分類によれば２式に相当する（宮川1988）。また縦長連続文の出現について「消極的ではあるが７世紀中葉頃に発明されたのでは」としている（宮川1988）。出土資料については、上部にある多弁花文についてはしっかりとした文様を成すが、下段の多弁花文はかなり崩れており、その下の馬蹄形文についてもかなり崩れたものになっている。ここでは７世紀中葉以降ということでとどめておく。

坏蓋（第24図１～40）

１～**12**は坏蓋の中でも天井部が比較的高いものを取り上げた。**１**は天井部の上部は鋭く回転ヘラ削りをし、口縁部付近では回転ヘラ削り後にナデ調整している。口縁部において強く屈曲し、口唇部を丸く納める。焼成良好で、灰青色を呈する。**２**～**５**は平坦な天井部から屈曲してまるみを帯びながら口唇部へと続くもので、第23図印花文土器**２**・**４**・**６**については天井部にヘラ記号があることでも共通する。その中でも４は胎土が茶褐色を呈し、稜線が丸く口唇部が内側にやや入る。また、**５**は天井部に最大厚があることを特徴とする。



第23図　印花文陶器実測図（1/3）



第24図　須恵器坏蓋実測図（1/3）

口縁部が立ち気味で鋭い稜線を持つ７はこの中でも古い時期に属するであろう。**6・8**は口唇部にかえりをもつタイプだが、**6**は天井部を平坦にし、**8**の天井部は丸く厚みがある。また**9**は極端に丸みをおびており内面に丸く削りを入れて段を作る。**10・11**は破片であるが天井部に鋭い回転ヘラ削りが認められることで共通する。これらの坏蓋器形的には小型化の傾向をもち、天井部にのみヘラ削りをおこなうことや、体部につてはナデ調整をおこなうなど舟山良一編年（舟山1993）によれば、Ⅳ期に該当するものと思われる（以下舟山編年を参考とする）。先に述べた特徴から**1～5**が６世紀末～７世紀前半、**6**は、Ⅴ期で７世紀前半として捉えられよう。これら**1～12**に共通することは先述したように天井部が高いこと、ナデ整形も残るが天井部に鋭い回転ヘラ削りの痕跡を残していること、またすべてではないが、その多くがヘラ記号をもつことである。

13～29は天井部が低く口唇部をほぼ丸く納めたものや、つまみを持つものを示した。これらのものは先に説明した坏蓋のような鋭い回転ヘラ削りの痕跡はなく、ナデ調整によって消されているため表面が平滑である。**13～29**の時期については、舟山のいうところのⅦ期以降であることはまちがいないようだ。つまり蓋のかえりが消える時期であり、天井部のヘラケズリがおこなわれなくなり、口径12cm～18cmにピークをもつとしていることから、ここにあげた資料はⅦ期の（８世紀後半）を主体とすると考えられる。もちろん図上復元の資料についてのことである。

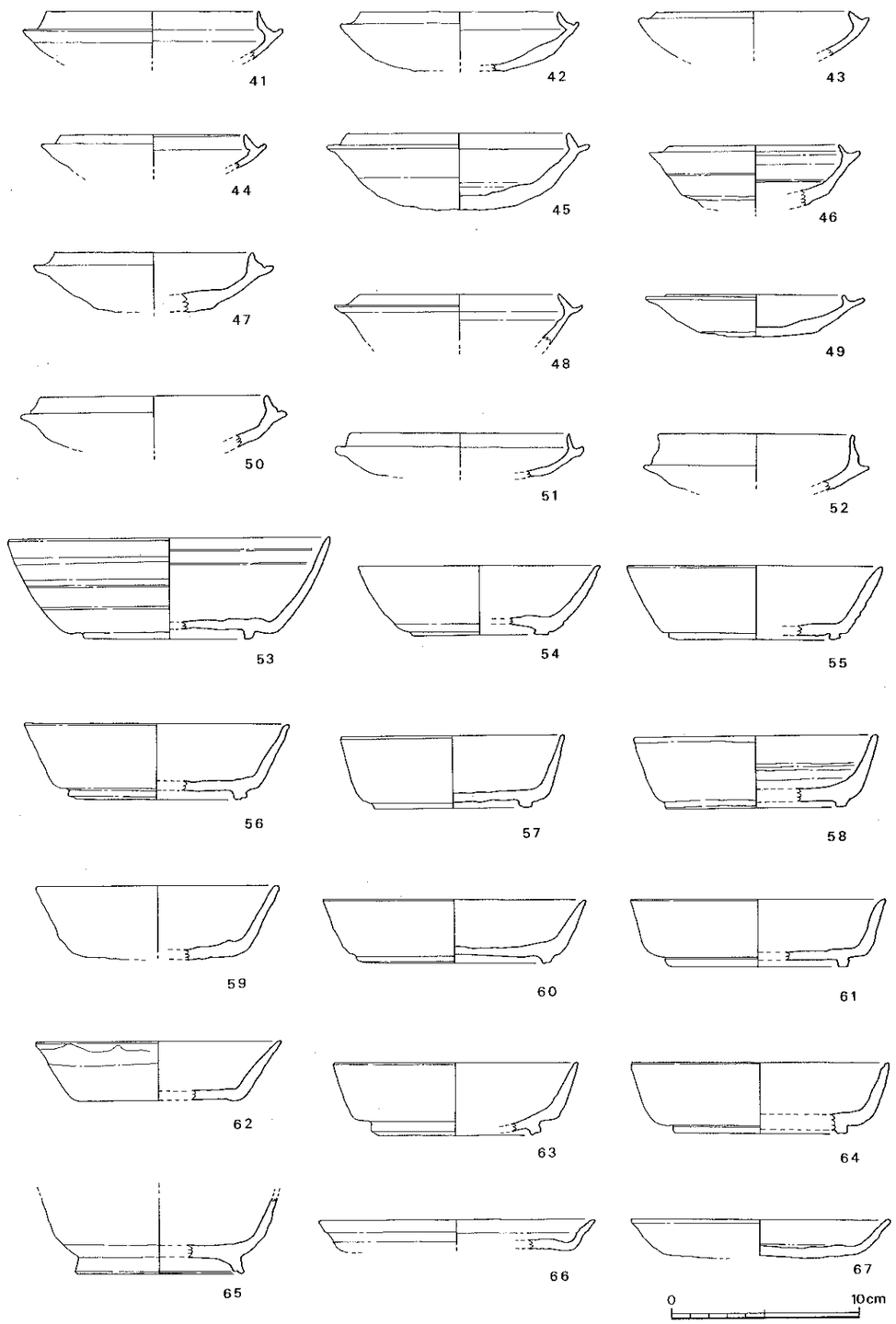
30～40はつまみをもつものを図示したが、**30・31**のような擬宝珠つまみのもの、宝珠が潰れたもの等バラエティーに富む。これらのつまみをもつものについては、**29**がⅤ期（７世紀前半）の可能性を示し、**30・31**はⅥ期（７世紀後半）、**33・35**などの宝珠が潰れたものについてはⅦ期（８世紀前半）、**36・37**が同じくⅦ期（８世紀前半～中頃）、**38**が同じくⅦ期（８世紀の後半）頃に編年できるであろう。**27**については９世紀初頭まで下る可能性もあるようだ。いずれにしても、つまみをもつものに対しては７世紀前半～９世紀代まで出土しており特に８世紀代を主体とするようである。

坏身（41～65）

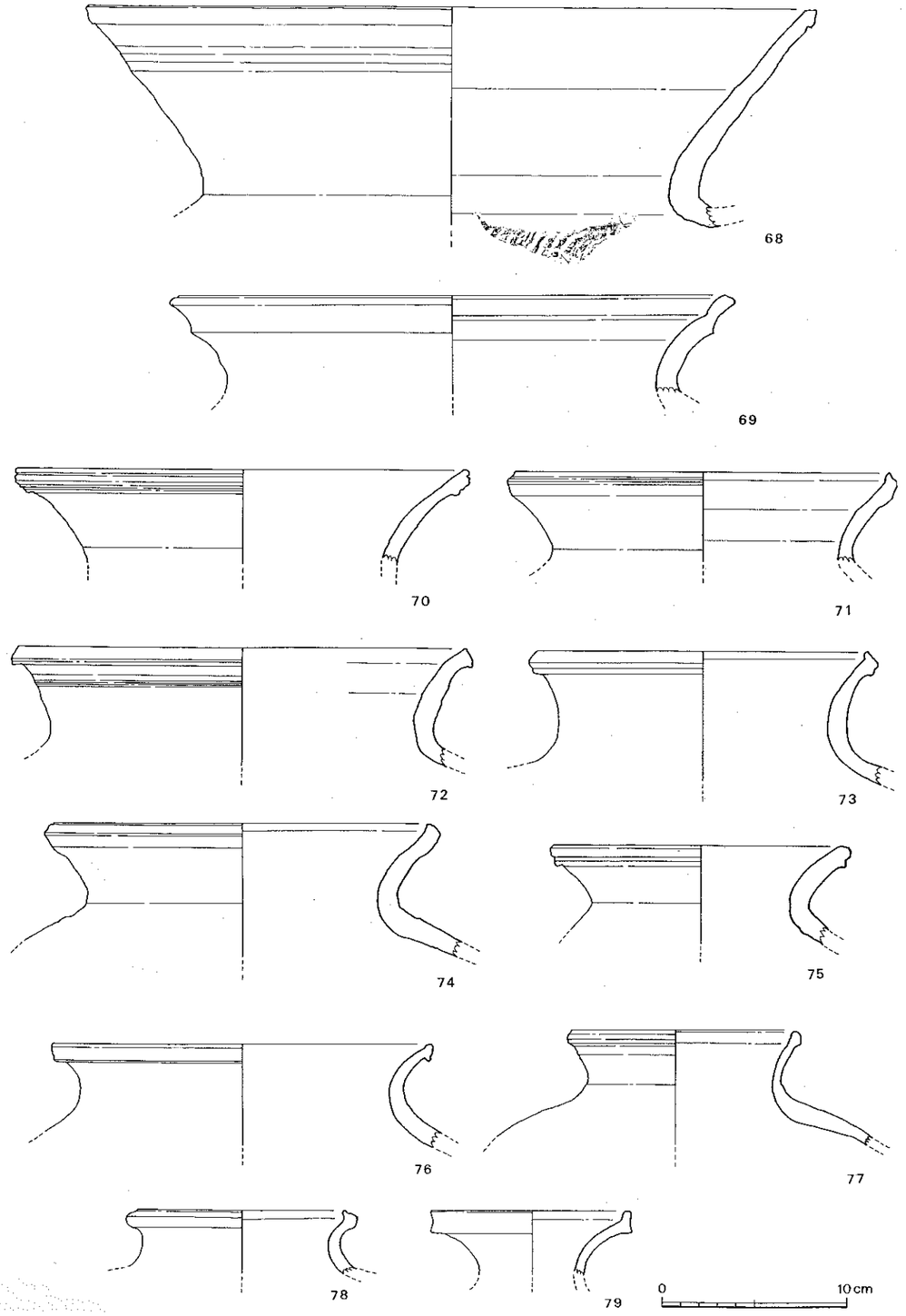
坏蓋が６世紀代後半～７世紀初頭と８世紀代を主体とすることからも、坏身も同様な傾向を示している。**4～52**についてはかえりを持つもので、かえりの外反度が強く、器高が低い一群である。**4・52**についてはやや直立気味に立ち上がり、この中でも最古の形式のものと思われる。**4**は胎土も他と相違し、茶褐色を呈し焼成良好、堅緻な作りである。他の胎土は灰褐色から黒褐色を呈し、胎土中に白色の鉱物が目立つ。**56～65**はかえりのない坏の一群を図示した。高台が明瞭に内側に付くものは**53**のみであり、大形であることからも他より古い様相をもつ。その他のものについては体部際に高台が付くタイプのものである。

皿（66・67）

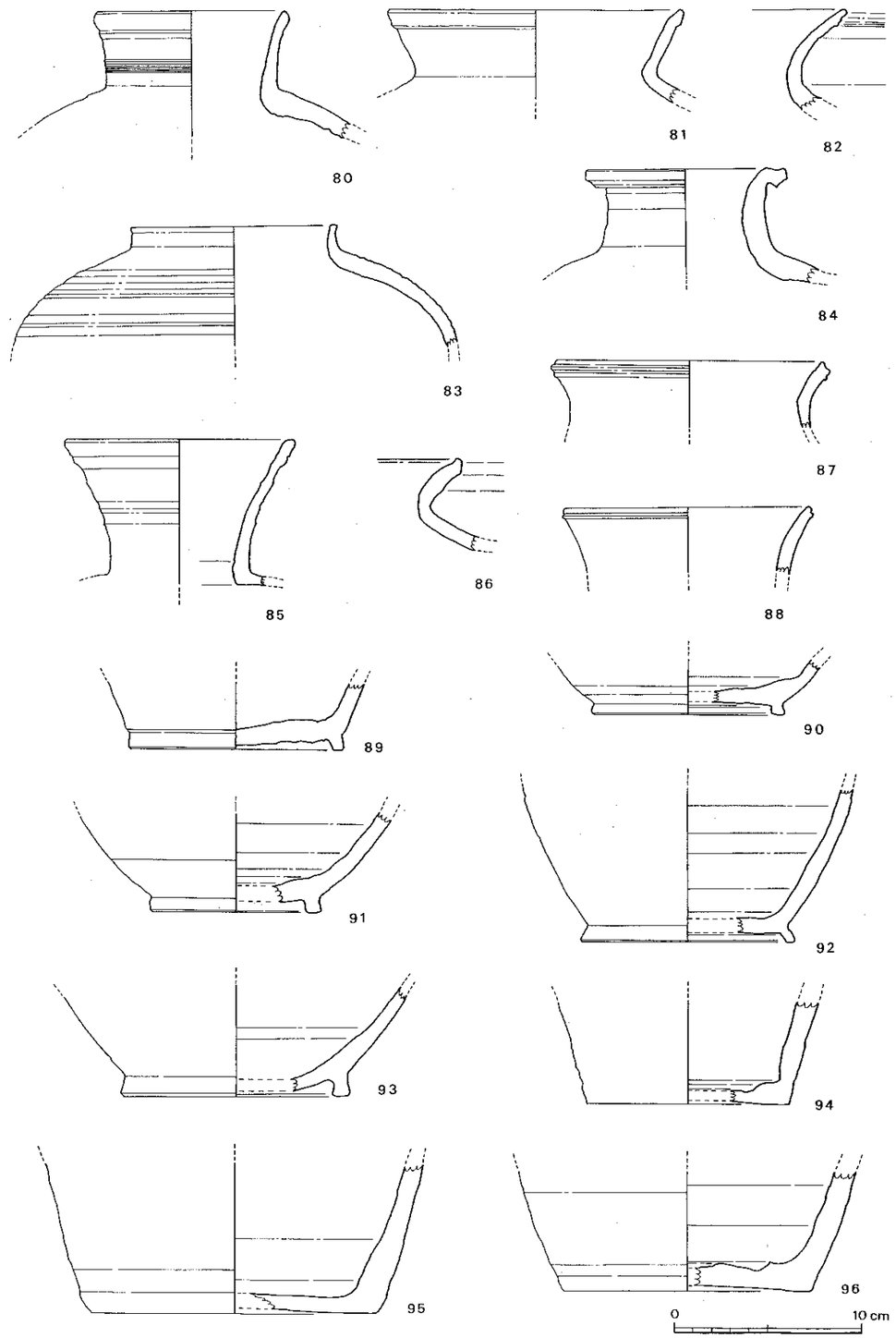
皿は図示していないものを含めても10点ほどの出土しかなく、坏や甕の出土点数に比べ極端に点数が少ない。**66**は器高1.6cmで、口径14.8cmを測る。見込みと体部の接する部分が溝状に落ち込む。**67**は底部から体部の屈曲部が緩いカーブで立ち上がり口唇部を丸く納める。



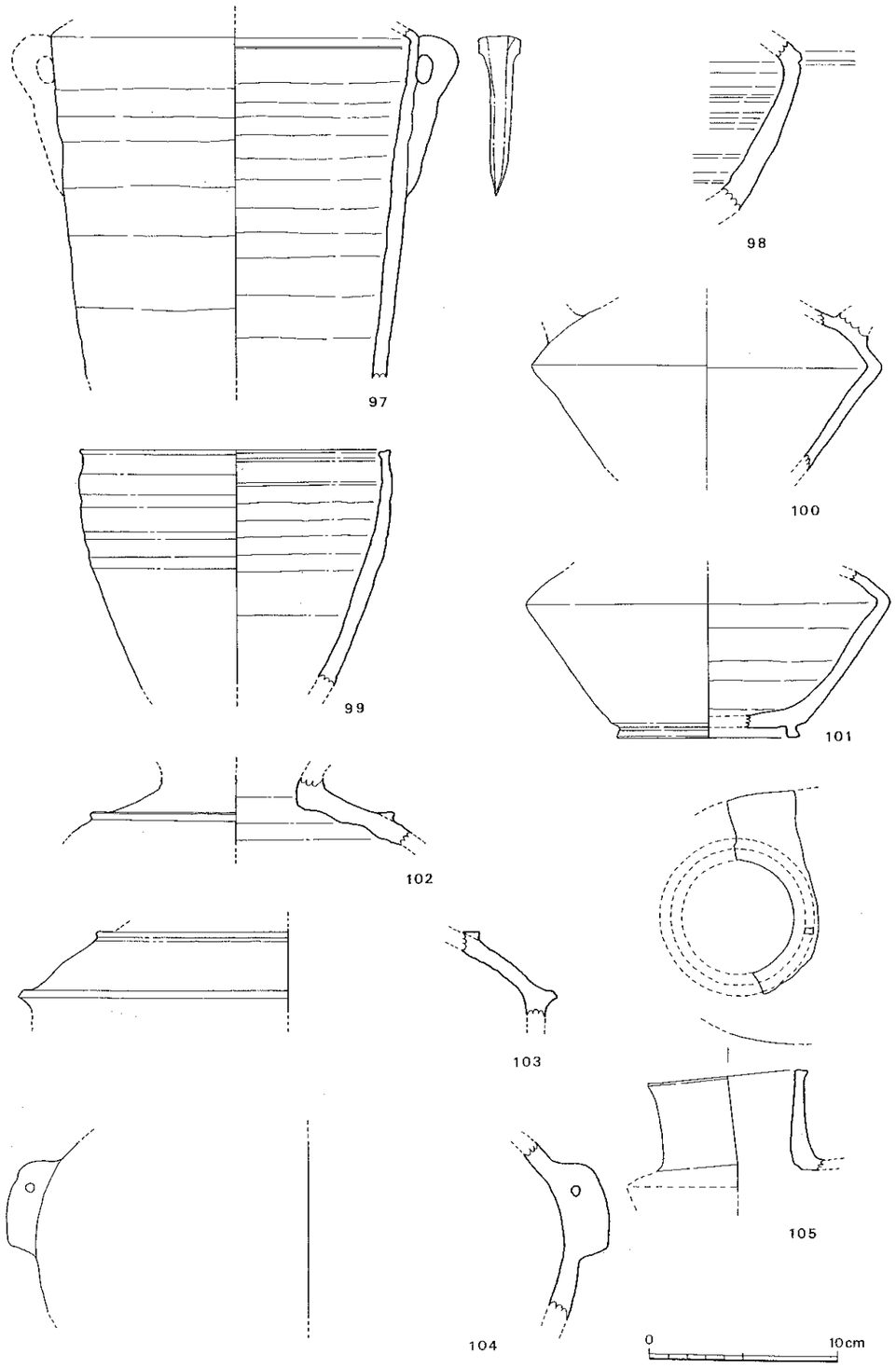
第25図　須恵器坏身実測図（1/3）



第26図　須恵器甕・壺実測図（1/3）



第27図　須恵器甕・壺実測図（1/3）



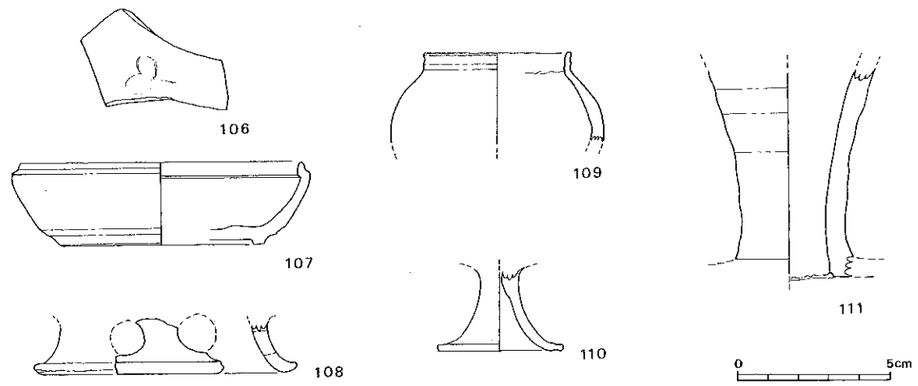
第28図　須恵器壺実測図（1/3）

壺・甕（68～105）

壺・甕類の出土は坏の出土量と同じくらいか、それ以上の出土をみる。破片数からみれば圧倒的にその量は多いが、壺・甕類の大きさから考えると必然的な結果であろう。これらの壺・甕については、色調・焼成・成形について多くの種類のものがあり、時間差はもちろんのこと、各地の生産地から流入したことが想定される。**68**は口径39cmを測る大甕の口縁部である。頸部から直線的に口唇部へと続き、口縁端部直下に段を有する。頸部内側には胴部との接合のための指頭圧痕が残され、胴部内面には青海波の叩き痕がみられる。甕についてみれば、**68**の甕のように頸部が直線状に延びるものと、大きく外反するものとがある。**68**のような大形の甕は他には見られず、口径24cm内外のものが主体である。舟山編年でみれば、口頸部が直線上に長く延びる大甕のタイプは８世紀初頭前後に位置付けられており、この時期のものか。他のものについては**83**の短頸壺や肩部に２段の突帯をもつ**102**や**103**の壺、**97・104**の双耳瓶、胴部で屈曲する壺など壺において種類が豊富である。胴部で鋭く屈曲する壺についてはⅦ期（８世紀前半）、山本編年（山本1992）におけるⅡ・Ⅲ期（８世紀前半～中頃）に特に顕著であることからこれらの壺については８世紀前半、また耳付きの壺**97・104**についてはⅦ期からⅧ期に属するもので、８世紀後半～９世紀初頭と捉えられよう。また**105**の平瓶についても９世紀初頭のものとして捉えられる。

その他の須恵器（106～111）

106は坏底部に墨書したものであるが、文字については記号状のもので判読不明である。墨書土器は、以前、大浜遺跡周辺で１点表面採集されており、「八田乞」の文字が判読されており、今回の資料で２点目となる。また、表面採集資料は８世紀後半～９世紀の坏底部とされている（木本1996）。**107**は小形の鉢で、受部があるため蓋がつくのであろう。赤褐色を呈し焼成も良好である。９世紀代の資料であろう。**108**は器台の底部と思われるが、硯の脚の可能性が高いと考える。脚端部は外反し、端部を丸く納めてある。円形の透かしをいれている。円形透かしの硯は、大宰府に類例を求めることができる。ただし、脚の端部のつくりにおいて差違があり、直ちに類例とするには問題もある。ちなみに大宰府資料は８世紀後半に位置付けられている（九歴1987）。**109**は小壺で口縁部が直立し、焼成良好。８世紀後半代のものであろうか。**110**は高坏の脚部で端部をつま



第~~6~~図　~~グリッド配置図~~

み出す、小型のものである。長頸壷の頸の部分の資料が13点出土しているが、小破片で１・２層出土のものが多い。**111**も２層出土のものである。８世紀前半代の資料であろう。

以上、須恵器について説明したが、６世紀後半～９世紀代の資料が出土しており、このなかでも６世紀後半～７世紀代を中心とする時期と、８世紀～９世紀をピークとする時期とがあることが理解される。このことは古代の大浜の時代背景を考える時に重要なこととなる。このことについては、まとめの項で再度検討することとする。

［参考文献］

小田富士雄　1969『塚ノ谷窯跡群』八女古窯跡群調査報告Ⅰ　　八女市教育委員会

横田賢次郎　1983「福岡県内出土の硯について」－分類と編年に関する一試案－　『九州歴史資料館研究論集』９

大野城市教育委員会　1988『牛頸ハセムシ窯跡群』Ⅰ

九州歴史資料館1987『大宰府史跡』昭和61年度発掘調査概報

佐藤浩司　1987「奈良時代の須恵器と土師器－旧豊前国を中心として－」『東アジアの考古と歴史』上
岡崎敬先生退官記念論集　同朋舎

赤司善彦　1989「大宰府出土土器の検討」－八世紀後半の資料から－　　『九州歴史資料館研究論集』14

伴耕一郎編　1990『千々賀古園遺跡』唐津市文化財調査報告書第46集

中村浩　1990『須恵器』柏書房

山本信夫　1992「北部九州の７～９世紀中頃の土器」『古代の土器研究』
－律令的土器様式の西・東－　古代の土器研究会

中村浩　1993『須恵器』考古学ライブラリー５　ニューサイエンス社

舟山良一・平田定幸1993「牛頸」『季刊考古学』第42号－特集　須恵器の編年とその時代－　雄山閣出版

舟山良一　1993「牛頸窯跡群と大宰府」『古代の土器研究』－律令的土器様式の西・東２須恵器－古代の土器研究会

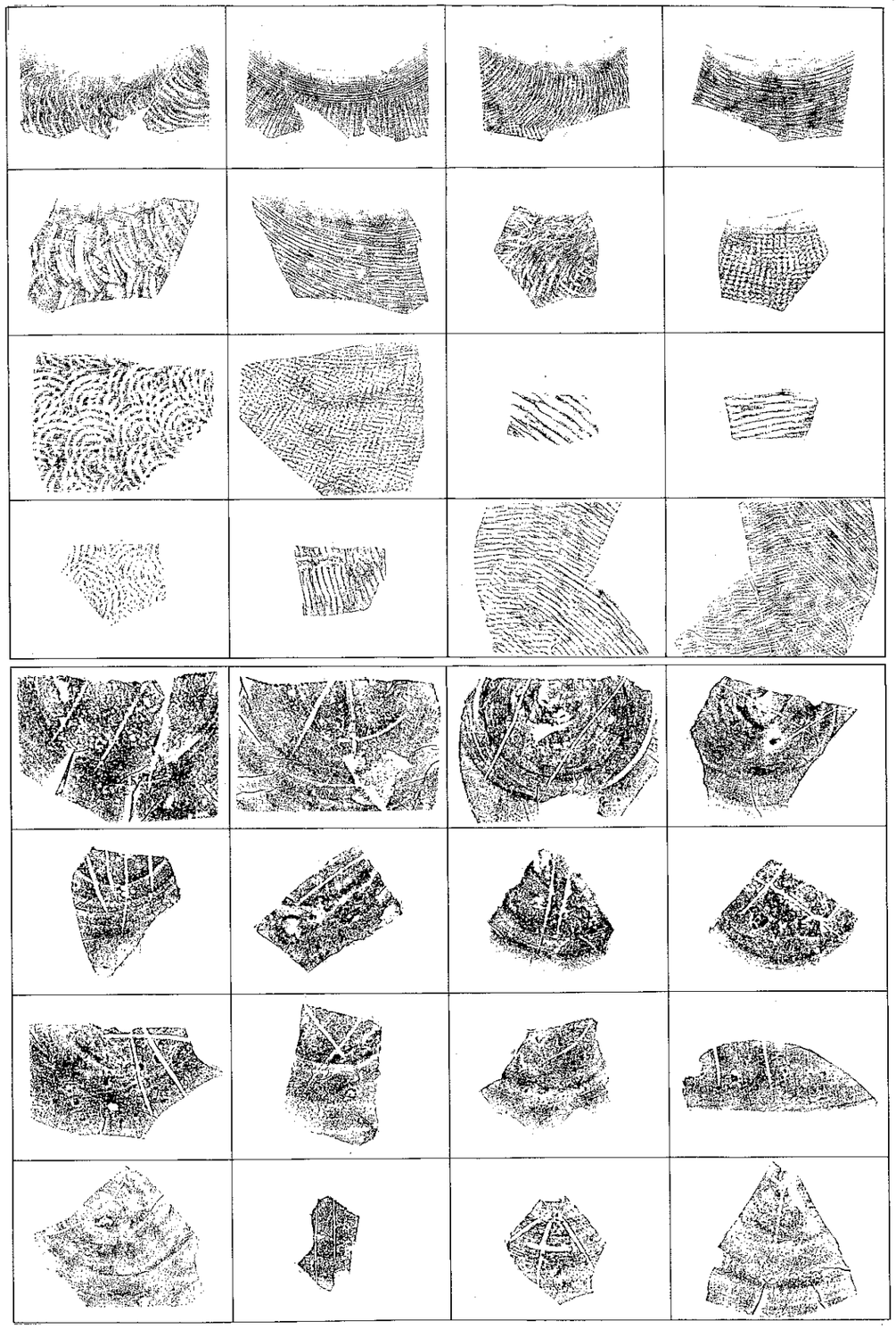
宮川禎一　1993「新羅印花文陶器変遷の画期」『古文化雑叢』　第30集（中）九州古文化研究会

木村泰彦・池田裕英　1994「平城・長岡・平安各宮・京出土の猿投産須恵器について」『古代の土器研究』
－律令的土器様式の西・東３　施釉陶器－　　古代の土器研究会

山本信夫　1996　「古代前期の煮炊具　筑前・筑後・豊前・肥前」『古代の土器研究』
－律令的土器様式の西・東４　煮炊具－　　古代の土器研究会

舟山良一・松本敏三・池田榮史編　1996『須恵器集成図録』第五巻　西日本編　雄山閣出版

木本雅康　1996「古代国家の下に」『図説長崎県の歴史』河出書房新社



第30図　色々な叩き文様・ヘラ記号（上段甕類、下段坏蓋）

c．**土師器**（第31図１～17）

鼓形器台（第31図１・２）

鼓形器台の破片13点が出土している。接合により、３個体分以上あったものと推定される。**1**は台部外面に丁寧なナデ痕が顕著にみられ、台の端部は外側まで丸く納めている。台部の上位に突帯状の隆起をもたせ頸部に至る。台部内面は無数のヘラ削り痕が顕著だが、端部ではやや内傾し、水平を意図した１回の削りで仕上げる。上部外面は、台部のようなナデ痕は認められず下方に明瞭な突帯をもつ。中央部でやや内湾し、口縁部で外反させ口唇部を丸く納める。内側は明瞭な削り痕は認められないが、台との接点部分は直に削りをいれている。胎土は変色しており一概にはいえないが、灰青色を呈しており、中が暗褐色を呈する。上半部が16.2cm、台部の径が15.2cm、中央の内径は6.4cmを測る。**2**は器台下半部がややいびつになっている。上半部の口径は16.8cm、台部の径が14.4cmを測り、１に比べ上半部が突出した形になる。上半部内面にヘラ削り痕が数カ所認められるが、ほとんどナデ消されている。これに対し、台部内面はヘラ削り痕が顕著だが、台部端部内面はヘラで丁寧にナデが入る。**1**との大きな違いは、器表面上半部に暗文状の縦線が入ることで、弥生時代の伝統を看取できる。**1**・**2**とも頸部からほぼ上下対称となり、突起も明瞭に２箇所入ることで共通する。これらの鼓形器台については、常松幹雄編年によれば第Ⅳ式に相当し、西新町Ⅲ式土器に対応するとし、古墳時代前期に比定されている（常松1986）。また、柳田のⅡａ式（柳田1991）に相当する資料であり、３世紀後半～４世紀前半に位置づけされるものと考えられ、布留０式の段階に相当するようである。

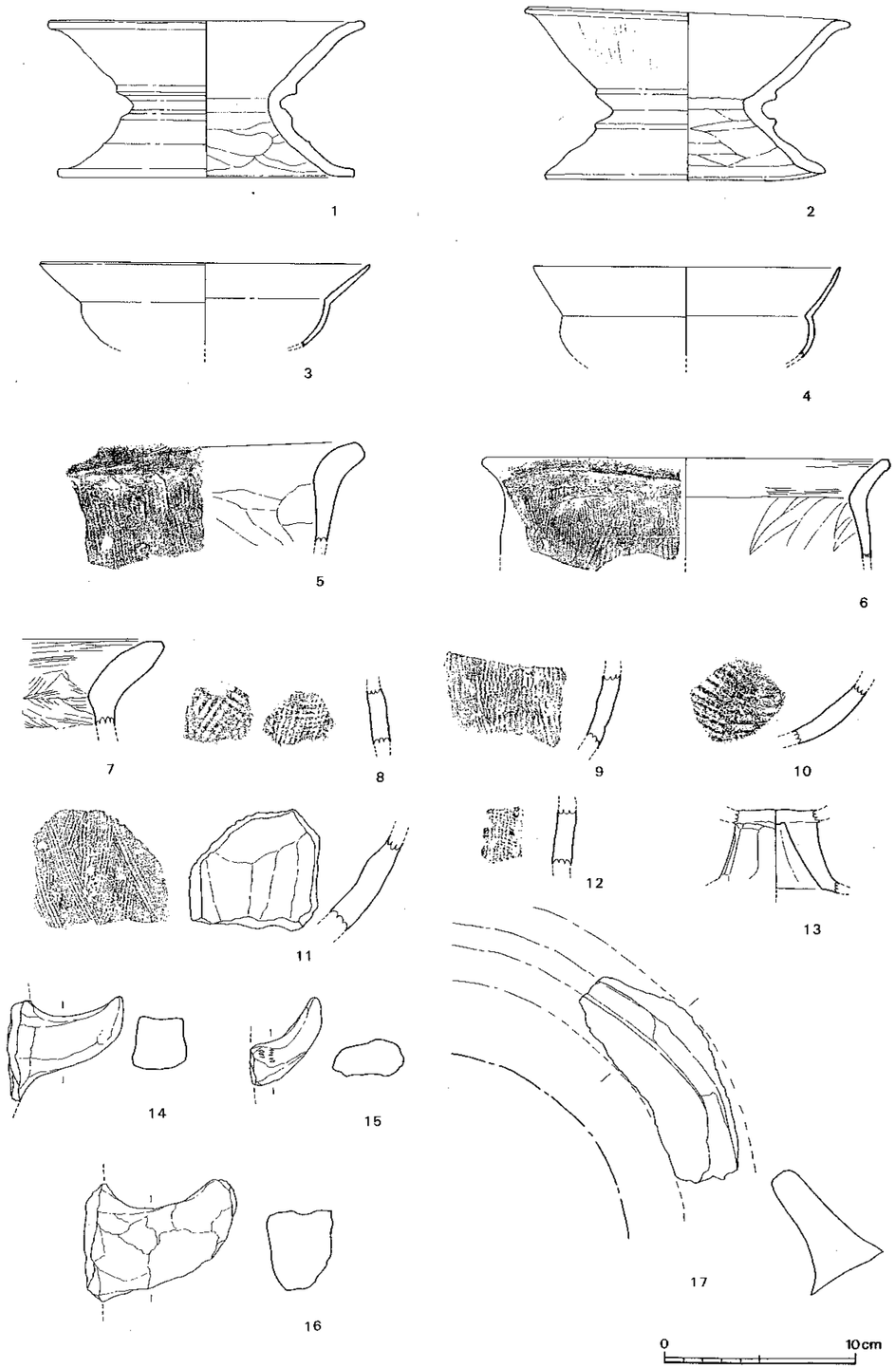
鉢（第31図３・４）

3・**4**は先の鼓形器台とほぼ同時期のものと思われる資料である。口径約17cmを測るのに対し、器高は４cmと低い。胴部から直線的に鋭角な口縁部が続き、胴部は極端に内湾する。器壁は薄く仕上げており、屈曲部で４mm、底部は3mmを測る薄さに仕上げられている。外面には赤色の顔料を塗っていた痕跡も見られる。**3**は**4**よりやや口縁部が内側に入り、屈曲度が弱く器高もやや高いと思われる。

柳田の編年でみれば、鉢Ｂに属するものであろう。先の鼓形器台とこの２点の鉢以外にこの時期に該当する遺物の出土はない。４世紀代の遺物そのものが五島列島では初見であり、山陰系の遺物の出土は、県内では壱岐で出土しているのみである。

甕（第31図５～７・11）

5～**7**は土師器甕の口縁部及び胴部片である。土師器甕の資料は少なく胴部資料がいくらか出土しているが、みな砕片となっている。**5**は口縁部を肥厚させて折り返し、外面の頸部以下に刷毛目調整をする。内面には粗くヘラ削りをおこなう。胎土は灰黒色を呈し、石英粒が多量に混入している。**6**は**5**や**7**に比べて胎土は堅緻で、器壁も薄く作り出している。口縁部も鋭角的であり、口縁内部にも横方向の刷毛目が見られ、稜を境に丁寧なヘラ削りを施す。**7**は**6**と同様に口縁内部にも刷毛目調整するが、器壁の厚みや作りは雑である。**11**は外面は丁寧に刷毛目を入れるが、内面のヘ



第31図　土師器実測図（1/3）

ラ削りは雑で起伏が激しい。いずれも８世紀代のものと思われる。

製塩土器（第31図８～10・12）

数点ではあるが、製塩土器が出土している。いずれも小破片で形態を特定できないが、いわゆる玄海灘式製塩土器の範疇に含まれるものであろう。**8**は、外面黄褐色、内面赤褐色を呈し、外面は疑似格子目の叩き目、内面は平行する細線が縦横して網目状を呈する。**9**は外面縦に平行して叩き絞めをおこない、内面はヘラ削りをおこなう。**10**は土器底部付近で、外面に擬似格子目文の叩きがみられ、内面は細線による調整をおこなう。**12**は内外面とも丸みを帯び砲弾形になるものであろう。内面布痕のもので焼塩用土器とされるものである（近藤1984）。これらの製塩土器は他に10片ほど出土しているが、内面布痕のあるものは他に２片出土している。これらの製塩土器は、平安時代に属するものであろう。五島列島での製塩土器の出土は宇久町の宮ノ首遺跡（宮崎1991）、小値賀町の相津近浦遺跡（塚原1985）・同町御手洗岩陰遺跡などで知られているのみで今回の出土が４例目である。海を生業の糧とせざるを得ない五島の環境を考えれば、今後多数の製塩土器が確認されることが期待される。

13は高坏の脚の部分で外面のヘラ削りを縦方向に入れて面取りしており、内部は回転削りである。脚の高さは低く、接地面は極端に開く。７世紀後半代のものと考える。**14**～**16**は甕の把手、**17**は竈の前面の鍔の部分である。

以上のように、大浜遺跡の土師器については、３世紀終末から４世紀前半の鼓形器台や鉢、６世紀代～８世紀代のものであるが、先述したように全体におけるこの時期の土師器の出土量は少なく、全体像がつかめない状況である。

［註］

註１　小値賀町の属島である大島の御手洗岩陰遺跡で須恵器などと共に、製塩土器が出土したとの情報を塚原氏より得ているが、詳細については不明。

［参考文献］

横山浩一　1984「玄海灘式製塩土器」（上）『九州文化史研究所紀要』29号　九州大学文化史研究施設

近藤義郎　1984『土器製塩の研究』　青木書店

横山浩一　1985「玄海灘式製塩土器」（中）『九州文化史研究所紀要』30号　九州大学文化史研究施設

塚原　博編1985『町内遺跡分布調査・Ｉ』小値賀町文化財調査報告書第５集　小値賀町教育委員会

赤沢秀則　1985「出雲地方古墳出現前後の土器編年試案」『松江考古』第６号　松江考古学学談話会

常松幹雄　1986「北部九州におけるいわゆる山陰系土器」『九州考古学』第60号　九州考古学会

清水真一　1987「弥生土器から土師器へ」『季刊考古学』第19号

柳田康雄　1991「土師器の編年　２九州」『古墳時代の研究』６　雄山閣

宮崎貴夫編1991『宮ノ首遺跡』宇久町文化財調査報告書第２集　長崎県宇久町教育委員会

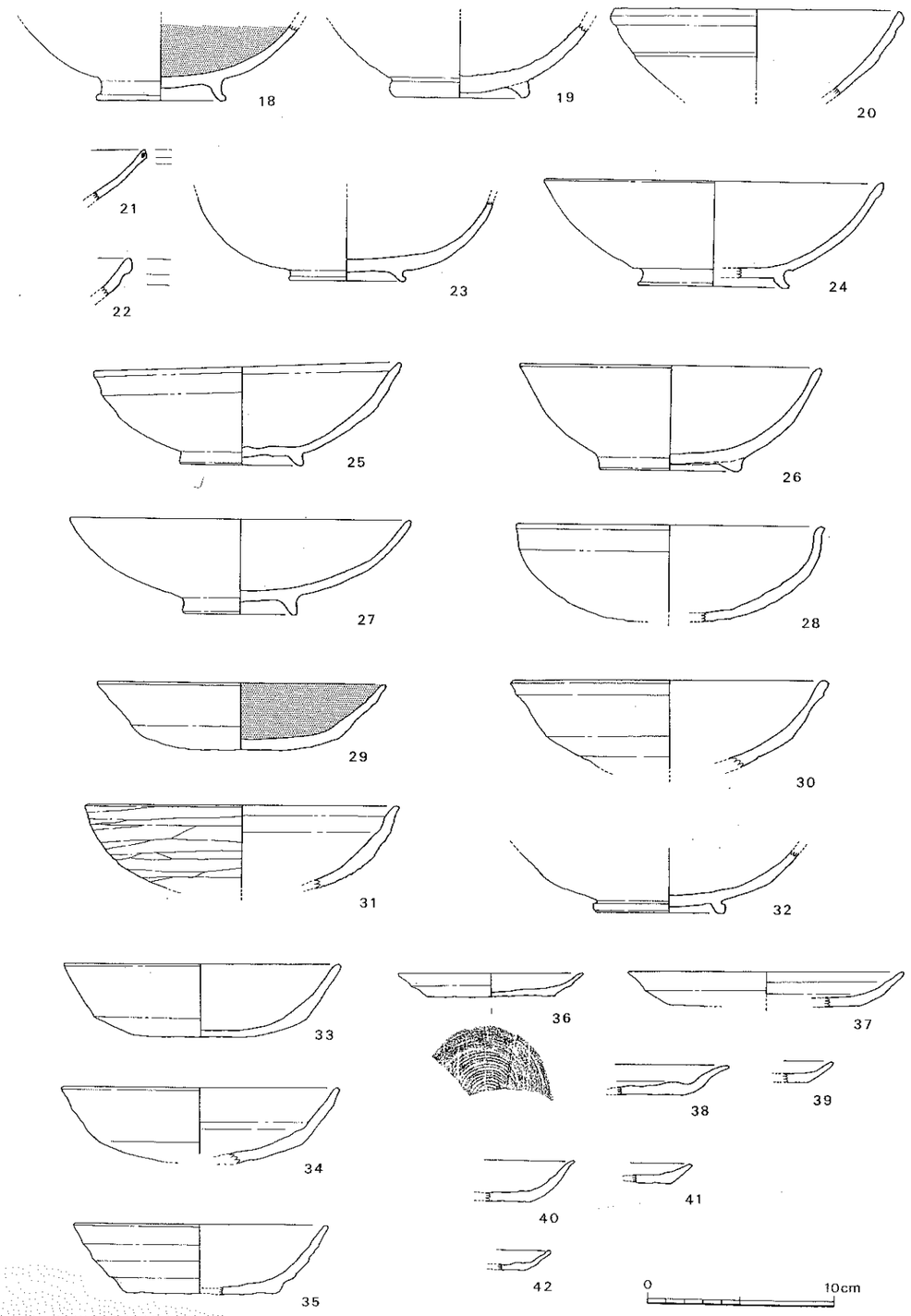
亀田　妥　1992「北九州市内出土の古代の製塩土器について」『研究紀要』第６号
北九州市教育文化事業団埋蔵文化財室

山口信義　1993「北部九州沿岸の丸底製塩土器」『研究紀要』第７号　北九州教育文化事業団埋蔵文化財室

宮崎貴夫　1994「９長崎県」近藤義郎編『日本土器製塩研究』青木書店

18～**60**は碗・坏・皿類を示した。碗はそれぞれに特徴があり、ほとんど共通するものはない。また胎土等については出土した沼の黒色土が浸透しているものもあるため詳細な分析はできない状況にある。**18**は黒色土器Ａで、全体的に薄身で堅緻な作りである。高台際から丸く体部へ続き、高台は内湾させるが、高台畳付け部分は外側に丸く納める。胎土は赤黄褐色を呈し、石英粒を含む。**19**は黒色土器Ｂである。見込みに指による押し出し痕があり、内外面ともヘラ磨痕が顕著である。張り付け高台を内側から引き延ばし外側に踏ん張る。高台内は緩く丸みを帯び、細かな圏線状の切り離し痕が認められる。**20**～**22**は玉縁状の折り返し口縁を持つものである。特に**20**は体部上半部に段を有することに大きな特徴を持ち、白磁碗Ⅱ類を意識したものと思われる。また**21**などは、ピンホール状の穴を持つなど、初期貿易陶磁を意識したものではないだろうか。出土した白磁碗などからすると時期的にはやや上る可能性もあろう。**23**は低く細い高台で、高台縁を外側に丸く納める。体部は半球状に立ち上がり、上半部で直線上になる。鉄分の付着かどうかはわからないが、高台際と体部上半部に赤褐色の丹を塗布したような箇所が見られる。高台は貼付け高台を内側から引き上げている。**24**は高台が極端に外湾し、高台際と体部の接点を凹状に削りを入れている。**25**はほぼ完形で出土した。左右の高さがやや相違するが、高台から緩やかにカーブを描き立ち上がる。口縁部下にヘラ削り痕が２条ほど顕著に残り、口縁部内面もヘラ削りにより平滑にしている。内面には暗文状に幾つかのヘラ磨きが確認される。**26**は体部下半部に厚みがあり、体部外面はヘラ削り痕をナデ消したように平滑である。高台を貼付けた後に体部側と高台内側に粘土を引き延ばした跡が残る。高台は三角形状を呈する。**27**は器壁が薄く作り出されているが、口径は一番大きく体部は高台から直線状に延びる。胎土は黄灰色を呈し、斑状に黒い鉱物を混入する。高台は長楕円形で、高台内は外側に、外側はほぼ直立する。高台内には板目痕が残り、体部にも一部その延長部が残る。器形や高台内の板目痕から他とはかなり相違する。**28**は体部上半部で垂直になり、口縁直下は削りをいれて凹部を作っている。口唇部を丸く納める。胎土は粗く灰黄色で、**30**は胎土等が**26**に非常ににているが、口縁部下のヘラ削り痕が明確でこの部分が薄くなる。下半部には高台を貼付けた粘土が体部にまで引き上げられた跡が観察できる。**32**は外面灰黄色、内面はハケ状のもので調整されており、茶褐色を呈する。漆状のものを塗った可能性もある。高台が低く高台際と体部との境は鋭く削りだしている。

29・**31**・**33**・**34**は坏を取り上げた。いわゆる丸底坏と呼ばれる一群で、10世紀代から12世紀代に主体的に出土するようである（中島1995）。**29**は黒色土器Ａで、底部に糸切り痕を持つ。底部は厚みを持つが、体部下半部に段があり、そこから薄く口縁部に向かう。内面は指頭痕が僅かに残るが、ほとんど平滑に丸く立ち上がる。**31**は外面に無数の細かなヘラ削り痕が観察でき、口縁部内面直下に浅い凹部を作り出している。形態的に**28**に類似しており、碗になることも予想される。**33**・**34**は体部と底部の屈曲部がやや下のほうにあり、底部を薄く作り出している。**34**には底部に粘土の巻き上げ痕と思われる0.8cm幅の圏線状のものが観察できる。また、見込みと体部との境に凹部を付ける。**35**は土師器の坏で、器壁が非常に荒れているが、外面の削りは鋭く段を有している。**36**～**42**は



第32図　土師器碗・坏・皿実測図（1/3）

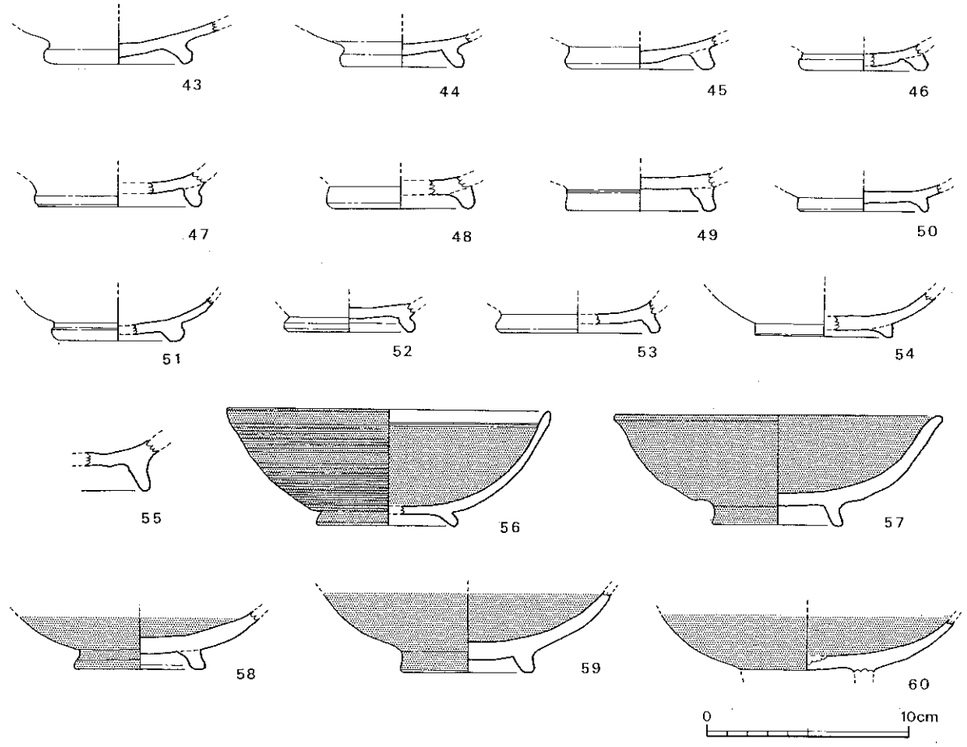
小皿を取り上げた。

土師質土器の中での皿類が占める割合は少ない。図化したものの内、明瞭に糸切り痕が残るのは36のみであり、残りはヘラ切りである。法量において小型の傾向をもつ。

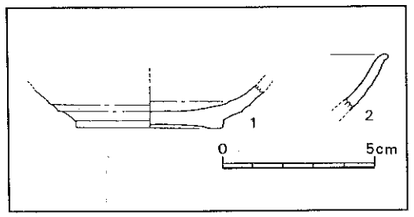
土師器のなかでも特に碗類の出土が多いが、図上復元が可能なものは数点であるため、底部のみの資料を43～55に示した。これらの中で大きく分類すれば、43～48のように高台が太い粘土紐で作られ外側に踏ん張るもの、49・50・52のように高台内が平坦で、高台の高さが低いもの、54のように高台外側が直に、内側は緩やかに内径するものなどがある。また、55については特に高台が高く、胎土も赤黄褐色を呈するなど、やや古い様相をもつ。

56～60の資料は瓦器碗であるが、56については外面にヘラ調整による細線が残され、口縁部直下には内外面に段をもち、高台は外側にふんばるという他とは明らかに相違する特徴がある。57～60については、胎土に砂粒を多量に含み、器壁が分厚くもろいため、高台と体部が剥落した資料が多い。在地産と思われる。山本編年のⅧ期に相当するものであろう。。

これらの土師器碗・坏・皿についてその特徴について説明してきたが、これらの所属時期については、土師器碗については、山本編年（山本1988）のⅪ期～Ⅻ期に納まる資料がほとんどあり、ほぼ11～12世紀代のものとして大過ないであろう。



第33図　土師器碗底部・瓦器碗実測図（1/3）



第~~2~~図　緑釉陶器実測図
3A

緑釉陶器（第34図１・２）

緑釉陶器２点が出土している。**1**は、円板張付け高台で、高台外面は直に延び、やや膨らみながら体部に至る。やや上げ底気味で高台内にヘラによる線が認められ、調整時の圏線も見られる。見込みは中央部が低くなり、中央部から緩やかに体部へと続く。見込みと体部の境に僅かに圏線が認められる。釉調は、外面が濃緑色で内面は濃緑色にやや鉛色を呈する。胎土は灰白色で黄橙色の部分もあり、軟質で細かな黒色の鉱物がはいる。**2**の口縁部は１と同一個体とみられ、釉調は鉛色を呈す。丁寧なヘラ削り痕があり口唇部はやや外側に開き、体部外側で丸く納める。緑釉陶器について高橋照彦の分類に従えば、高台形態はＩ類（ｅ）円盤状高台で形態はＡ２類に属する。編年的にはＩ期（９世紀前半）のものと考えられよう（高橋1995）。また山本の編年でもⅥＡ期に位置付けられ、京都系の洛北産と考えられる。同じく９世紀前半に位置付けられている。緑釉陶器の出土は、地方官衙等との関連上で取り扱われるが、大浜遺跡も緑釉陶器、墨書土器の出土から役所的な施設があったことを想定する必要がある。

［参考文献］

山本信夫　1988「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ
日本中世土器研究会

森　　隆　1992「中世土器の生産に見る地域型の提唱と工人集団の系譜について」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ
日本中世土器研究会

中島恒次郎1992「大宰府における椀形態の変遷」『中近世の基礎研究』Ⅷ　日本中世土器研究会

山本信夫　1992「中世土器の様相」『太宰府市史』考古資料編　大宰府市史編集委員会

森　　隆　1993「北部九州の瓦器生産」『古文化談叢』第30集（中）九州古文化研究会

中島恒次郎1992「大宰府の土器」『太宰府市史』考古資料編　大宰府市史編集委員会

中島恒次郎1995「九州北部」中世土器研究会『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社

高橋照彦　1995「緑釉陶器」『概説中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会

寺島孝一　1976「平安京出土の緑釉陶器」『考古学雑誌』第61巻　第３号　日本考古学会

山本信夫　　「北部九州の施釉陶器」

柴尾俊介　1987「北九州市域出土の緑釉陶器に関する覚書」『研究紀要』創刊号
北九州市教育文化事業団埋蔵文化財室

柴尾俊介　1991「南九州出土の緑釉陶器に関する覚書」『研究紀要』第５号　北九州教育文化事業団埋蔵文化財室

ｄ．中世輸入陶磁器（第35･36図１～44）

中世の輸入陶磁器145点が出土している。完形に近いものも多く、須恵器が小片で出土したのとは対照的な出土状況を示す。白磁碗を主体とし、高麗青磁など初期貿易陶磁が多いのも大きな特徴である。

ここでの説明については、白磁・青磁については森本（1997）、森田・横田（1978）分類を、染付については上田編年(1982)、初期高麗青磁については山本(1990）編年を使用することとする。

越州窯系青磁（第35図１）

１は釉の発色は不良で黄白色を呈し、火を受けた形跡もある。釉は高台畳付けを除く全体に施釉し、畳付け部は釉を掻き取っている。形状は、高台から体部にかけて直に延び、高台はやや上げ底気味である。胎土は黄褐色を呈し、ややザラつきがある。このほかに１点体部の破片がある。

白磁碗（第35図２～20）

2は黄色みを帯びた白濁色の釉を施し、口唇部内面に釉が垂下する。口縁部は削りだしによって小さな玉縁をつくる。Ⅱ－１類と思われ、**13**の高台と同一個体と考えられる。**13**の高台は、外面を直に、高台内面を斜めに削りだしており、高台際まで釉が掛かる。胎土に細かな黒い鉱物が少量入る。**3**は灰緑色を呈し、口縁は折り返し口縁。体部がかなり傾き下方に段を持つ。玉縁の直下は平滑に削り出され、体部中央に一条の沈線をもつ。**4**はⅡ－３類で、薄く幅の広い玉縁で、体部も全体的に薄く作り出される。釉は黄白色を呈し、体部中央ほどまで掛かり、細かな貫入が全体に見られる。**6**の低部と同一個体と考えられる。**6**は見込みに浅い段を有し、**13**と同様に高台が外面を直に内面を斜めに削り出している。高台内には２つの胎土目が残されている。

5は胎土、釉調ともに３に似る。ごま塩状の細かい斑が全面にみられる。Ⅲ－１類か？

7は口縁部を極端に比厚させ、その直下を削り出すことによって玉縁を作り出すことを特徴とする。高台は斜めに削り出され、高台内との比高差はほとんどない。かなり使用したものと思われ、畳付けはかなりすり減っている。**8**～**10**･**14**･**15**は白磁碗底部で、分類的にはⅣ－１ｂ類に属するが、**8**・**10**については高台際まで施釉され、その他については半釉である。特徴としては、高台が低く高台内との比高差がないこと、高台の削りが斜めであることなどである。

11は黄白色の釉を高台際まで施釉し、高台畳付けと高台内は露胎。高台の作りが他の白磁に比べ丁寧で、高台外面をやや内湾させ、高台内側は外反する。高台内外面ともに成形の際の細かな線条痕が見られ、高台内の削りも平滑に削り出される。胎土は灰黄色でやや粗く軟質である。全面に細かな貫入が入る。体部は高台から緩やかにカーブをえがきながら口縁部はやや直に納める。口縁部下７cmの所に片切彫りで菊花状に紋様を全面に入れている。分類上Ⅴ類に属すると思われるが、口縁が直立することや片切彫りが大きいなど新資料としての様相が強い。

12は外面全体に線状に櫛目文を入れるもので、Ⅴ－２ｂ類（森田編年）に属する。**11**にくらべ胎土は硬質で、灰白色を呈する。淡灰緑色の釉を高台際まで施釉する。高台外面を直に、内面を斜めに削りだしている。見込み上部に２本の沈線が見られる。

16・17の高台部分については、Ⅱ類あるいはⅤ類に分類されるものとして取り上げた。16は高台畳付け部分まで灰黄色の釉を施釉するもので、高台外面は直に、内面をやや斜めに削りだしている。高台内は細かな削りだしによる線状痕が残る。17は透明な空色に近い釉を見込み部分に掛けるが、高台部分は露胎。釉は貫入が多い。高台の作りは丁寧で、高台外面は直に、内面はやや斜めに削り出し、高台内は直に削り出している。

18は他の高台に比べ作りが雑で重厚である。釉は白黄濁色を呈し細かな貫入が全体に入り、高台際まで施釉する。高台部は露胎で暗灰色を呈する。高台内は丸く削り出されている。

19・20は内面に段をもち、口縁がやや外反するⅤ－１類（森田1978）に属するものであろう。

その他の輸入陶磁器（第36図21～33）

21は同安窯系青磁の資料としてはこの１点のみである。外面に櫛描文を縦に、内面には流水状紋様を入れ、上部に沈線が入る。

22は鎬連弁をいれた龍泉窯系青磁。全体に厚く淡緑色の釉を掛けており、鎬の文様もぼやけている。23は白磁小碗。見込みから高台際まで黄白色の釉を掛ける。器表面は焼成時に空気が抜けた小穴がみられる。見込み底部に削りによる段をもち、高台際は鋭く削りだして沈線となっている。畳付けと高台内との比高は低い。

24～26白磁皿。24は口禿で釉を全面に施釉。25は底部から丸く立ち上がり、口縁直下を削りだし口縁をつまみ出して口唇部を外反させる。灰黄色の釉を全体に掛けたあと底部の釉を掻き取っている。細かな貫入が全体に入る。胎土は緻密。26は高台状のものを僅かに作りだしているが、上げ底気味である。釉の発色はあまりよくない。見込み内に体部を削りだして段をつける。

27・29のうち、27は青磁の小壷で、全体的に薄手で淡紫色の薄い釉を全体に掛ける。口縁部はやや外反し、丸く納めている。29は明の染付で、草花文を描く。一度透明の釉を掛けた後に淡青色釉を体部と口縁直下施す。口縁部は摘みだして丸く納める。27よりやや厚めである。

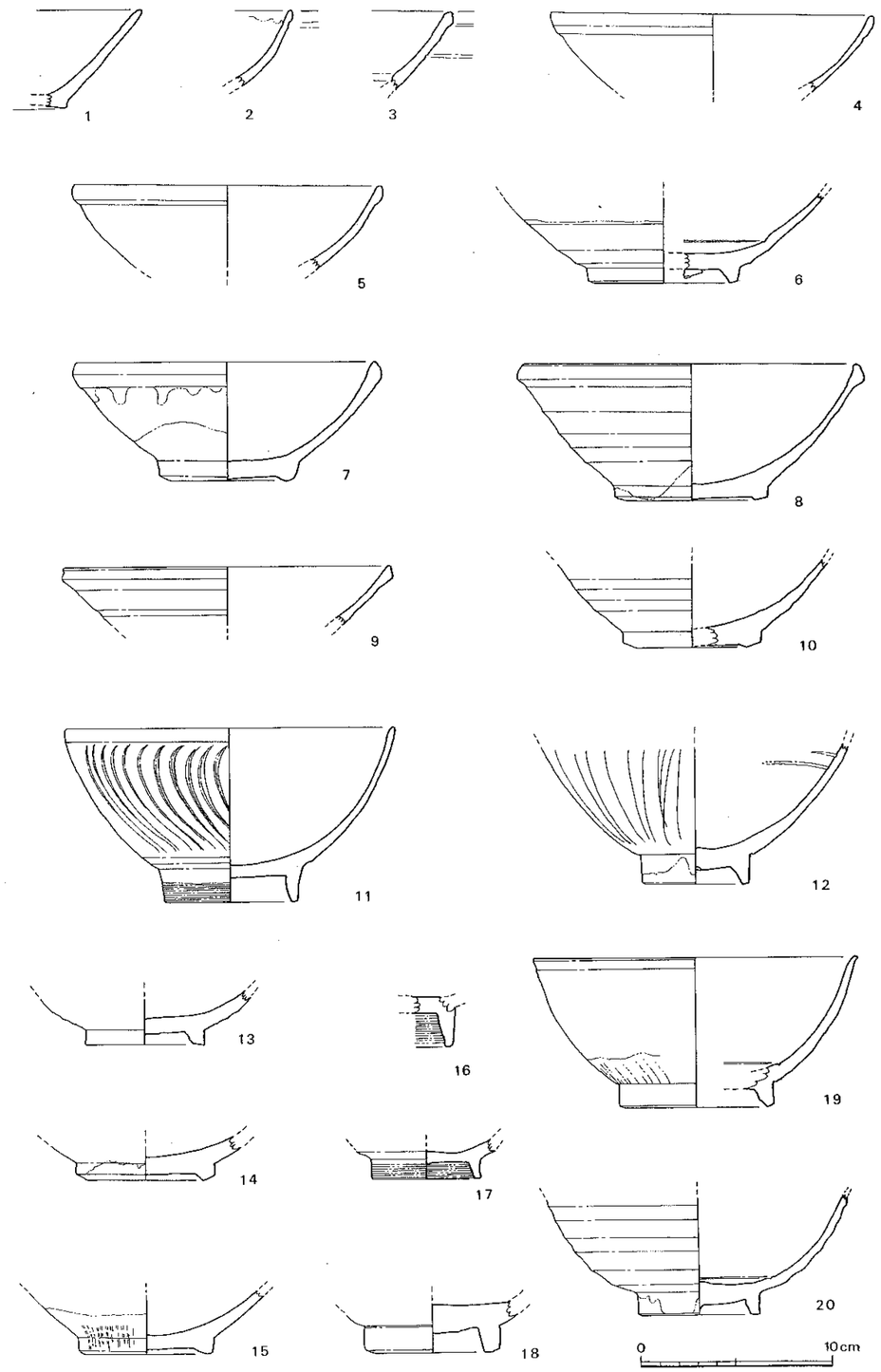
28は口唇部に刻目を六ヶ所いれる白磁碗である。体部は丸く作り出し、見込みは体部との接点に浅い段を有し、段に砂が認められる。刻目により輪花状を呈する。

30・33は明染付碗である。上田編年の染付碗Ｃ群に属するものである。

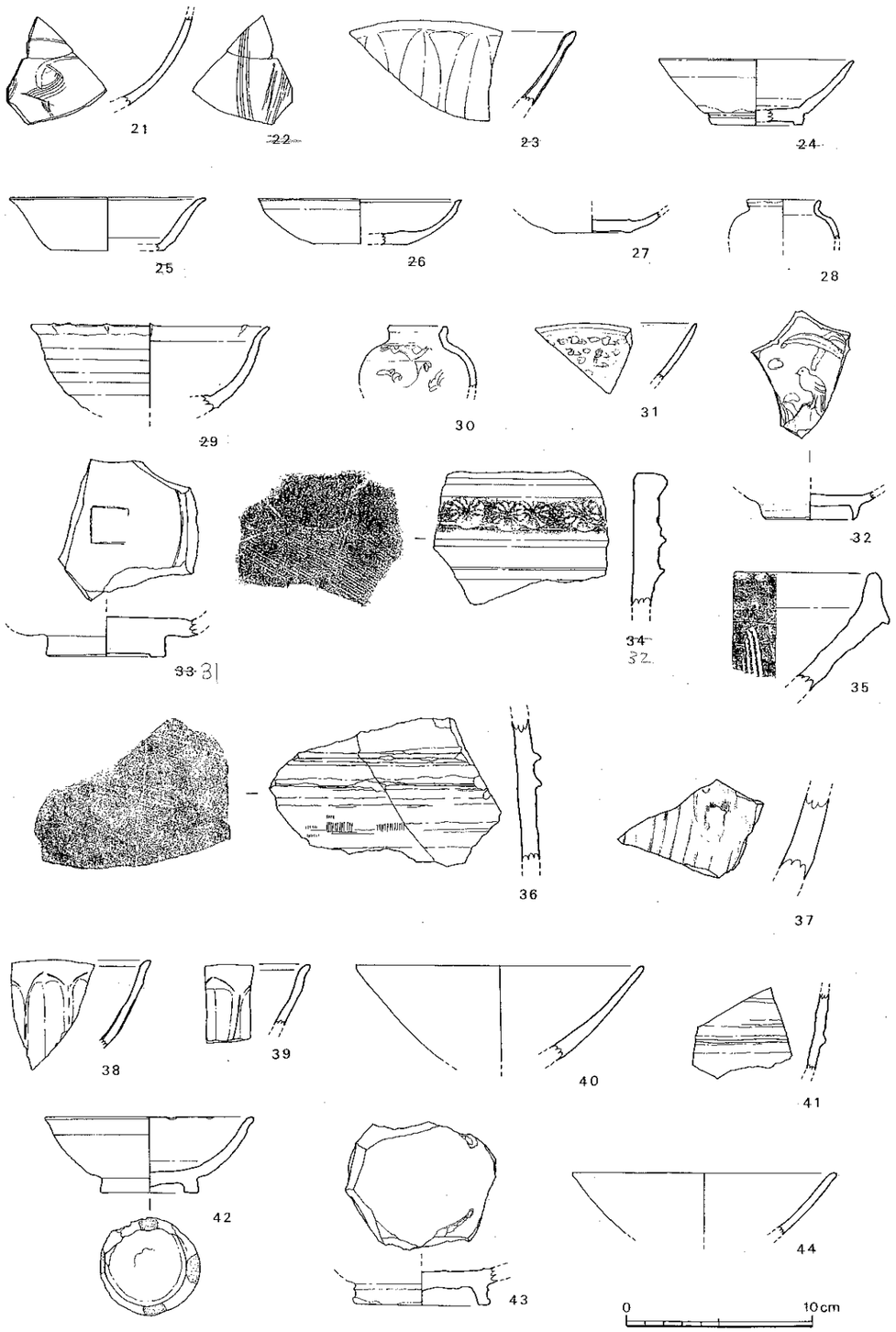
31は見込みに四角い印刻と体部と見込み部の接点を削りだし、浅い段をつける。高台から直に体部へと続く。淡緑色の釉は高台際まで施釉し、高台外面に垂れている。高台内は平滑で、畳付けのとの比高差はあまりない。龍泉窯系青磁碗Ⅰ－２ｂ類か。

国産陶器（第36図34～36）

32・35は瓦質の火鉢、34備前焼の擂り鉢である。32はほぼ直に立ち上がり内面に細かな刷毛目調整を斜めにおこなう。口縁部は外に突出し、体部に２条の突帯をもつ。上の突帯と口縁部との間に菊花状の印花文をスタンプする。35もほぼ直に立ち上がるもので、２条の小さな突帯をもつものである。外面は丁寧なナデ調整をおこなう。34は荻野編年のⅨ期に属するものと思われ、30・33などの染付碗に対応するものであろう。



第35図　輸入陶磁器実測図（1/3）



第36図　輸入陶磁器実測図（1/3）

中国産陶器（第36図37）

茶褐色の釉を全体にかけた厚手の甕状のものである。表面には数条の線が浅い片彫りにより作り出される。胎土はザックリとしており赤褐色を呈し、白い鉱物を含む。この手の釉をもつものとして図化していないが、もう１点出土している。釉は先と同様であるが、細かな貫入が入り、内面はロクロ成形痕がみられる。長沙窯系の陶器の可能性もある。

高麗青磁（第36図38～44）

全体で10点出土しており、そのうちの６点を図化した。**38・39**は青緑色の釉を厚く掛け、外面に２条を一単位とする凹みをつけた後、その周りを線彫りすることにより蓮葉状の紋様を描いており、口唇端部を外反させている。山本分類（山本1990）によるⅡ１類に属する。この手のものは３点出土している。**40**は濃緑色の釉を掛けているが、被熱により表面が熔けている。体部が直線上に延び口唇端部は外側に向けて丸く納める。高台の出土がないため詳細はわからないが、蛇ノ目高台となるＩ２Ａと思われる。**44**についても同様である。胎土中は細かなヒビ割れが認められる。**42**は濃緑色の釉を全体に掛け、畳付けの部分は後に拭き取られている。高台に４つの砂目が見られる。**43**の高台は竹の節状に２段になるが、均一性はなく高台端が潰れ、めくれあがったような感がある。見込みは砂目跡が残り、全体で４個と推定される。高台内はヘラ削りで中心が高くなる。

朝鮮製無釉陶器（第36図41）

胎土が赤褐色を呈し、薄い白土と互層を成す。釉は青灰色で、この破片の中央部に突帯が一条巡る。内面はヘラで調整をおこない、緩い起伏が続く。いわゆる朝鮮製雑釉陶器で、破片が31点出土しており、白磁碗Ⅳ類に伴う12世紀代のものと考えられる。

以上輸入陶磁器を中心に説明を加えてきたが、その主体は白磁碗であり、いわゆる中世前期の遺物で占められいる。遺物のほとんどが11世紀～12世紀代を主体とし、13世紀代になると急激に減少することが大きな特徴である。下の表は、破片総数によるものだが、土師器が数量的に磁器を上回っており、出土の土師器のほとんどが、白磁碗Ⅱ・Ⅲ類、白磁碗Ⅳ類段階のものであることを示唆している。

［参考文献］

森田　勉・横田賢次郎　1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』
山本信夫　1983　「土器の分類」『大宰府条坊跡』Ⅱ　太宰府市の文化財第７集　　太宰府市教育委員会
上田秀夫　1982　「14～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』NO.２　　日本貿易陶磁研究会
山本信夫　1990　「大宰府における13世紀中国陶磁の一群」『貿易陶磁研究』NO.10　　日本貿易陶磁研究会
森本朝子　1997　「出土遺物の分類」『博多60』福岡市埋蔵文化財調査報告書第543集
森本朝子　1997　「博多出土の貿易陶磁　その分類試案」　『法哈嘘』第５号
中世土器研究会編　1995『概説　中世の土器・陶磁器』　　真陽社

輸入陶磁器 145点 （31％）	国産土器（土師質土器・瓦器・石鍋） 324点 （69％）

表２　舶載陶磁器と国産土器の割合

e．木製品（第37図１～５）

杭状木製品と不明木製品が出土している。**1**は先端部に５回程のカット痕を残す杭状のもので、図の上部分は焼けて、ほとんど炭化している。本来別の所に立っていた柱が火災等によって消失し、柱の根の部分を廃棄したものであろう。**2**は、下の部分にカット痕が、全体に面取りした痕跡がみられる。**3**は、小さな杭状のもので、先端部は２～３回の一方からのカット痕が認められる。１と同様に全体に被熱痕が認められ、上部は焼失したものと思われる。**4・5**は一本の棒状の木を、中央部に環状のものを間隔をおいて二つ削りだしたもので、ちょうど二つの円板を串刺しした形に整形している。

5は長さ12.6cmを測り小さめであるが、剥落がはげしく原形はもっと大きかったと推定される。ただし、**4**よりも小形のものであったと思われる。**4**はやや大きめで、本来の形にほぼ近い状態にある。円盤状に削り出された部分が、正円形ではなく、一方に長い楕円形であったことが理解できる。

このような木製品については、他に例をみることはできないが、糸車に使われる軸の支点の部分の可能性を指摘しておきたい。

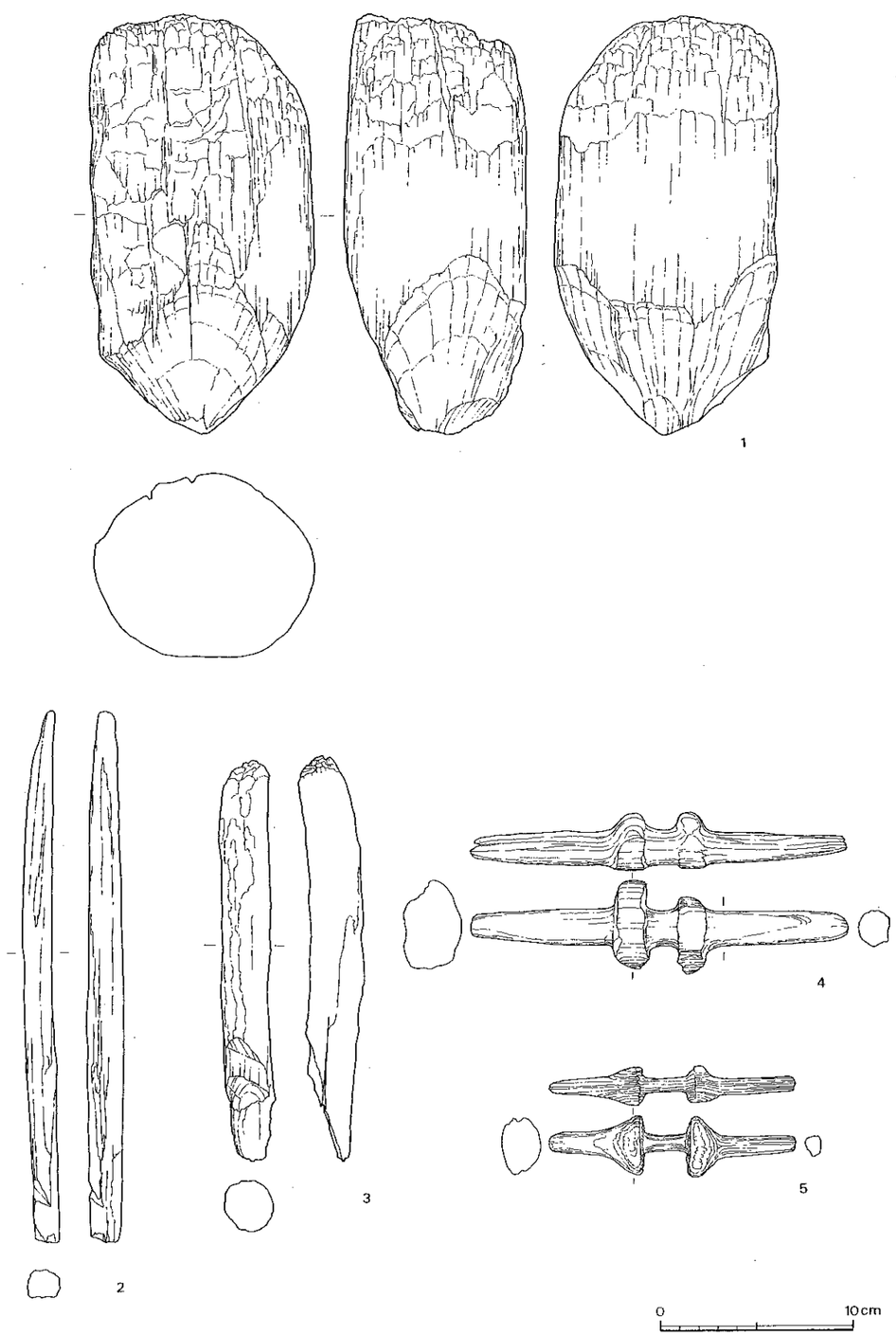
f．その他の遺物（第38図１～12）

２号人骨の側から貝輪２点が出土している。２点ともにベンケイ貝製で、全体を丁寧に研磨している。**1**が腕の先の方に、**2**がその次に装着されていた。腕先側に装着されたものの方が若干小さめである。**1**が長径7.4cm、短径6.2cm、**2**が、長径7.6cm、短径6.2cmを測る。この２号人骨の胸部あたりからは、**3**の鉄製耳環が出土した。人骨の周辺の遺物は、須恵器と弥生後期の土器が散乱した状況であったため、時期的な問題が生ずるが、耳環が弥生に出土した例を知らないため、耳環については弥生時代以降の遺物としておきたい。ただ、近年貝輪を装着した古墳時代の人骨の報告がなされているため、この人骨についても、その可能性を考えておかねばならないであろう。**4**は鉄製の銛先で逆刺をもつ。**5**はあわびおこしの把手部分、あるいは想像逞しくすれば骨製の札（徴税の際の荷札）の可能性もある。**6**は砂岩製の砥石で、この他３点出土している。**7・8**は上部にくびれ部分を持つ不明石製品で、**7**が滑石製**8**は砂岩製である。上部に切れ目を入れることから、この部分に紐等をかけたことが想像され、秤量用のいわゆる権状製品、あるいは石錘とも考えられる。**9**は紡錘車で、半欠した状態。表面に擦痕が多数みられる。**10**は、方柱状の扁平片刃石斧である。頁岩を使用し、全体に丁寧な研磨がなされている。上部を欠損するが、加工の状況からこの状態でも使用していることがわかる。**11**は蛤刃状の石斧で刃部側面のみを残した状況である。**10**と**11**は弥生時代に属するものであろう。**12**は石英製の円礫を使用した火打石で、使用の為上下とも破砕して黒くなり周辺は被熱した状況を示す。

これらの遺物は沼地出土のものであり、少なくとも弥生前期以降、12世紀までの遺物として捉えられる。この事から**1・2**の貝輪、**10・11**の石斧については弥生時代に、**3**の耳環、**4**の鉄製銛先、**9**の紡錘車などは古代に、その他の遺物については所属時期不明であり、古代から中世の遺物としておく。

［参考文献］

吉村靖徳　1995「権衡に関する一考察」「福岡県内出土権状製品の検討と課題」『九州歴史資料館研究論集』20



第37図　木製品実測図（1/3）

第38図　その他の遺物（1/3）

Ⅵ．自然遺物について

1．大浜遺跡出土の動物遺存体

宮路淳子（京都大学大学院人間・環境学研究科）

1　はじめに

福江島では、縄文時代前期から弥生時代にかけて、江湖貝塚（縄文前期）[1]、宮下貝塚（縄文前～後期）[2]、白浜貝塚（縄文後期～弥生前期）[3]、岐宿貝塚（弥生前～中期）[4]などの貝塚が海岸部に形成されている。１９６０代に九州大学と同志社大学による共同調査が五島列島で実施され、１９６２年、酒詰仲男[5]を代表とする調査団が大浜遺跡（弥生中期）の発掘調査を行った。酒詰はこの調査で４７種類の貝類、ブリ、スズキ、マダイ、ブダイ、カンダイの魚類、シギ、ウミウの鳥類、クジラ、ウシ、シカ、イノシシ、イヌの哺乳類を報告している。

今回の調査区は、酒詰らの調査地点の東側に位置し、縄文時代後期初頭、晩期、弥生時代前期～中世の各層位から、多数の動物遺存体が出土した。小文では、これらの動物遺存体の分析結果について報告する。

2　動物遺存体の採集および分析法

動物遺存体は、縄文後期初頭を主体とするⅦ層、縄文晩期を主体とするⅤ層、弥生前期～中世の３層からそれぞれ出土した。これらの動物遺存体は、発掘時に取り上げられたものであり、選別にふるいは使用していない。

出土した動物遺存体は、１cm以上のすべての破片について種名、部位、成長度、解体痕、被熱状況、大きさなどを記録し、基本資料として保管している。

3　動物種の概略

分析に用いた資料は１，１１３点で、哺乳類、魚類、爬虫類、鳥類の順で多い（図１）。貝類は、主に７層から出土しているが、発掘時に全資料が取り上げられたわけではないため、点数を数えられず分析には加えなかった。

ａ魚類　同定できたのは、ウツボ、エイ類、コブダイ、ブダイ、ハタ科、サメ類、スズキ、ベラ科など９種類、５０点で、全出土点数の４％であった。いずれも沿岸から内湾の岩礁域に生息する種類であり、遺跡の南側にひろがる富江湾で漁獲されたものであろう。海岸部の遺跡としては、魚骨が少ないことが指摘できる。ただ、魚骨資料は哺乳類にくらべて小さいために見逃されることも多く、出土数が少ないのは、選別にふるいが使われていないことが影響しているかもし

---

[1] 正林　護１９９６　「江湖貝塚」原始・古代の長崎県　資料編Ⅰ　長崎県教育委員会　pp.681-689

[2] 長崎県教育委員会編　１９６８　「長崎県文化財調査報告書第７集　宮下遺跡調査報告図録篇」長崎県教育委員会、賀川光夫　１９７１　「長崎県文化財調査報告書第９集　宮下遺跡調査報告解説篇」長崎県教育委員会

[3] 安楽　勉編１９８０　「福江市文化財調査報告書第２集　白浜貝塚」福江市教育委員会

[4] 鏡山　猛編１９６４　「岐宿貝塚」五島遺跡調査報告書　長崎県教育委員会　pp.1-51

[5] 酒詰仲男　１９６４　「長崎県大浜遺跡の発掘調査概要」五島遺跡調査報告書　長崎県教育委員会　pp.1-19

れない。同定は、主上顎骨や歯骨など各種の魚類に特徴的な部位を用いて行った。

b爬虫類　ウミガメ類が２７点、　陸生、淡水生カメ類が３点出土している[6]。

c鳥類　鳥類は７点出土した。キジ科の上腕骨、猛禽類の上腕骨、尺骨、他に種不明の上腕骨、尺骨、大腿骨などが出土している。

d哺乳類　哺乳類は、1,005点あり、ニホンジカとウマが多数を占め、イノシシ、ウシ、イヌ、ノウサギ、クジラ類、イルカ類、ヒトがつづく（図２）。

ニホンジカ　総数425点で、動物遺存体の全出土数の４５％と、約半数近くを占める。３ａ・３ｂ層（弥生中期～中世）で156点、５層（縄文晩期）で30点、７層（縄文後期）で114点出土している。出土部位では、鹿角、下顎骨、肩甲骨、脛骨などがそれぞれの層位で多く、四肢骨などに加工痕を残す個体が多い。Ⅲａ・Ⅲｂ層では出土数に対して下顎骨が少なく、左右あわせても10点しかないのに対し、Ⅶ層ではあわせて４８点出土している。

ニホンジカで特徴的なのは、成獣が多いにもかかわらず小さな個体が大半を占めることである。四肢骨の計測値は、中手骨平均ＧＬ16.1cm、中足骨平均ＧＬ17.7cm、橈骨平均17.3cmであり、これは現生標本の５分の４ほどの大きさでしかない（表１）、大浜遺跡から出土するシカが小さいことは酒詰も指摘しており[7]、島嶼部に生息する動物が小型化するという現象を示す例として興味深い。

ウマ　234点が出土しており、全出土数の２１％を占める。出土数はⅢａ・Ⅲｂ層からが最も多く、172点を数える。Ⅴ層からは36点、Ⅶ層からは35点、それぞれ出土している。ただし、Ⅴ、Ⅶ層の資料は、Ｃ－５区出土の臼歯を除くといずれも沼状の遺構からの出土であるため、上層からの流れ込みがあった可能性も考えなければならない。出土部位は臼歯がもっと多く、96点とウマ全体の４１％を占める。ついで基節骨、中手あるいは中足骨、寛骨、脛骨などが多く出土した。

イノシシ　111点が出土しており、全出土数の１０％を占める。出土数はⅢａ・Ⅲｂ層が多く59点、Ⅴ層から６点、Ⅶ層から32点出土している。後臼歯の磨耗具合で年齢構成をみると、Ⅲ層では年齢にかたよりがなく、幼獣から老獣まで利用していた様子がうかがえる（図３）。Ⅴ層とⅦ層には、幼・若獣が多く、老獣はみられない。弥生時代の集落遺跡からは、若獣の割合が高いことが知られており、年齢構成と飼養の問題は深い関わりをもつ。また、大浜遺跡の場合、大陸との中継地点としての五島列島の立地上の性格から、ブタが入っていることも考えられた。第３後臼歯の計測値からは、Ⅲ層から出土した個体群が、Ⅴ、Ⅶ層のものに比べて大型化しているという傾向がみられ、これらにブタが含まれる可能性がある。

---

[6] ウミガメ類にはウミガメ科とオサガメ科が含まれるが、科まで同定することができなかったので、ウミガメ類として一括した。

[7] ５に同じ

[8] 飼育されている場合、若獣で屠殺される場合が多い。それ以上の年齢になっても、成長はみられず肉がまずくなり飼育効率が悪くなるだけだからである（松井　１８８６）

ウシ　20点出土し、全出土数の２％を占める。出土量はⅢａ・Ⅲｂ層で16点と最も多い。部位は上腕骨、脛骨、距骨、踵骨などである。５層にはまったくなく、Ⅶ層で４点出土した。このⅦ層の資料もウマと同様に、沼状の地点から出土したものである。

イヌ　９点出土した。同定できた部位は、犬歯、下顎骨、上腕骨、大腿骨などである。いずれも成獣で、特にＡ－６区Ⅲ層から出土した下顎骨は、歯が抜け、骨が病変を示すなど、かなり老齢であった。Ｂ－４区Ⅶ層から出土した上腕骨には明瞭な解体痕が存在し、イヌが解体されていたことを示している。

ノウサギ　Ⅶ層から大腿骨１点を検出した。

クジラ類　肋骨、椎骨など22点、歯が３点出土している。Ⅶ層に集中し、とくに肋骨がまとまって出土している。いずれも火を受けて黒色に炭化し、斧様の解体痕を残すものもあった。福江島北部の白浜貝塚からはクジラの肋骨を利用したアワビおこしが出土しており[9]、また大浜遺跡でも１９６２年の調査で肋骨製品が報告されている[10]など、福江島ではクジラ類が早くから生活に利用されていたことがわかる。

イルカ類　椎骨７点、下顎骨１点がⅢ、Ⅴ、Ⅶの各層から出土した。

鰭脚類　種類は不明である[11]が、鰭脚類の肋骨などが、Ⅶ層から８点出土している。そのうち２点に解体痕が存在した。

４　まとめ

本遺跡から出土した動物遺存体は、総数1,113点であり、哺乳類が1,005点（９０％）、魚類が50点（４％）、爬虫類が30点（３％）、鳥類が７点（１％）という割合になっている。海岸部の遺跡としては、全層位を通じて魚類の数が少ないが、ふるいの使用の有無や、砂質の堆積状況で魚骨が腐朽した可能性など、いくつかの要因を考慮にいれる必要がある。

層位別にみると、　Ⅲａ・Ⅲｂ層（弥生前期～中世）からは動物遺存体の出土量が多く、ウマ140点、ニホンジカ155点、イノシシ59点、ウシ16点が出土している（図４）。鳥類は、現生標本のノスリやオオタカよりも大きな猛禽類が２点ある。解体痕を残しているので、捕獲、解体されていたことを示す。ウマの骨には解体痕が少ない。

Ⅴ層（縄文晩期）では、すべての種類を通して出土量が少ない。土層の堆積状況もきわめて薄いので、この時期には遺跡があまり利用されていなかったと考えられる。ただ、ヒトの下顎骨が３点出土しているが、場の性格が変化したことを示すのであろうか。

Ⅶ層（縄文後期初頭）では、ニホンジカが175点と、もっとも多く出土している。ついでウマ34点、イノシシ32点、ウシ４点が続く。Ⅶ層では陸棲哺乳類の他に、クジラ類、鰭脚類などの海棲哺乳類がまとまって出土している。遺跡の前にひろがる富江湾に入り込んだものを捕獲したのであろうか。これらの骨には加工痕を残しているものがあり、食用のほかに骨角器の材料として

---

[9] ２に同じ

[10] 長さ２４５ｍｍ、幅４０ｍｍ、厚さ１５ｍｍの肋骨製品が人骨に伴出している。出典５に同じ

[11] 現在調査中。

も用いられていたのであろう。当時の大型海獣類の利用を示す資料として重要である。また７層では、魚類が種類・量ともに多い。ノウサギ、ウミガメ類も主にこの層位から出土しており、縄文時代後期には、縄文人が多様な海産資源、陸産資源を活発に利用していた様子をうかがうことができる（図５）。

大浜遺跡では、酒詰によって弥生時代中期のウシが報告されている[12]。また近年、表採資料のウシの臼歯について炭素１４年代が測定され、弥生時代中期の年代が得られている[13]。今回の縄文後・晩期、弥生～中世の層位のウシ、ウマは、大多数が沼状の遺構から出土しており、上層からの流れ込みや撹乱の可能性など、堆積状況とあわせた再検討を要する。今後炭素１４年代の測定を行う予定があり、年代についての検討はそれらの分析結果を待ちたい。

	中手骨（cm）	中足骨（cm）	橈　骨（cm）
大　　浜（平均値）	１６．１	１７．７	１７．３
現生標本（平均値）	１８．９	２１．７	１９．６

表３ ニホンジカ四肢骨計測値

[12] ５に同じ

[13] 「Gak-16464　牛歯　年代１９１０＋９０BP.(A.D.40)」との報告がある。木越邦彦　１９９２「学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書」福江市教育委員会[11] 現在調査中。

※　年代測定結果については、宮路淳子氏の玉稿を頂いた後に結果が出たため、氏には御迷惑をおかけしたことを謝して記しておく。（福田）

大浜遺跡出土動物遺存体種名表

貝類（検討中）
脊椎動物門　PHYLUM VERTEBRATA
硬骨魚類綱　CLASS OSTEICHTHYES
　ハタ科の一種　Family Serranidae
　ベラ科　Family Labridae
　　カンダイ　*Semicossyphus reticulatus*
　スズキ科
　　スズキ　*Lateolabrax japonicus*
爬虫類綱　CLASS
　ウミガメ（検討中）
鳥類綱　CLASS
　ガンカモ目　Order ANATIDAE
　　ガンカモ科　Family Anatidae
　　キジ科　Family Phasianidae
　　猛禽類（検討中）
哺乳綱　CLASS MAMMALIA
　ヒト科　Family Hominidae
　　ヒト　*Homo Sapience*
　ウサギ科　Family Leporidae
　　ノウサギ　*Lepus brachyurus*
　イヌ科　Family Canidae
　　イヌ
　　イタチ　*Mustela sibirica*
　イノシシ科　Family Suidae
　　イノシシ　*Sus scrofa*
　シカ科　Family Cervidae
　　ニホンジカ　*Cervus nippon*
　ウシ科　Family Bovidae
　　ウシ　*Bos taurus*
　ウマ科　Family Equidae
　　ウマ　*Equus caballus*
　アシカ科　Family Otariidae
　イルカ類（検討中）
　クジラ類（検討中）

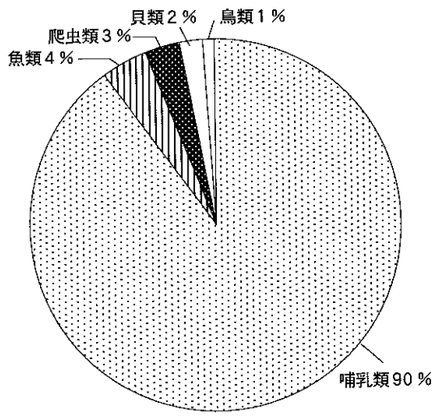


図１ 大浜遺跡、動物遺存体の出土割合

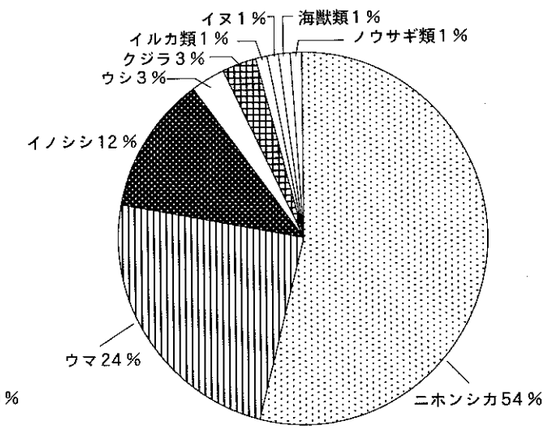


図２ 大浜遺跡、哺乳類の割合

表４ 大浜遺跡出土動物遺存体の出土割合

図3 イノシシ年齢構成

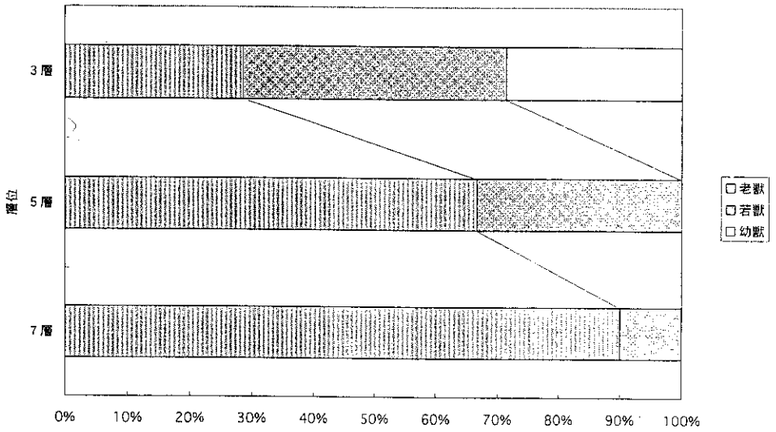


図4 層位別出土量

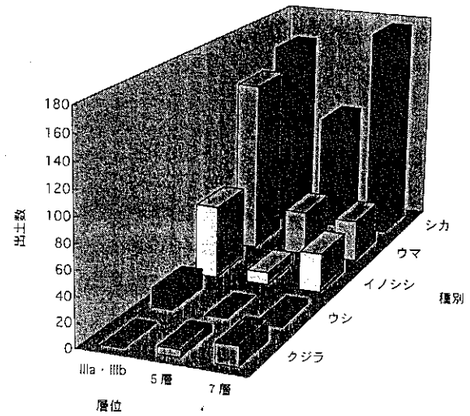


図5 層位別組成

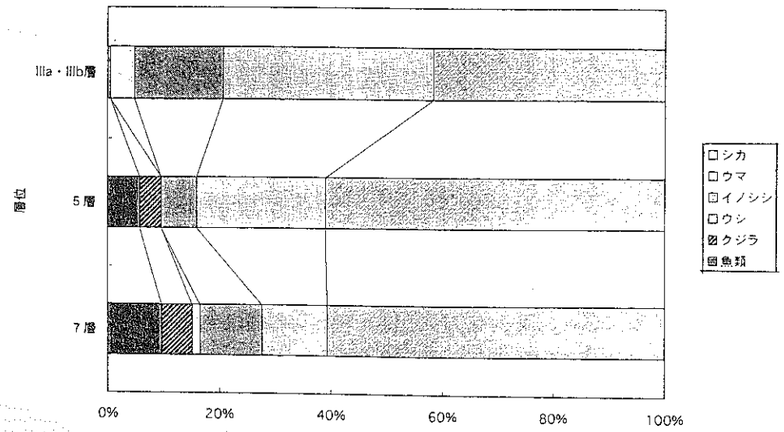


表5　動物遺存体関連表

2．大浜遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社　古環境研究所

1．試料と方法

試料	種　類	処理・調整	測定法
A	骨（コラーゲン）	コラーゲン抽出 石墨調整	ＡＭＳ法
B	骨（コラーゲン）	コラーゲン抽出 石墨調整	ＡＭＳ法
C	骨（コラーゲン）	コラーゲン抽出 石墨調整	ＡＭＳ法
D	骨（コラーゲン）	コラーゲン抽出 石墨調整	ＡＭＳ法

2．測定結果

試料	^{14}C年代 （年BP）	δ^{13}C （‰）	補正^{14}C年代 （年BP）	暦年代	測定No. beta－
A	1080±60	-12.6	1280±60	交点：AD 720, 735, 760 2δ：AD 650 TO 885 1δ：AD 675 TO 800	116073
B	1180±80	-11.6	1400±80	交点：AD 650 2δ：AD 535 TO 785 1δ：AD 605 TO 685	116074
C	1220±50	-20.4	1300±50	交点：AD 695 2δ：AD 650 TO 865 1δ：AD 670 TO 780	1160753
D	1240±50	-21.5	1300±50	交点：AD 695 2δ：AD 650 TO 865 1δ：AD 670 TO 780	116076

※　試料A～Dについては、沼地内出土であり、A・BがⅢb層、C・DがⅢa層出土である。
なお、試料Aは牛、B～Dは馬歯である。
P.92の図版参照（福田）

Ⅶ，総　　括

1．大浜遺跡からみた五島列島の古代・中世

大浜遺跡から出土した遺物は膨大な量にのぼり、遺物も古墳時代～古代のものを中心に多岐にわたることが判明した。また、遺物は縄文晩期以降に形成された沼地から出土しており、この沼からは板付Ⅱ式の段階から中世にいたるまでの時期に、馬・牛、特に馬を中心とする獣骨と一緒に遺物が出土するという特異な出土状態を示した。ただし、沼の底から出土した弥生時代の配石遺構の状況から、沼の形成は弥生時代後期以降との推定をした。したがって沼に遺物が投棄され始めたのは、弥生時代終末から古墳時代初頭のことと思われる。出土した古代の遺物のなかでも緑釉陶器、墨書土器の出土等、古代官衙との結びつきが強い遺物もみられ、古代の五島を再考する重要な資料を提供した。表３は、坏蓋の破片、特に時期編年の決め手となる口縁部を集め、表にしたものであるが、これから６世紀後半～７世紀代と、８世紀～９世紀とにピークをもち、甕・壷類の出土が多いことが理解できる。

中世については11世紀～12世紀を主体とする遺物が出土し、福江島では本格的な中世前期の遺物が出土した。ここでは五島の古代・中世に焦点をあて、大浜遺跡と対比させながらⅠ～Ⅴ期に分類してみた（表５）。それぞれの時期について五島の歴史的背景を考慮しながら若干の考察を加えたい。

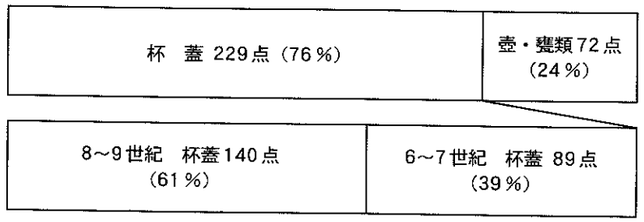


表６　須恵器個体別出土頻度

Ⅰ期　３世紀後半～４世紀初頭

この時期については大浜遺跡以外に該当する遺跡はない。大浜遺跡で出土した鼓形器台については３世紀終末～４世紀前半としておさえた。鼓形器台については九州では北部九州を中心に出土しているが、これらの出土地は後に前方後円墳や官衙等につながる中心的な遺跡が多く、このことからも大浜の地が重要な位置にあったことが推測される。この鼓形器台の時期に先行する遺跡として、福江市一本木遺跡・橘遺跡等が知られている。一本木遺跡、橘遺跡の出土遺物から、これらの遺跡は西新式の前半に、大浜遺跡の鼓形器台については西新式の後半に位置づけが可能かと思われる。また大浜遺跡出土の土師器の鉢についても柳田編年（柳田1987）のⅡａ～ｂ式に位置づけられるものと考えられ、大浜遺跡出土の鼓形器台と鉢は、ほぼ同じ時期に沼に投棄、あるいは配置された可能性を指摘しておきたい。沼内の遺物の中でこの時期にあたる遺物は他に看取されないことから、祭祀的意味合いが非常に強いと考えられる。鼓形器台そのものが祭祀的な性格を内包する以上、この地で沼を介した何らかの祭祀がおこなわれたことが推測される。鼓形器台という特殊な土器での祭祀であるだけに、そこには大和政権との繋がりが強い勢力が関与しているとみることもでき、在地の有力者、あるいは大和政権の息の掛かった西北九州の勢力による祭祀がおこなわれたのであろう。ただ、祭祀遺跡と考えた場合、祭祀遺跡とする根拠が鼓形器台の出土だけであり、他の祭祀遺跡に見られるような特殊祭器を共伴しないことは今後さらに検討を要する必要があろう。鼓形器台の搬入経路としては、弥生時代からの土器の搬入経路と同様に、玄界灘ルートで西北九州からもたらされたと考えるのが妥当であると思われる。これに関わったのが北部九州を中心とする海人集団の存在であろうことが予想されるが、現在のところ、この時期に関わる資料として大浜遺跡の鼓形器台と鉢以外になく、祭祀遺跡についての検討や、鼓形器台の県下でのさらなる出土を待ってこの時期を再考する必要がある。

Ⅱ期　５世紀～６世紀初頭

５～６世紀の時期は小値賀島において活発な交流がしめされている。すなわち神ノ崎遺跡の調査における初期須恵器・鉄斧・陶質土器等の出土であり、朝鮮半島・北九州との交流を示す物や、南九州系の地下式板石積石室墓が出土したことなどである（塚原1984）。地下式板石積石室墓は、『肥前国風土記』の値賀郷の条にある、容貌が隼人に似ているという文面に結びつけられ、南九州との交流を示唆するものとされる。この様な活発な交流活動は在地の首長層により統制された五島海人集団の存在を示すものであり、対馬と同様に耕作地に恵まれない五島の状況を表しているものであろう。また、いまだ国家の統制の枠外にあった奔放な五島列島の姿を表していると思われる。なお、初期須恵器などの遺物は現状では小値賀島以外出土しておらず、この時期の五島列島における小値賀島の優位性をあらわしていると考えることもできる。

Ⅲ期　６世紀後半～７世紀後半

この時期は小値賀島において高塚墳が形成される時期であり、小田の言うところの「国際的緊張関係における大和政権の支配強化」の時期である（小田1984）。大浜遺跡もその遺物量からみて、首長を中心とした村落が形成され、小値賀島を中心とする首長間連合の一員として機能していたことも想定されるが、現在のところ小値賀島以外では高塚墳の存在は確認されておらず、この時期の墳墓の調査もなされていない。あるいは対馬と同様に、弥生時代以来の墓制の伝統を継承している可能性もある。また、この時期は遣唐使派遣の初期のころにあたり、遣唐使の進路からは外れるが何らかの影響はあったものと思われる。この時期には小値賀島・宇久島で遺跡が散見されるようになる。宇久島宮ノ首遺跡では６世紀末のアワビの貝塚が検出されており、調査者の宮崎は萌芽的な貢納体制（宮崎1991，1995）のなかに組み込まれていった状況を示すものとして扱っている。また馬の骨の出土から、牧の存在の可能性も推定している。

Ⅳ期　８世紀～９世紀

律令国家の出現と、遣唐使船が南路をとることによって、ますます五島列島の存在が重要になってくる時期である。五島も律令国家体制の中に組み込まれ、松浦郡五郷のうちの値賀郷として編成されている（池邊1981）。遣唐使との関わりについては、第十四次遣唐使船（宝亀七年、776年）の寄港地として合蚕田浦・川原の浦・美弥良久の埼の地名がみられ、それぞれ現在の上五島町相河、岐宿町川原、三井楽町に比定されている。以後遣唐使廃止の時期までその寄港地として五島の

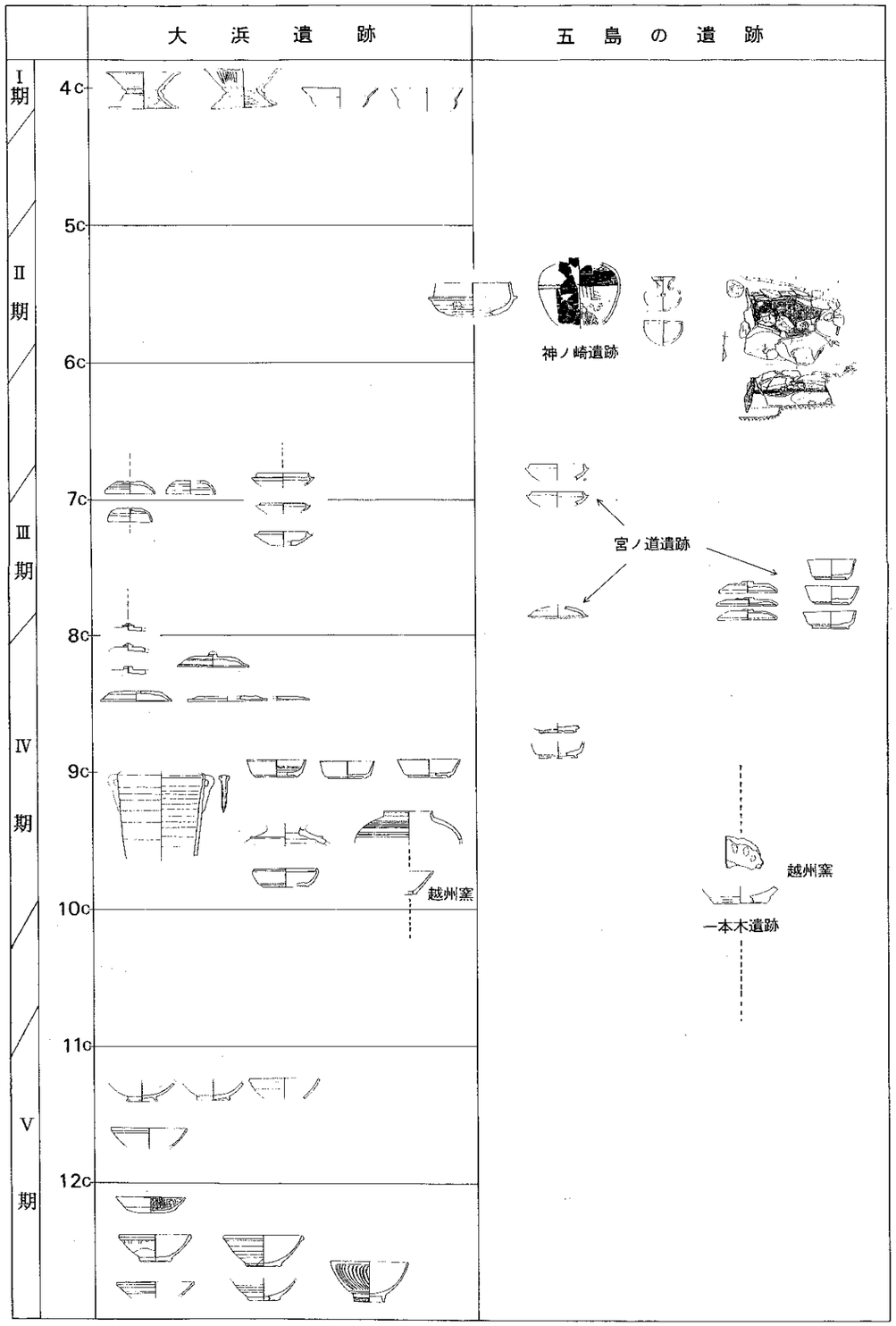


表７　大浜遺跡編年表

各地が文献上に登場するが（木本1996）、寄港地としては五島列島の西海岸が主体であり、東海岸における寄港地名はほとんど皆無である。この時期は大浜遺跡の遺物量が最大になる時期であり、緑釉陶器・墨書土器などの他、壷・甕・坏等を出土する時期である。緑釉陶器の出土や墨書土器の出土は官衙、あるいは寺社等の存在を想定させるが、大浜に関係する文献等は現在のところ存在しない。また大浜遺跡は福江島の南海岸にあたり、先述したように遣唐使の寄港地が五島列島の西海岸に集中することと相違するのである。

『日本三代実録』巻十によれば、貞観十八年（876年）在原行平の建議により庇羅・値嘉郷を合わせて上近・下近の二郡とし、値嘉嶋を設置するという条項が記載されていることから、他と同様に嶋司・郡領を設置したとされる。木本は庇羅郷を上近郡とし、値嘉郷を下近郡に推定している（木本1996）。先の建議が実施されたとするならば、五島に嶋司あるいは郡家が存在したことは間違いない。大浜遺跡の遺物が畿内産緑釉陶器や墨書土器を出土する背景にはこのような事象とも関連してくるのであろう。また、畿内産緑釉陶器、墨書土器の出土は、大宰府との結びつきが非常に強くなった状況を示すものであろう。律令体制の一端に組み込まれた五島ではあるが、894年には遣唐使の派遣が中止され、以後中央の文献上に登場しなくなる。大浜の遺物をみても10世紀前後に一旦希薄になる。

さて、大浜遺跡では今回の調査により多数の骨を検出した。年代測定の結果ほぼ７世紀～８世紀の年代を得ている。これはⅢ期後半から～Ⅳ期にあたる年代である。

この時期に大浜周辺に牧が存在した可能性大であり、大浜遺跡がこれらの牧の管理施設としての機能をもった場所であることが考えられよう。

Ⅴ期　11世紀～12世紀

10世紀代については、文献あるいは遺物ともに資料的にほとんど知られていないが、東アジアに目をむけると、中国では唐の滅亡、五代十国を経て宋が建国され、朝鮮半島では新羅が滅び高麗が建国されるなど激動の時代である。一方日本では律令体制が崩壊し、各地に荘園が形成される時期で、地方豪族が力をもってくる時期である。この時期に福江島でどのような勢力が台頭してきたかについては次のⅤ期を研究する上で非常に重要なところとなる。ここでは一応空白の時期ということでⅤ期を11～12世紀として捉えようと思う。

11～12世紀代になると五島列島が、にわかに文献・遺物ともに検出されるようになる。この時期は博多を中心に住蕃貿易が展開される時期でもあり、西北九州各地で爆発的に貿易陶磁が出土する時期である（亀井1992）。12世紀代の五島に関する文献は、12世紀中葉に小値賀島が松浦氏の支配下にあったことや、小値賀島地頭職の清原是包の存在など、小値賀島をめぐる領有権についての記載から始まり、以後『青方文書』を中心に史料の展開がなされる。Ⅳ期では中央の文献に登場する五島が、この時期にはほとんど扱われず、一地方文献に現れてくることは、10世紀の地方豪族の台頭を考える上でも重要な事象であろう。

以上、大浜遺跡を中心に五島列島の古墳時代から古代に到るまでⅠ期～Ⅴ期に分類したが、未だこの時期の調査数は少なく、現在ではまだ充実したものとはいえない。特に福江島を主体とした調査が望まれ、古墳時代・古代の五島列島を知る上で、ひいては九州西北部の島嶼文化を知る上で、特に重要な地といえよう。

［引用・参考文献］

柳田康雄　1987「土師器の編年２九州」『古墳時代』６土師器と須恵器　雄山閣

亀井明徳　1992「唐代陶磁貿易の展開と商人」『アジアのなかの日本史』Ⅲ海上の道　東京大学出版会

池邊　彌　1981『和名類聚抄郡郷里驛名考證』吉川弘文館

小田富士雄1984『神ノ崎遺跡』小値賀町文化財調査報告書第４集　小値賀町教育委員会

宮崎貴夫　1991『宮ノ首遺跡』宇久町文化財調査報告書第２集

宮崎貴夫　1995「五島列島の弥生古墳時代の墓制と文化」『風土記の考古学』５

２．年表からみた、古代・中世における五島列島

68～73ページに五島列島に関する年表を提示した。大浜遺跡に関連する事項等を文献から拾うことを目的として作成したが、直接大浜に関連する事項を見いだすことはできなかったため、福江島という範囲で捉えてみることとする。福江島に関する項目は、信憑性の高いものとしては遣唐使に関する記事である。遣唐使の寄港地については、上五島、下五島（通常、五島列島のなかでも奈留島以南を下五島、若松島以北を上五島とする）ともにそれぞれ現在地に比定がなされており、とくに最後の寄港地としての三井楽は当時の中央にも聞こえた土地でもある。９世紀の五島は遣唐使の最後の寄港地として、重要な役割を果たしており中央の文献上にも記載されることが多い。特に876年に奈留島の上鳴神と小値賀島の神島神社が従五位下を特に授けられたこと、また屁羅・値嘉の二郷を上近・下近の二郡とするなどの記録はこの地域が９世紀以後、中央にとっていかに重要な位置にあったかを示す事柄であろう。大浜遺跡の緑釉陶器や墨書土器はまさにこの時期の所産であり、遺物のうえからも大浜遺跡がなんらかのかたちで関わっていたことは間違いないであろう。さて、それでは遣唐使が廃止された９世紀以降についてはどうであろうか。作成年表でみる限り10世紀から11世紀の五島列島はこの期間ほぼ空白であり、９世紀の状況からは一変する。また、12世紀以後の年表は、ほぼ「青方文書」に負うところが多く、13世紀までは青方氏を中心とする上五島の地名のみで構成され、福江島の土豪等の名前は一切登場しない。福江島が文献上に新たに登場するのは14世紀、1383年に宇久氏が岐宿に移住してからのことである。つまり福江島については10世紀から13世紀にいたるまで文献上空白であるということである。五島列島最大の島、福江島がほぼ400百年間文献上空白であるということは何を意味するのであろうか。もちろん文献上に登場しないことがそこに歴史が存在しないということではないのであって、福江島にはそれなりの勢力があったであろうことは、今回の大浜遺跡の12世紀を中心とする遺物からも理解できよう。ただし、大浜遺跡の出土遺物は　６世紀後半から12世紀まで連綿と遺物が出土し、以後16世紀まで遺物はみられるものの、13世紀以後、遺物は極端に少なくなっていることは事実である。福江島の調査において古代・中世の遺物が量的に一括して出土したのは

今回の調査だけであり、他に比較検討の余地はないが、今後文献上空白である福江島の歴史を検討するためにも今後の福江島には一層の注意を払わなければならないものと思う。

３．まとめ

今回の調査によって判明したこと、あるいは問題点を箇条書にし、まとめとした。

1，Ⅶ層から阿高式系土器・鐘崎式土器、北久根山式土器を出土し、その内容は同じ大浜地区に存在する中島遺跡と同様のものであり、石器・骨角器等からもいわゆる西北九州型漁撈文化を特徴づけるもので、島嶼部の縄文後期文化を代表するものとして捉えられよう。

2，Ⅴ層から縄文晩期黒川式土器が出土しているが、この直上に数メートルの砂の堆積がみられ、黒川式土器以後に海退期があったことが推察される。また、砂丘上に再度生活の痕跡がみられるようになるのは板付Ⅱの段階からである。またこの時期に今回調査区の窪地に配石墓がつくられている。同志社大学調査地点をも考慮すると、砂丘上に大規模な弥生時代の墓地が形成されていたことが明らかになった。

3，窪地は弥生時代、配石墓が作られた後に、水が入り込み沼地を形成した。以後古くは４世紀代の遺物や６世紀後半から12世紀までを主体に連綿と遺物が投げ込まれた状況を呈した。また、馬を主体として獣骨類の多量の出土があり、今回の年代測定の結果７世紀後半から８世紀後半の骨との結果を得た。このことにより、この地域が古代の牧である可能性を示唆することとなった。

4，越州窯系青磁・緑釉陶器・墨書土器の出土や多量の須恵器の出土から、官衙の可能性を考える必要性があり、古代の大浜地区を歴史的に再考する必要性がある。また印花文陶器の出土は、この当時の朝鮮半島との交流をも考えさせるものであった。

5，遺物から10世紀前後の遺物が一旦希薄となり、11世紀から12世紀に舶載陶磁器を主体とする遺物が出土するが、このことはあるいは律令体制の枠から脱却した在地土豪への勢力転換の時期を示す可能性を持つものと考える。

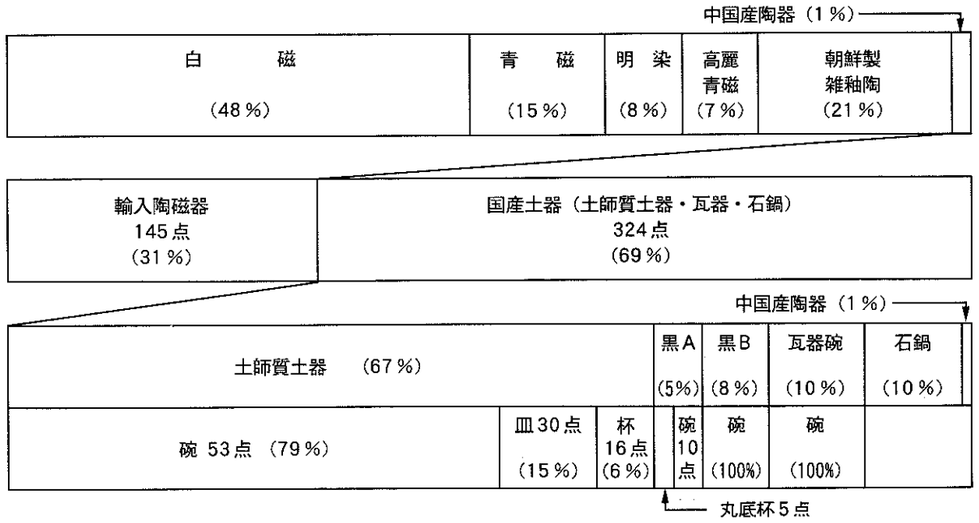


表６　陶磁器の系統別出土割合

五島列島古代・中世関連年表

古代・中世に限り、五島に関連する年表を作成した。五島には『青方文書』という長崎県を代表する古文書が存在する。年表作成にあたっては青方文書の関連資料を多様することが多く、特に12世紀～14世紀についてはこの文書で占められてしまい偏りが生じていることは否めない。今回この年表を作成するきっかけとなったのは、大浜遺跡の古代・中世陶磁器を執筆するにあたり、五島の文献史料中の年代を一覧にすることにより、おおまかな五島の歴史の流れを一目で知りたいという気持ちからである。今回、『青方文書』のすべての年代を記したわけではなく、私自身の判断により割愛した部分も多数あることを了承願いたい。また年表作成にあたり、私自身古文書に対し精通しているわけではないため、原典にあたることなく多くの文献を参考・引用させていただいた。参考・引用文献については最後の項で一割して取り上げている。

この年表を見るにあたり、次のことに留意してもらいたい。

「　」は原典名である

年表内の「　」の後の文献１～26については引用・参考とした文献を表し、引用・参考文献については最後に記載している。

参考・引用文献の後のＰについてはその参考・引用のページを表す。

583,	敏達一二年	・・百済の使人らが、日羅を百済に送りて本国に帰るとき、血鹿に停泊。「敏達天皇紀」文献１，Ｐ４
675,	天武四年	三位麻続王、罪を犯して因幡に流され、その子一人を伊豆島に、一人を血鹿嶋に流す。「日本書紀」文献５，年表日本史P112
677,	天武六年	新羅人、阿喰（官名）朴剌破、徒人三口、僧三人血鹿島に漂着　「帝王編年紀」　文献１，Ｐ７
608,	文武二年	玉ノ浦に白鳥宮を創始す。（其由緒）文献１，Ｐ９
	文武～大宝	震旦の僧道融、弥勒山大宝寺を開創す。讃岐高松に鎮座の大己貴大神を日の島金堂崎に勧請す。「上五島神社史」文献１，Ｐ９
	文武～慶雲	式外社、沖神島宮を勧請す。「五島通史」
725,	神亀二年	五社宮本殿を建立し、閏正月、鳥居を建立し、・・・「五社宮伝記」文献１，Ｐ８
733,	天平五年	山上憶良の「好去好来の歌」に値賀の岬という地名　「万葉集」巻五　文献７，P156
740,	天平十二年	藤原広嗣、・船に乗りて値嘉島に出で、・値嘉祖真に着し長野村に至る。（長野－宇久長野あるいは奈摩長野に比定）文献１，P11
769,	神護慶雲三年	初めて五社大神宮と称す。「五社宮伝記」文献１，Ｐ８
774,	宝亀五年	近江公藤将軍、勅命により値嘉島開発のため、この島の前片村中村郷に城を築きて居る、謄所城と称す。
776,	宝亀七年	第十四次遣唐使船の第一、第二船が合蚕田浦に寄舶。（合蚕田浦については、上五島町相河説と久賀の田の浦との二説がある。）文献15，P66
778,	宝亀九年	遣唐判官小野滋野等の第三舶投より橘浦に帰着す。（橘浦－玉之浦の入り江）文献１，P15，（上五島町三日ノ浦）「郷土奈留」P76・文献15，P67
783,	延暦二年	深江大津に八幡宮を創始す。「五島近古年代記」文献１，P16
796,	延暦十五年	前片村に端牛山浄善寺開創せらる。（其縁起）文献１，P17
803,	延暦二十二年	・・・・空海渡唐の途、田の浦に寄舶して・・・・文献１，P17
804,	延暦二十三年	第十六次遣唐使船、橘逸勢、僧空海等久賀島田の浦に寄舶す。玉之浦に寄港し、最澄は白鳥神社に参拝文献１，Ｐ18・文献15，P67
805,	延暦二十四年	第十六次遣唐使船の第２船値賀島に帰着。玉之浦の大宝寺の三論宗を真言宗に改め、明星院を開き、大同元年に帰朝。「郷土奈留」P76　文献１，P18　・文献15，P70
813,	弘仁四年	新羅人　一百十六人駕五艘船、着小近島、与士民相戦、即打殺九人、捕獲一百一人者。「日本後紀」十一巻
837,	承和四年	遣唐使船三艘・・・松浦郡曼楽埼を指して筑紫を発す。「帝王編年記」・「続日本後紀」　文献７，P158
842,	承和九年	入唐僧恵雲等は、博多から値賀島鳴浦に至り、船首李処人等は唐から乗ってきた旧船を捨てて島の楠木を切って三ヶ月で新船を完成させ６日で唐温州楽城県に着く。「平安遺文」文献16，P727「郷土奈留」P77
847,	承和十四年	第十七次遣唐船で入唐した僧円仁は、帰路遣唐使一行と分かれて楚州→赤山→新羅西岸→鹿島（値賀島）に到泊。橘浦に至る。「入唐求法巡礼行記」文献７，P158　文献25，P135
851,	仁寿元年	神島神社正六位上を授けらる。

853,	仁寿三年	延暦寺僧円珍は、入唐のため値賀島鳴浦に停泊。「智証大使伝」－天台宗延暦寺座主円珍伝－　文献16，P727，郷土奈留P77
869,	貞観十一年	新羅人が大宰府貢綿の船を掠奪。この唐船は五島を経由してきたもの。文献18，P34
858,	天安二年	唐商李延孝、明州を発ち値賀島曼美楽に着く。このとき853年に入唐した円珍も帰着。「智証大使伝」－天台宗延暦寺座主円珍伝－　文献25，P135
876,	貞観十八年	肥前国松浦郡庇羅・値嘉の二郷を上近・下近の二郡とし、この二郡をもって値嘉嶋を設置「三代実録」文献７，P125　文献18，P22
876,	貞観十八年	奈留島の上鳴神と神島神社従五位下を授けらる。「三代実録」
1151,	仁平元年	松浦源四郎直（御厨執行源四郎大夫直）御厨庄小値賀島預所職となる。「松浦家世伝」「青方系図」県史P253，文献３，P87
1152,	仁平二年	宇野御厨荘小値賀島の地頭の清原八郎是包が高麗船を略奪した罪により領家から解脚。「青方文書」文献15，P88，文献18，P74，文献２，P426
1181,	養和元年	松浦家十代峯公披、小値賀を領す。「松浦文書」文献３，P91
1183,	寿永二年	関東裁許状案　清原是包の姪、清原三子は子の山代六郎囲に小値賀島を譲る。「青方文書」文献２，P427・文献７，P281
1184,	寿永三年	関東裁許状案　源直、山代囲に小値賀島を譲る。「青方文書」文献７，P253，文献15，P84
1184,	寿永三年	関東裁許状案　源直，小値賀島地頭職を連（値賀氏の祖）に譲る。「青方文書」文献７，P253，P279・文献15，P84，文献２，P180，427
1188,	文治四年	鎌倉殿御下文　松浦十郎連、小値賀島地頭職補任　長崎県下の在地土豪で鎌倉幕府によって所領安堵された最も早い事例「青方文書」文献７，P279，文献15，P84「青方系図」文献３，P87
1196,	建久七年	右大将家下文　小値賀島住人、僧尋覚が宇野御厨内小値賀島地頭職に補任される。「青方文書」文献15，P84・文献７，P280，408，文献18，P52，文献３，P87，文献２，P427
1200,	正治二年	宇久氏、上有川、下有川の一揆を平定。「青方文書」
1203,	建仁三年	関東下知状連、地頭職安堵さる。「青方文書」文献15，P84
1204,	元久元年	関東下知状案　僧尋覚小値賀島地頭職安堵「青方文書」文献７，P283
1205,	元久二年	肥前国主語武藤資能が、山代囲・清原是包の後家・尋覚を召還し、小値賀島の地頭職について取り調べる。「青方文書」文献７，P282
1207,	建永二年	関東下文僧尋覚の小値賀島地頭職安堵（三度目の安堵）「青方文書」文献７，P283・文献３，P87
1208,	承元二年	尋覚譲状案　先祖十五代相伝所領小値賀嶋本領主地頭職事。尋覚は小値賀・浦部両島を長子太郎通澄に与う。「青方文書」，文献７，P408・文献３，P87・文献２，P426，428
1213,	健保元年	関東裁許状案　山代囲浦部嶋所領安堵「青方文書」文献２，P428
1218,	建保六年	山代三郎固、鎌倉政所より小値賀所領安堵の下文を得る。「青方文書」文献３，P87・文献２，P428
1219,	承久元年	藤原道澄、小値賀・浦部の両島を峰源藤二持に譲与す。
1221,	承久三年	関東安堵下状案　藤原道高、小値賀島地頭職を、峯源藤二持（道高と親子の契を結ぶ）に譲る「青方文書」文献２，P185，430
1228,	安貞二年	関東裁許状案　小値賀島地頭職の領有について肥前国御家人山代囲と同御家人峯源藤二持が争論。峯源藤二持が所領安堵さる。「青方文書」文献７，P260・文献14，P87・文献３，P91・文献２，P428
1233,	貞永二年	宇久家盛の子で扇の姉に当る女子源氏に肥前国宇野御厨宇久嶋内屋敷田畠等を領知せしめる。宇久氏の初見「青方文書」某沙汰事初案の背紙，文献７，P411（1313年の説もある）
1238,	暦仁元年	藤原通高の舎弟藤原家高は、峯持との和与により浦部島の下沙汰職に任ぜられる。家高は小値賀より浦部島へ移住。（始め、奈摩に住む）「青方文書」文献15，P93・文献２，P430
1243,	寛元元年	五島から船出して宋をめざした船が、暴風に遭ってとある島に漂着した。「漂倒琉球国記」文献22，P50
1249,	建長元年	家高、本拠を青方に移し、青方氏を名乗る。「青方文書」文献15，P93
1254,	建長六年	青方家高浦部島下沙汰職となる。
1256,	康元元年	家高、能高に所領の下沙汰職を譲り、二男の弘高に白魚・佐尾を譲る。「青方文書」文献15，P93

1260, 文応元年　関東御教書施工状　肥前国守護武藤資能は青方二郎宛施工状発給「青方文書」文献７，Ｐ409

1265, 文永二年　六波羅問状案　青方太郎吉高（能高）白魚弥二郎（弘高）青方氏が肥前国御家人と称した初見「青方文書」文献７，Ｐ409，文献２，Ｐ168

1273, 文永十年　小値賀・浦部の地頭職は峯又五郎湛にして、その領域は平戸・河内・野崎・黒島・小値賀にわたり、浦部島は小値賀の名をもって包括せられたるものとす。時に青方太郎能高、下沙汰職なり。「青方文書」文献３，Ｐ91

1274, 文永十一年　青方家高の次男、弘高が白魚氏をとなえ佐尾、白魚を治める。「青方文書」文献10Ｐ67・文献15では文永十年Ｐ97

1280, 弘安三年　白魚時高は正安四年までに十回異国警固番役を勤仕。　「青方文書」文献15，Ｐ98

1281, 弘安四年　蒙古合戦勲功賞　肥前国青方弥三郎家高　「青方文書」

1285, 弘安八年　覆勘状　肥前国役所姪浜警護番役事　白魚（時高）九郎殿　「青方文書」文献７，Ｐ333

1287, 弘安十年六月　〃　〃　白魚九郎殿　「青方文書」文献７，Ｐ333

1287, 弘安十年十二月　〃　〃　白魚九郎殿　「青方文書」文献７，Ｐ334

1288, 正応元年十月　〃　〃　白魚九郎殿　「青方文書」文献７，Ｐ334

1288, 正応元年十二月　〃　〃　□□九郎殿　「青方文書」文献７，Ｐ334

1289, 正応二年　〃　〃　白魚九郎殿　「青方文書」文献７，Ｐ335

1289, 正応二年　青方能高、波佐見左衛門太郎親平へ貝俣島（若松島）を譲る　「青方文書」文献15，Ｐ94・文献２，Ｐ367

1291, □応四年　覆勘状　肥前国役所姪浜警護番役事　白魚九郎殿　「青方文書」文献７，Ｐ335

1294, 永仁二年　青方高家陳情案　浦部島住人、大中臣国末と争論。　「青方文書」文献７，Ｐ419

1294, 永仁二年　肥前守護、青方高家に肥前要害所の修復を命ず。

1297, 永仁五年　青方四郎殿

1298, 永仁六年　鎮西探題奉行人施工状案　海俣島（若松島）から出帆した藤太郎入道忍恵の唐船が、樋島近くで難破し、海上の船党が押領しこれを青方・志佐・奈留の三氏が鎌倉方使者に渡す。「青方文書」文献７，Ｐ420

1298, 永仁六年　白魚九郎殿　「青方家譜引用文書」文献７，Ｐ420

1301, 正安三年　請取状　青方四郎　「青方文書」

1302, 正安四年　肥前国要害構石築地事　白魚九郎入道どの「青方家譜引用文書」

1303, 嘉元二年　白魚時高、峯貞と争論

1305, 嘉元三年　北条政顕配分状　白魚時高（行覚）蒙古合戦勲功賞として筑後国三潴庄是友名内田畠荒野を配分さる。『青方文書』文献２，Ｐ178，Ｐ444

1305, 嘉元三年　峯貞注進状　青方覚念とともに放火狼藉をした曾ね与一、曽根源二郎入道、同子息、弥五郎、又三郎、奈留平四郎、那摩藤五入道，得光氏　「青方文書」文献７，Ｐ420

1306, 嘉元四年　青方家高、峯貞と争論

1309, 延慶二年　鎮西御教書案　有河五郎入道性心その舎弟三郎兵衛尉広　「青方文書」

1310, 延慶三年　「御厨牛、以肥前国宇野御厨貢称之、角ながく骨ふとく、皮宍あつく、えた太く、おほかた牛大きなり，中古の名牛おほくこれに在り」　「国牛十図」　文献７，Ｐ202

1310, 延慶三年　有河性心と曽根与一、馬一匹につき争論

1312, 正和元年　「鎮西探題御教書案」青方高家と波佐見親平との相論について、宇久・・・・・・・・・・・・・・

1313, 正和二年　「鎮西探題御教書案」宇久孫次郎とあり、これが宇久島の在地領主宇久氏の存在が確認される最初。文献８，Ｐ82

1314, 正和三年　「御教書」肥前国青方浦事　青方高継、宇久孫次郎　「青方文書」

1318, 文保二年　鎮西探題裁許状案　那留兵衛次郎入道跡

1320, 元応二年　青方高光申状案　有河三郎兵衛入道円海は宇久氏六代披の代官である。宇久氏は青方・堺・有河と姻戚関係を結ぶ。　「青方文書」

1320, 元応二年　鎮西探題裁許状　青方高継、舎弟高光に和与し、奈摩、曽根、地区を分領す。波佐見真仏押領分の広瀬・大根河原・白草については、寄合沙汰とす。文献15，上五島町郷土誌Ｐ96

1322, 元享二年　沽却状　青方高継は堺兵衛四郎深に鮎河浦地頭職を銭五十貫文で沽却　「青方文書」

1324, 元享四年　着到状　青方八郎高継　「青方文書」

1325, 正中二年　青方高継請文案　波佐見左右衛門衛門太郎親平は下浦部内□講浦領主とある。「青方文書」文献７，Ｐ421

1327, 嘉暦二年　白魚盛高、（荒川・宿の浦の件で）宗家青方氏と和与。　「青方文書」文献15，Ｐ99

1331, 元徳三年　白魚盛高退隠し、嫡子繁に所領を譲る。　「青方文書」文献15，Ｐ99

1332, 元享二年　『西園寺実兼所領処分状案』肥前国御厨より毎年年貢として送られてくる子牛について書かれている。

1333, 元弘三年　少弐妙恵書下案　青方孫四郎高直　「青方文書」文献２，Ｐ488

1333, 正慶二年　肥前国五嶋青方孫八郎入道覚性謹言状　青方高直　「青方文書」文献２，Ｐ488

1334, 建武元年　青方高直、五島西浦部青方村地頭職を安堵さる。（松浦氏の所領から青方氏の所領となる）「青方文書」文献15，Ｐ124，文献２，Ｐ488

1336, 建武三年　青方高直申状案　肥前国御家人青方孫四郎高直　「青方文書」文献２，Ｐ488

1336, 建武三年　大友貞載覆勘状　五嶋青方孫四郎殿　「青方文書」文献２，Ｐ488

1337, 建武四年　青方高直目安状案　「青方文書」文献２，Ｐ489

1338, 建武五年　一色道猷催促状　松浦青方人々中　「青方文書」文献２，Ｐ489

1339, 暦応二年　一色道猷書下　松浦宇久青方孫四郎（高直）殿　「青方文書」文献２，Ｐ498，507

1340, 観応三年　青方重、松浦理との間で、祝言島・折島の領分争い。和解し、折島は松浦氏の所領で漁獲量・海草類は折半。祝言島は青方領。　「青方文書」文献15，Ｐ122，124

1344, 康永三年　平戸松浦と青方重が赤浜（曽根）・みつしり・河内（青方湾内）の網代で紛争、解決。　「青方文書」文献15，Ｐ449

1347, 正平二年　中浦部堺乃事。宿之浦のきみなご網の得分は肥州分、いわし網の得分は代官。「青方文書」

1351, 観応二年　青方氏、小値賀の領有権を放棄。津和崎、串島、浜ノ浦、道土井を松浦氏に譲る「青方文書」若松町史Ｐ78・文献15，Ｐ95では観応三年

1356, 延文元年　本村基重、西下して五島に来り崎山に住す。

1358, 正平十三年　青方氏と白魚氏戦う。　「青方文書」文献14，Ｐ99

1360, 正平十五年　青方重、白魚繁と和与。　「青方文書」文献15，Ｐ99

1362, 正平十七年　征西将軍宮懐良親王令旨　青方重、白魚繁に対する所領安堵。　「青方文書」文献15，Ｐ100

1361, 貞治元年　青方重、父高直に従い足利方に属す。　「青方文書」

1366, 貞治五年　宇久・有河住人等連署置文案

1370, 応安三年　青方重、地頭職を長子、豊前固に譲る。　「青方文書」

1372, 応安五年　青方豊前守固、尊氏から感状を受ける。　「青方文書」

1373, 応安六年　国人一揆許諾状　宇久・有河・青方・多尾一族等　「青方文書」文献２，Ｐ521
全（有河）・固（青方）・道阿（有河）・三（宇久）・重（青方）・広（宇久高瀬）・直（鮎川）・覚（宇久）他

1374, 応安七年　山王宮の宝殿改造、神体再興。（其の由緒）　浦桑に安養山浄福寺開創（其の由緒）

1377, 永和三年　鮎河道円・鮎河眤連署沽却状案　西浦目青方浦赤浜　那摩の波解崎　祝言島「青方文書」

1383, 永徳三年　宇久尾張守覚、宇久島山本の館より大値賀島（岐宿）に移る。「五島家系譜藤原氏系図」文献７，Ｐ654　文献８，Ｐ82，196

1384, 永徳四年　下松浦住人等一揆契諾状　文献７，Ｐ470
伊豆守勝（うく）・沙弥源光（ふくい）・因幡守広（うくのたかせ）・
石見守全（ありかわ）　豊前守固（あおかた）・式部丞貞（なる）・
沙弥道阿（ありかわ）「青方文書」「山代文書」文献７，Ｐ・文献16，Ｐ728

1388, 嘉慶二年　新左右衛門慰固（青方）　値賀女子代公武

1388, 嘉慶二年　宇久家八代尾張守覚、逝去。松熊丸、宇久伊豆守勝第九代を統襲。岐宿から辰の口城へ移る。

1398, 応永五年　青方宗家と鮎河氏（相河の主）が漁業権について争論。有河浦住人が調停契約。青方浦署名人中野氏他二名、有川浦有河氏外六名　「青方文書」文献15，Ｐ120

1400, 応永七年　篤等連署押書状案　青方氏、松田氏、（青方一族）網代名として江袋（南松浦群新魚目町）・二ツ河原「青方文書」「青方家譜」文献14，Ｐ120・文献２，Ｐ523

1413、　応永二十年　宇久浦中御契諸條々之事　松熊丸（宇久勝）を宇久家の名代に。文献１，Ｐ103～．文献８，Ｐ82
さたかたしんえもん・あのしゆり・よしたげき・なかかはら・わたせ・おはま・こは・大くぼたちわき・あの・かめのふち・こんどうさけう・たちさや・安永ひつちう・貞方さと・なかむらあき・安永しもつけ・貞方いつ入道・おにづか入道・おにづかふんご・いづみ・あのゝ二らさえもん全・あののゝひご・やまぐち・貞方入道・大久保入道・貞方うた

1415、　応永二十二年　重契約宇久有河青方一諾条

1422、　応永二十九年　五島住人によって、松浦氏と青方氏の祝言島・折島の争論を和与。両島の産物を相持ちとす。
「青方文書」文献15，Ｐ123

1433、　永享五年　十代宇久大和守基、生月・津吉の軍勢と連合し、松浦是興を平戸勝尾岳城に攻撃するも失敗。
文献８，Ｐ193・文献７，Ｐ654

1453、　享徳二年　第三次勘合船、大島を発し、走ること四十里で五島奈留島に着す。七日後に寧波に着す。「笑雲和尚入明記」文献16，Ｐ728

1455、　康正元年　宇久儀は、朝鮮と貿易す。文献８，Ｐ193

1465、　寛政六年　宇久大和守勝に遣明勘合船の警護を命ぜらる。

1467、　応仁元年　五島玉浦守源朝臣茂、五島悼大島太守源朝臣貞茂、使を朝鮮に遣はす。「海東諸国紀」文献７，Ｐ589，文献21，Ｐ57，文献20，Ｐ187

1467、　文正二年　五島田浦（久賀島田ノ浦）・・大竹あり・・、梶木のこと五島大近（福江島）床木のこと奈留海安寺門前在之・・硫黄のこと五島奈留海安寺　三千斤「戊子入明記」巻十一　文献16，Ｐ728

1468、　応仁二年　宇久大和守勝に遣明船の警護命ぜらる。警護諸子の中に奈留方（青方氏の族）とある郷土奈留Ｐ80

1469、　文明元年　五島悼大島太守源朝臣貞茂　五島日島太守藤原朝臣盛　朝鮮半島に遣使。「海東諸国紀」文献７，Ｐ593・文献21，Ｐ57

1481、　文明十三年　日本国肥前州下松浦五島宇久守源勝の対朝鮮貿易「成宗実録」巻一三三

1485、　文明十七年　第六次勘合船明より奈留浦に帰着す。「蔭凌軒日録」文献16，Ｐ728

1507、　永正四年　玉之浦納が主家宇久家に謀反をおこす。宇久囲は富江町黒島で自刃。文献７，Ｐ654・文献８，Ｐ193

1521、　大永元年　宇久盛定、松浦興信の援助で玉之浦納を討ち嵯峨島（三井楽町）で自害させる。
文献８，Ｐ197・文献３，Ｐ105・文献７，Ｐ654

1526、　大永六年　宇久盛定福江に江川城を築く。文献８，Ｐ191・文献３，Ｐ105

1528、　享禄元年　奈留大明神、八大竜王海安寺に海上安全の祈願。郷土奈留Ｐ78

1538、　天文七年　遣明船五島奈留で順風を待ちこれを得ず、博多に帰る。「初渡集」策彦入明記　文献７，Ｐ627

1539、　天文八年　第十次勘合船（大内氏）奈留浦を発航。

1539、　天文八年　萎衍恭ら十九名はみかんの貢納のため済州島から本土に向かう途中に漂流。五島近境の干自羅島（有川町頭が島？）で座礁。「世宗実録」文献24，Ｐ191

1540、　天文九年　宇久家第17代当主盛定は、交易を求めてきた明の王直に、土地を与え唐人町を開かせた。文献８，Ｐ191

1541、　天文十年　第十次勘合船五島姫島に帰着す。日の島を通り、那摩屋堅（奈摩館）に停泊。斑島から松浦郡呼子に着く。
五島から平戸に至る間が時日を要するものならん。「初渡集」－策彦入明記－　文献７，Ｐ629

1550、　天文十九年　奈留長門盛信に謀反の聞あり。宇久純定これを討たんとするや、逃れて平戸にはしる。
文献８，Ｐ197，郷土奈留Ｐ88

1555、　弘治元年　青方浦に大虔人（中国）の侵寇あり、撃退す。（山王宮棟札に祈願記録有り）文献15，Ｐ105

1566、　永禄九年　宇久純定、領内でのキリスト教の布教を許す。文献８，Ｐ191・文献７，Ｐ655
五島といういくつかの島がある。この島じまは魚と塩だけが豊富で、肥後、肥前の両国は、塩や魚油や魚の干物や塩漬けの供給をそこから仰いでいる。そこは豊富な鹿猟の地域で、住民たちはかなり猟に熟練している。ルイス・フロイス「日本史」

1587、　天正十五年　宇久純玄手勢を率いて秀吉に謁見。所領安堵の朱印を受ける。

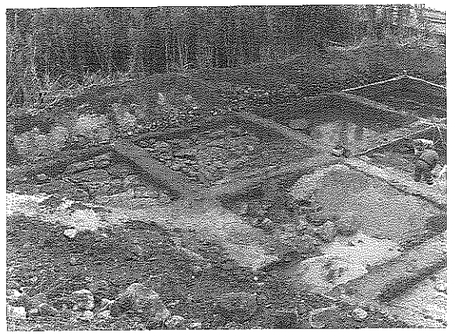
1588、　天文十六年　山口を出航した渡明船が五島に至り、奈留に滞在。「大明譜」文献15，Ｐ728

1592、　文禄元年　宇久純玄、五島と改姓。文献８，Ｐ191・文献７，Ｐ655

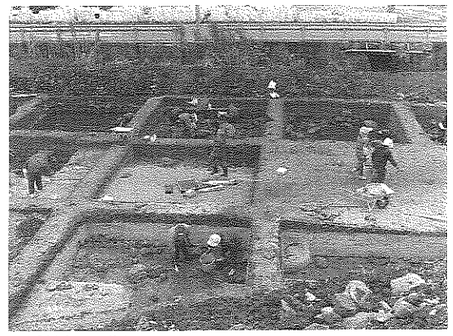
参考・引用文献

文献１　1973　中島　功　『五島編年史』上巻　国書刊行会
文献２　1975　瀬野精一郎　『鎮西御家人の研究』吉川弘文館
文献３　1978　小値賀町郷土誌編纂委員会　『小値賀町郷土誌』　小値賀町教育委員会
文献４　1979　外山　幹夫　『中世の九州』　歴史新書＝54
文献５　1980　黛　弘道編『年表　日本歴史』１－原始　飛鳥・奈良－　筑摩書房
文献６　1980　村井　康彦　『年表　日本歴史』２－平安－　筑摩書房
文献７　1980　長崎県史編集委員会　『長崎県史』－古代中世編－　吉川弘文館
文献８　1980　外山　幹夫　「長崎・佐賀」『日本城郭体系』第17巻
文献９　1982　岐宿町教育委員会　『岐宿城遺跡確認調査報告書』　岐宿町文化財調査報告書　第１集
文献10　1983　若松町教育委員会　『若松町史』
文献11　1984　新魚目町教育委員会　『魚目城』　新魚目町文化財調査報告書　第１集
文献12　1985　塚原　博　『町内遺跡分布調査・Ⅰ』　小値賀町文化財調査報告書第５集　小値賀町教育委員会
文献13　1986　塚原　博　『町内遺跡分布調査・Ⅱ』　小値賀町文化財調査報告書第６集　小値賀町教育委員会
文献14　1986　新魚目町・新魚目町教育委員会　『新魚目町郷土誌』
文献15　1986　上五島町　『上五島町郷土誌』
文献16　1987　竹内　理三編『角川日本地名辞典』42長崎県
文献17　1987　塚原　博　『町内遺跡分布調査・Ⅲ』　小値賀町文化財調査報告書第８集　小値賀町教育委員会
文献18　1987　外山　幹夫　『松浦氏と平戸貿易』　国書刊行会
文献19　1988　村井　章介　『アジアのなかの中世日本』　校倉書房
文献20　1991　申　叔舟著・田中健夫訳注　『海東諸国紀』　岩波文庫
文献21　1992　長崎県教育委員会　『長崎県と朝鮮半島』
文献22　1992　亀井　明徳　「唐代陶磁貿易の展開と商人」『アジアのなかの日本史』Ⅲ　－海上の道－　東京大学出版会
文献23　1993　外山　幹夫　『史料で読む長崎県の歴史』　清文堂
文献24　1993　村井　章介　『中世倭人伝』　岩波新書274
文献25　1995　玉之浦町　『玉之浦町郷土史』
文献26　1996　外山　幹夫編　－図説　長崎県の歴史－　『図説　日本の歴史』42
文献27　1996　藤田　明良　「中世東アジアの島嶼観と海域交流」『新しい歴史学のために』222号

図　　版



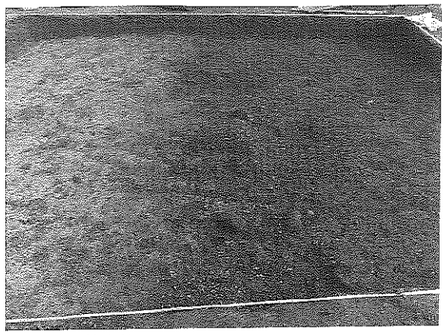
遺跡近景（北側より）



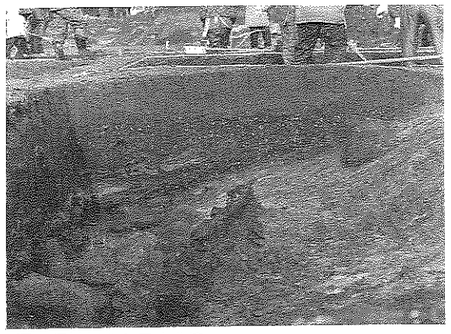
遺跡近景（北側より）

土　層

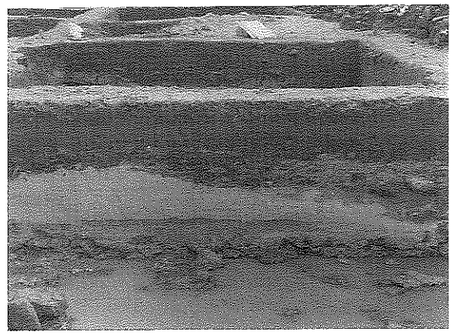
土　層



沼地境界検出状況



沼地傾斜部分と沼地堆積層



A-7区　北壁

晩期黒川式土器の出土状況と砂層の堆積状況

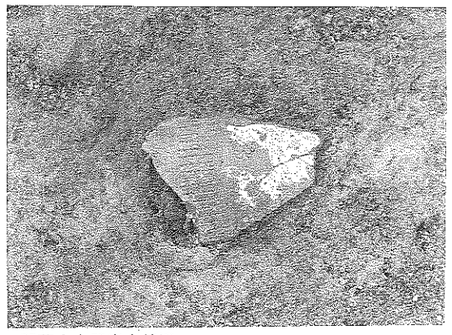
遺跡近景・土層

1号配石墓検出状況

2号配石墓　人骨・貝輪出土状況

須恵器・獣骨出土状況

須恵器・獣骨出土状況



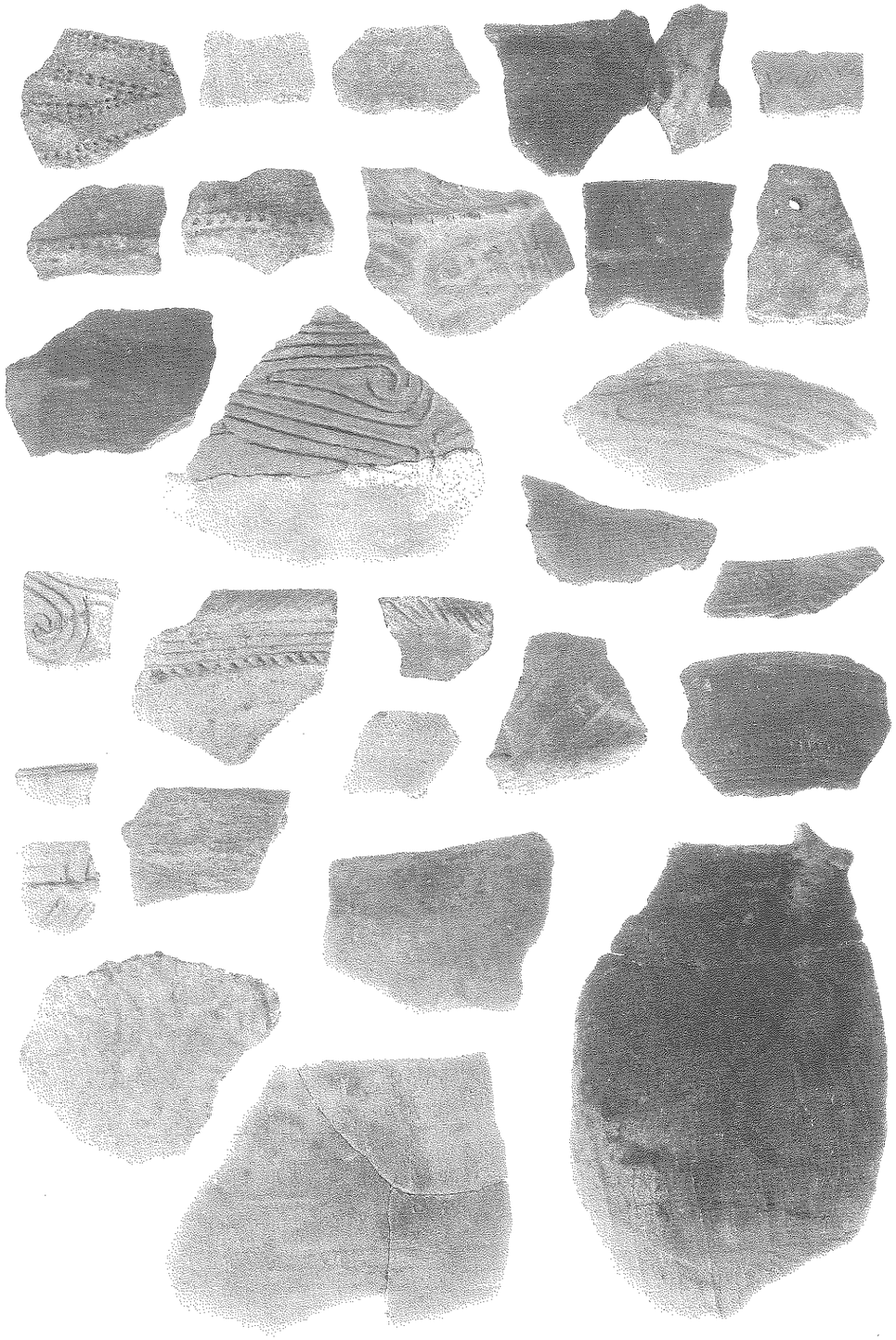
印花文土器出土状況

墨書土器出土状況

ヤス出土状況

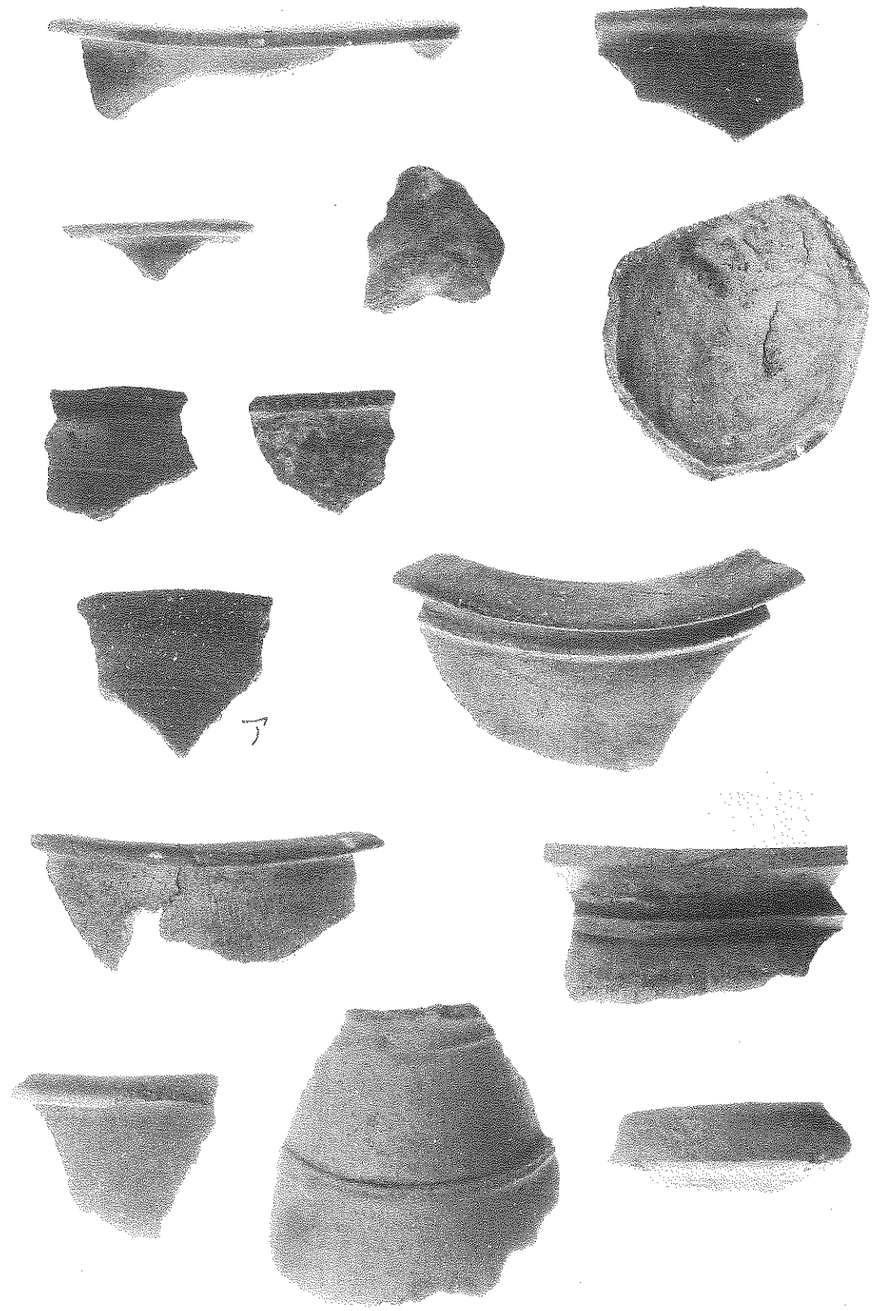
不明木製品出土状況

遺構・遺物出土状況

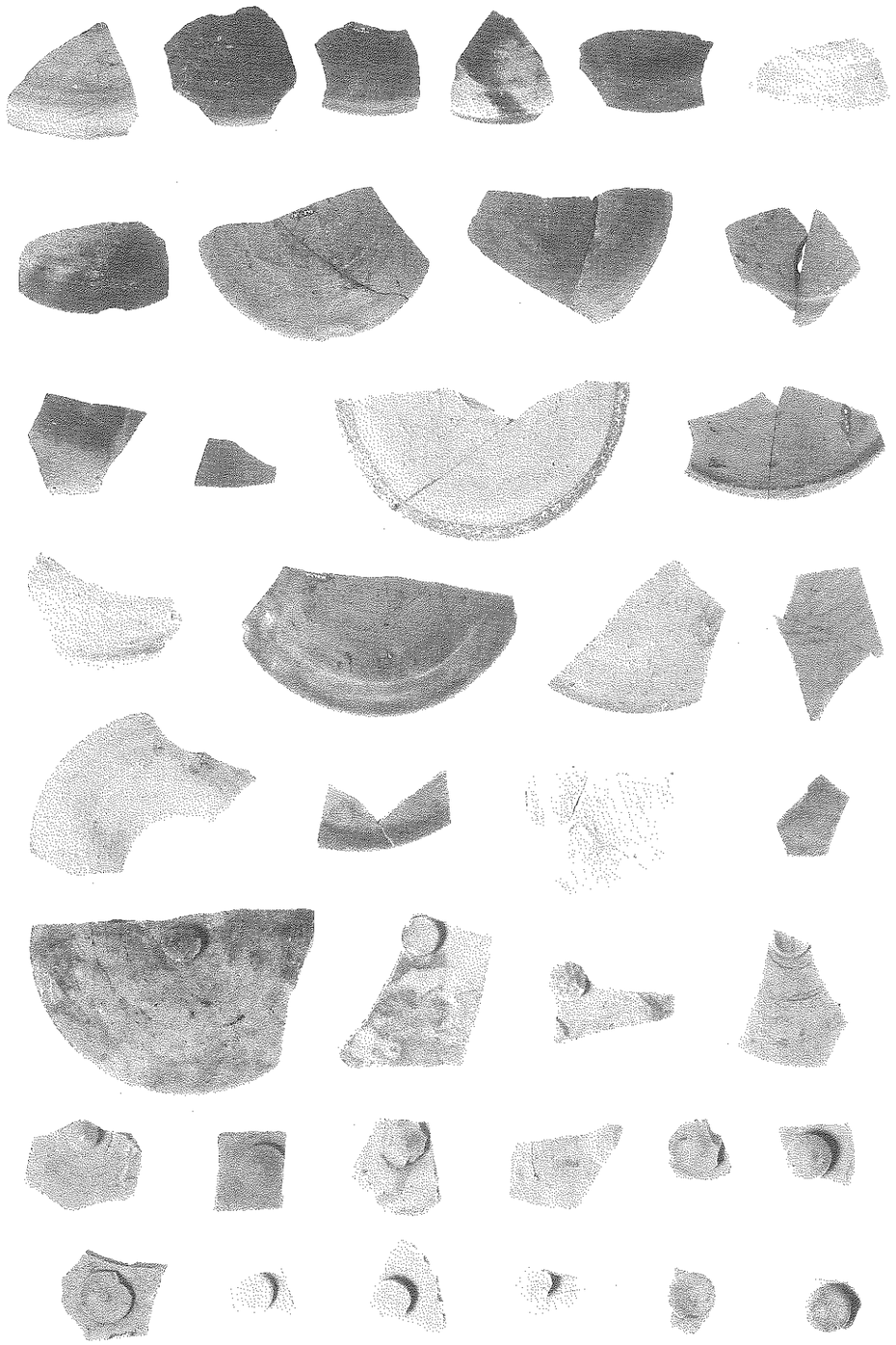


V・VII層出土土器（1/3）

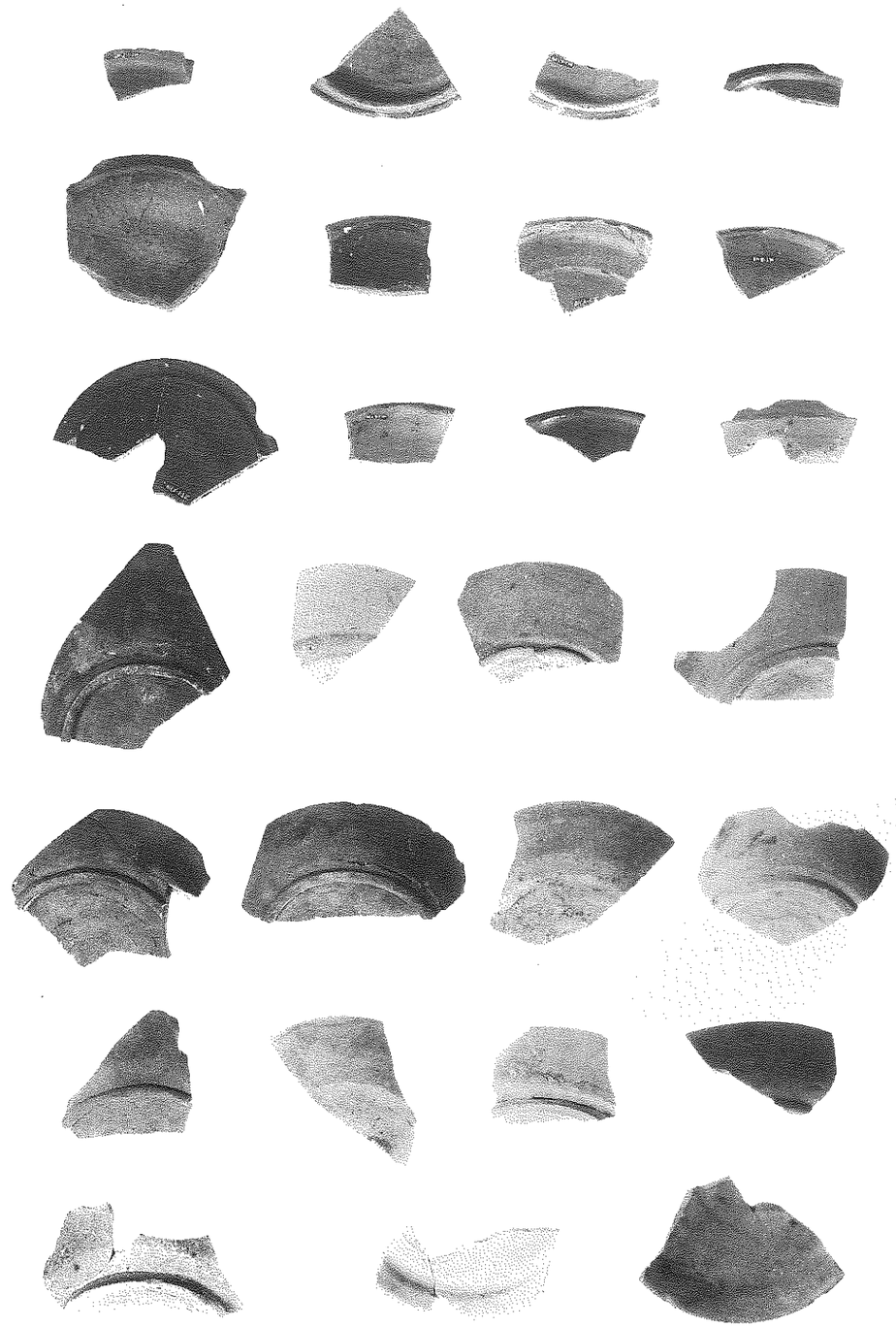
Ⅶ層出土石器（1/2）



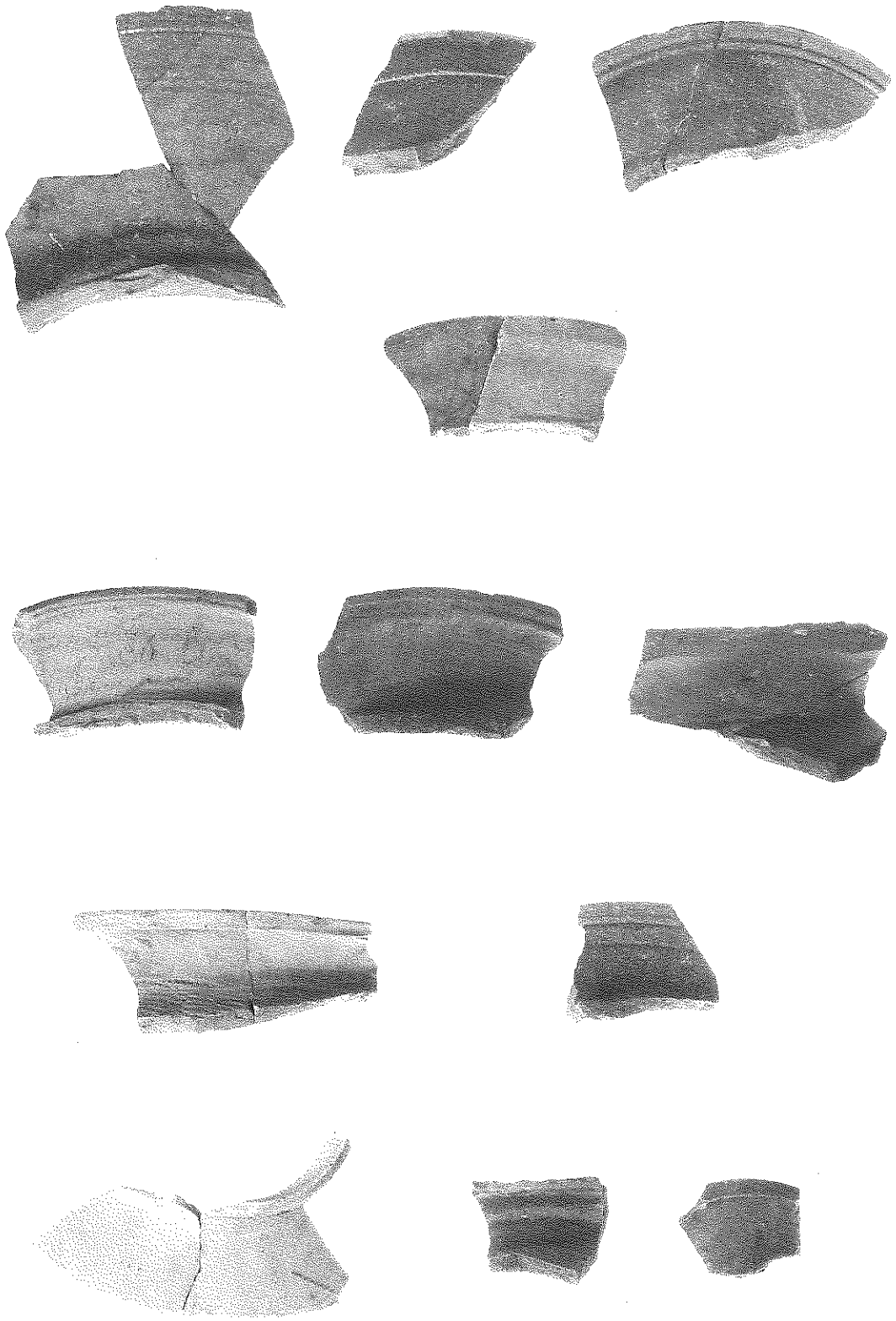
弥生土器（1/3）



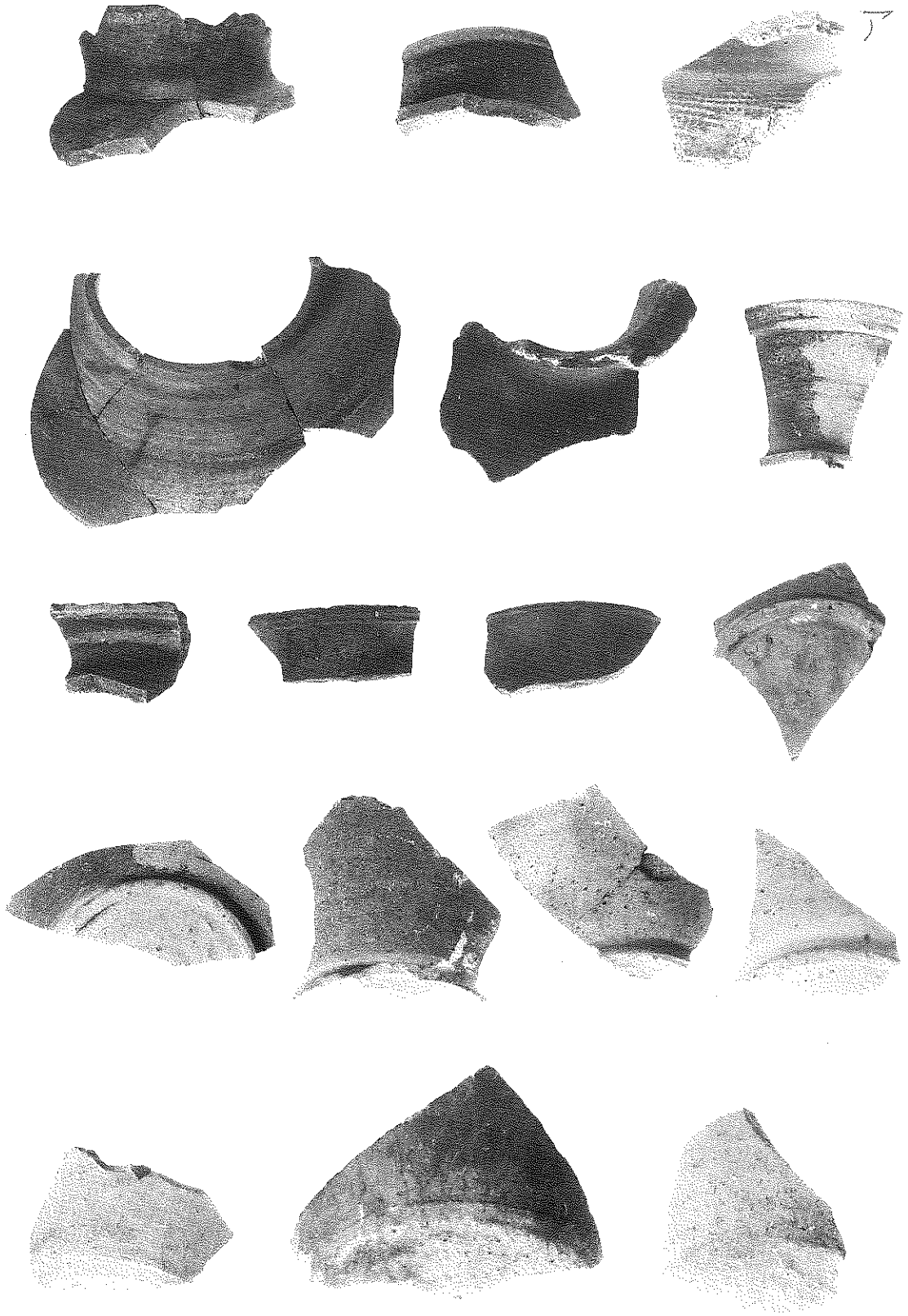
須恵器坏蓋（1/3）



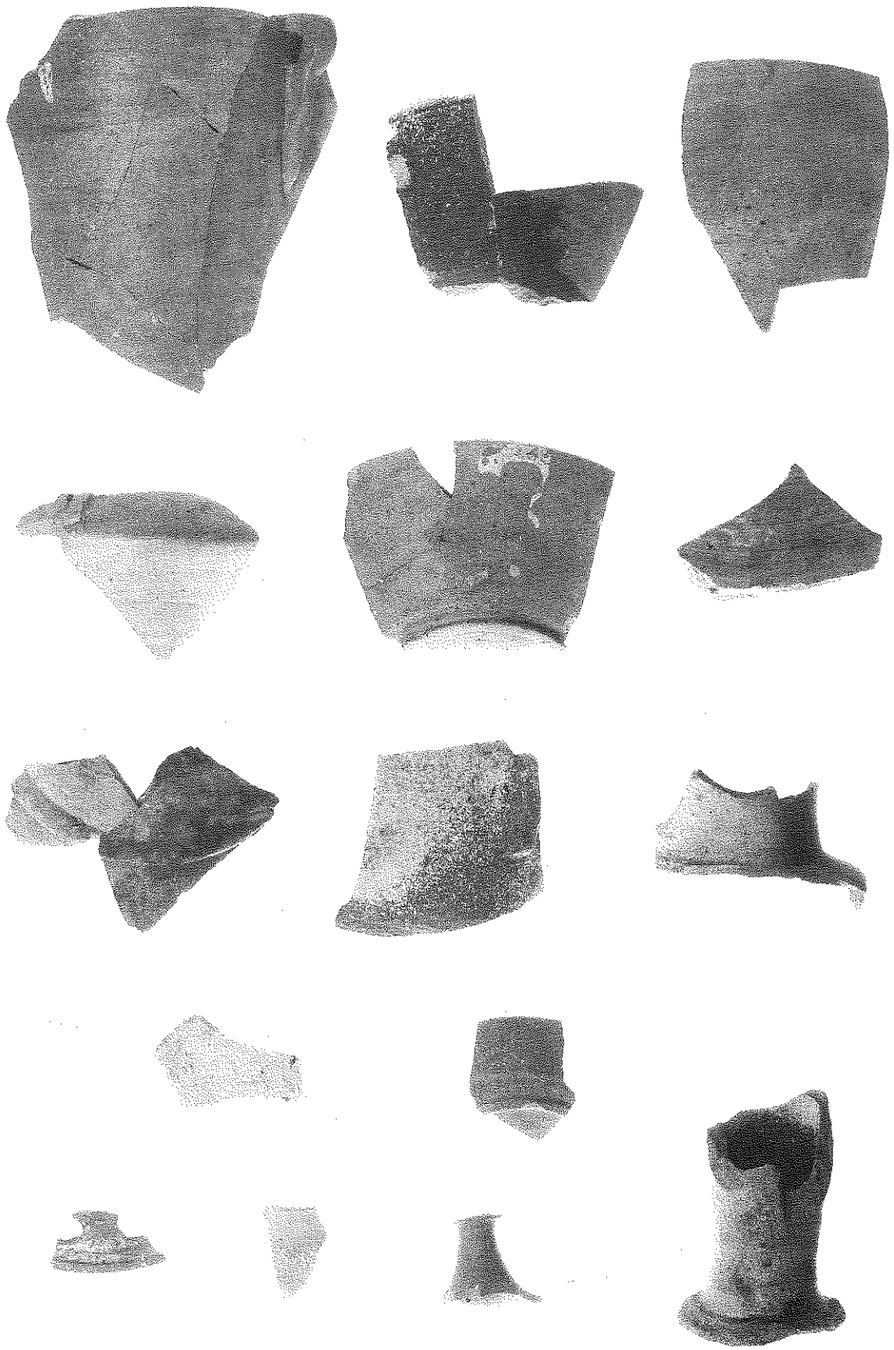
須恵器坏身（1/3）



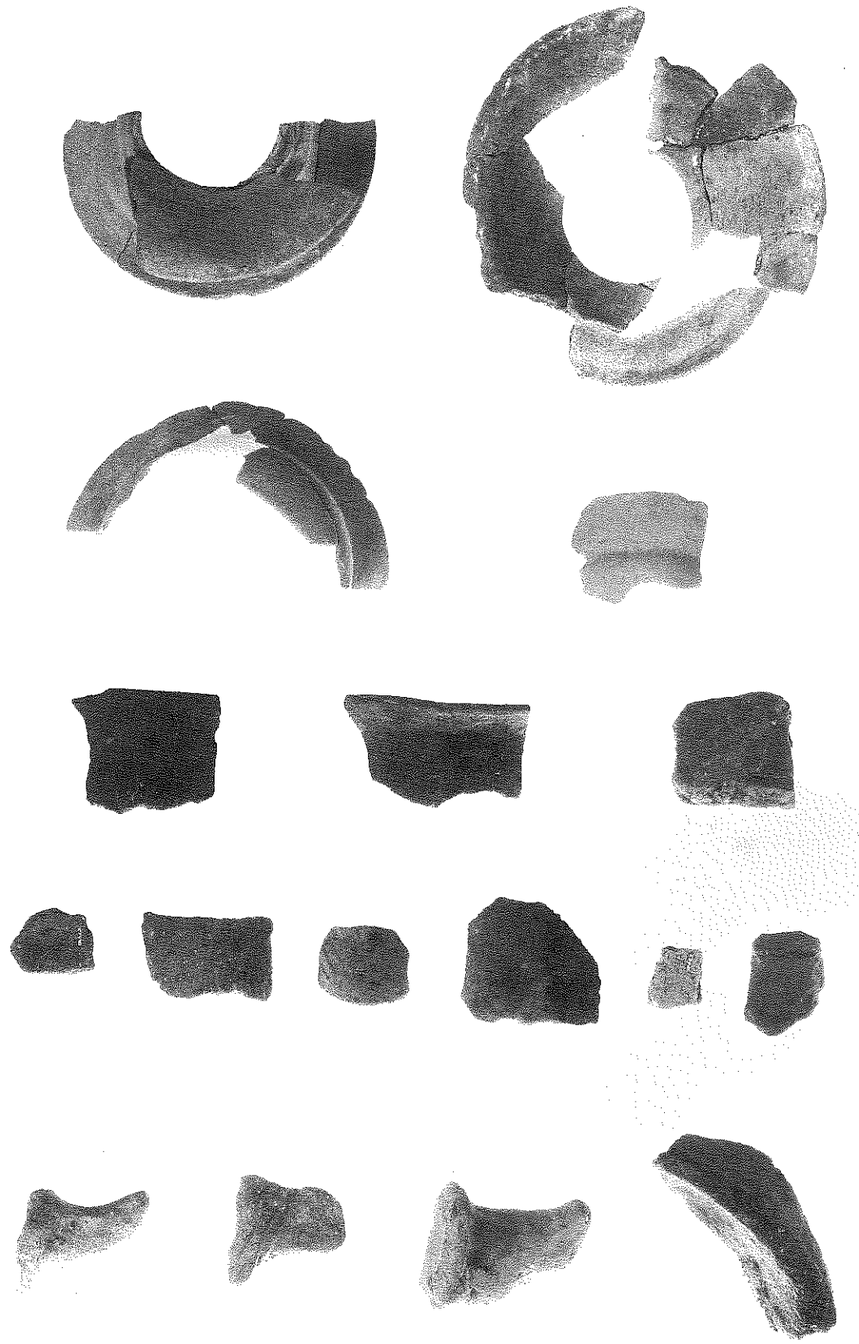
須恵器甕（1/3）



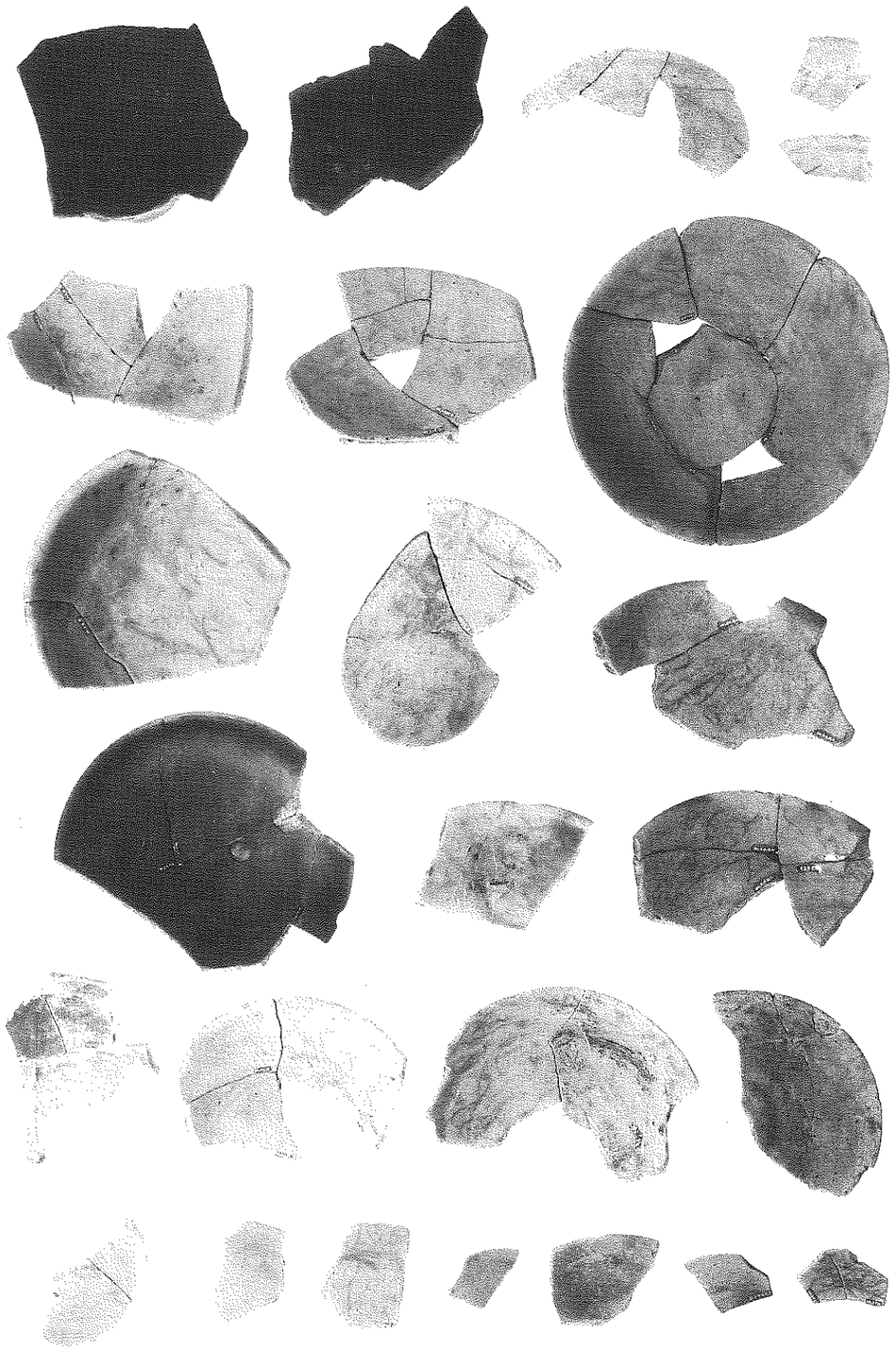
須恵器甕・壺（1/3）



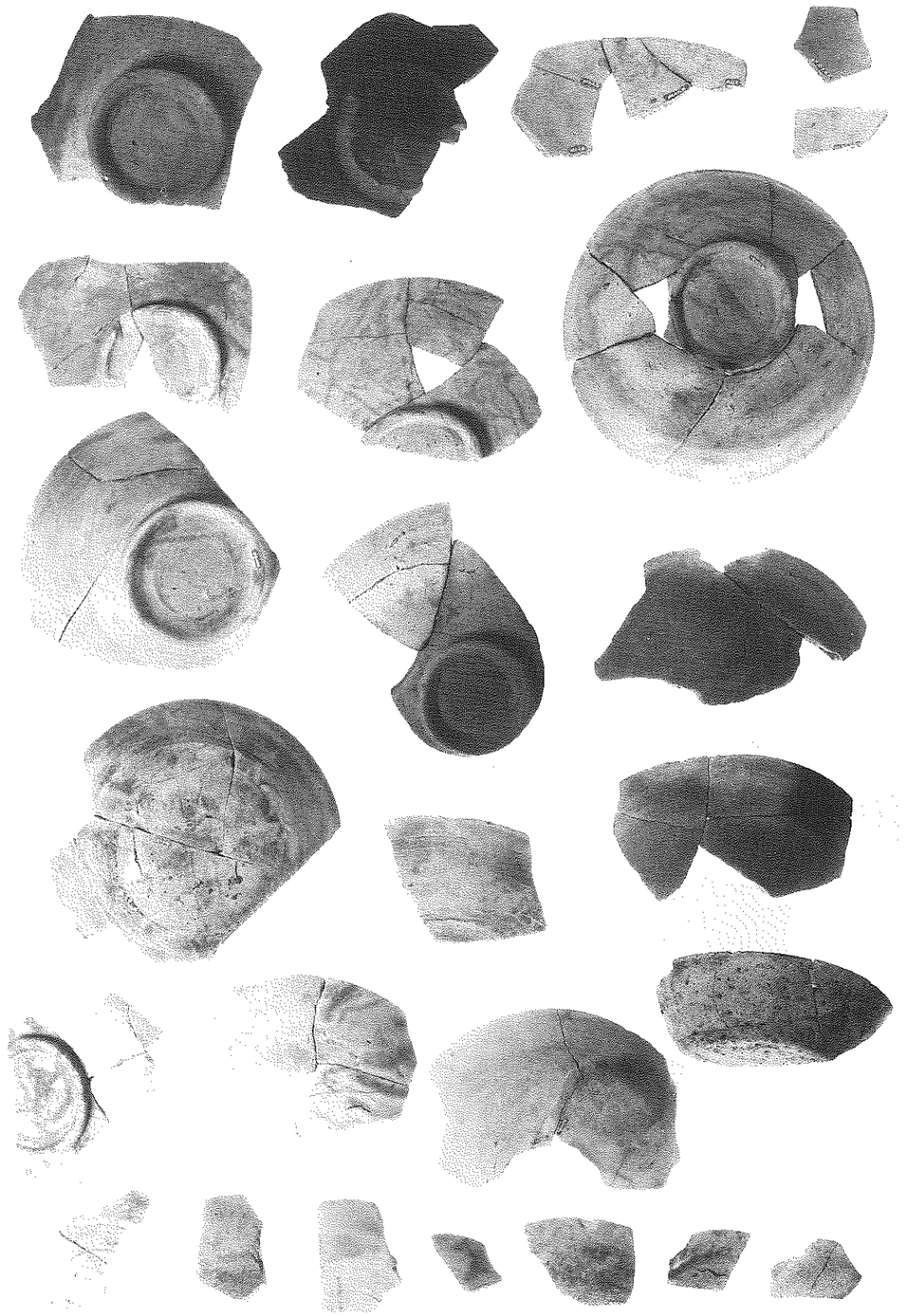
須恵器壷・その他の須恵器（1/3）



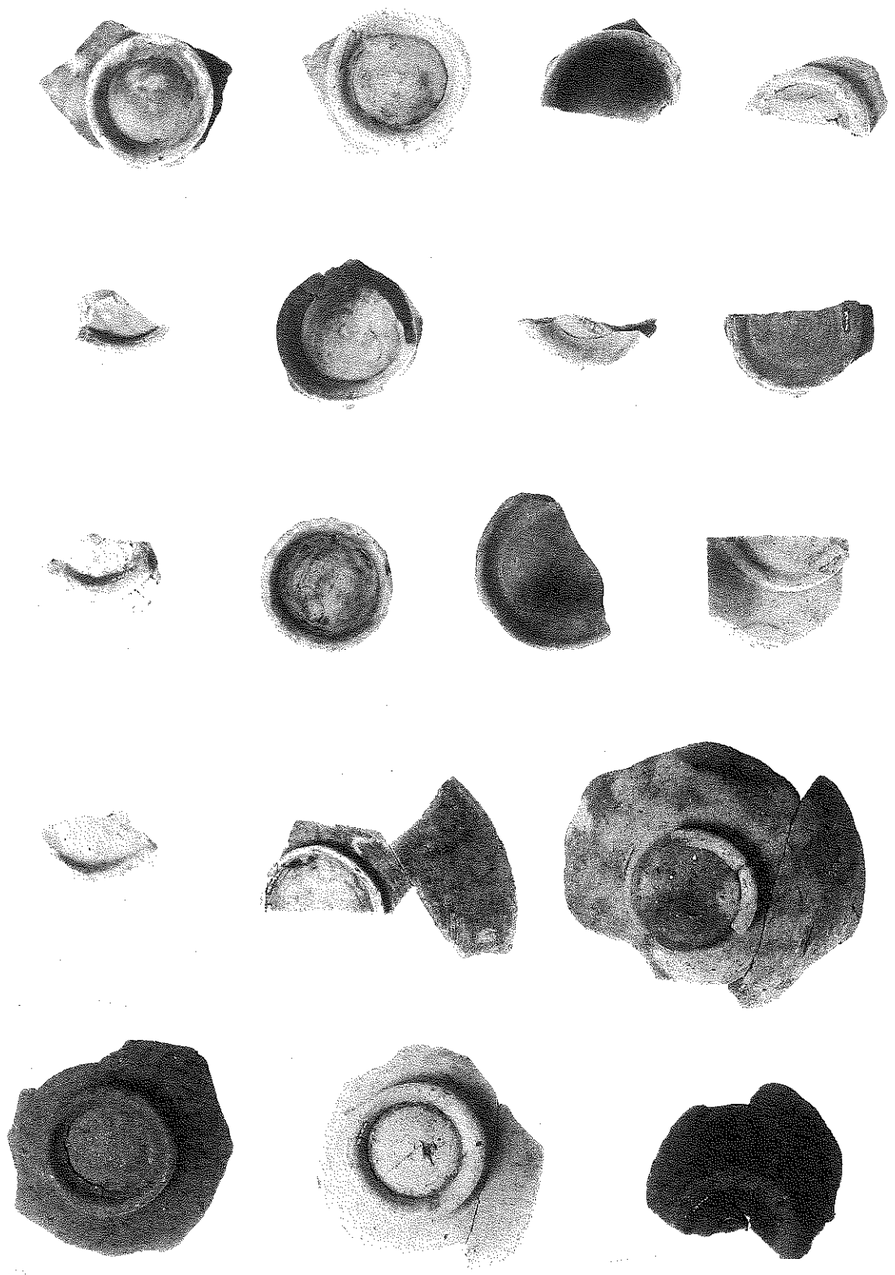
土師器（1/3）



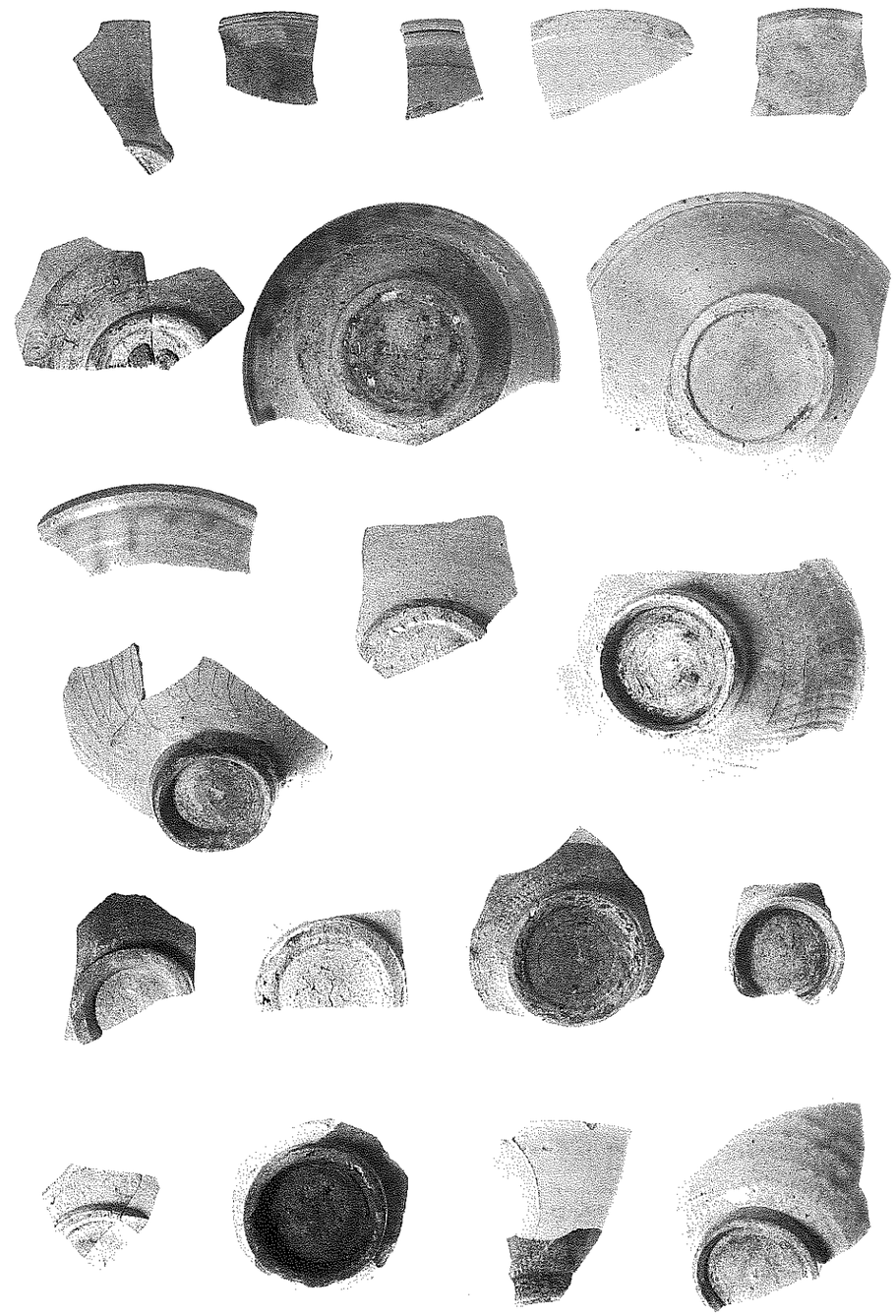
土師器碗・皿・坏（1/3）表



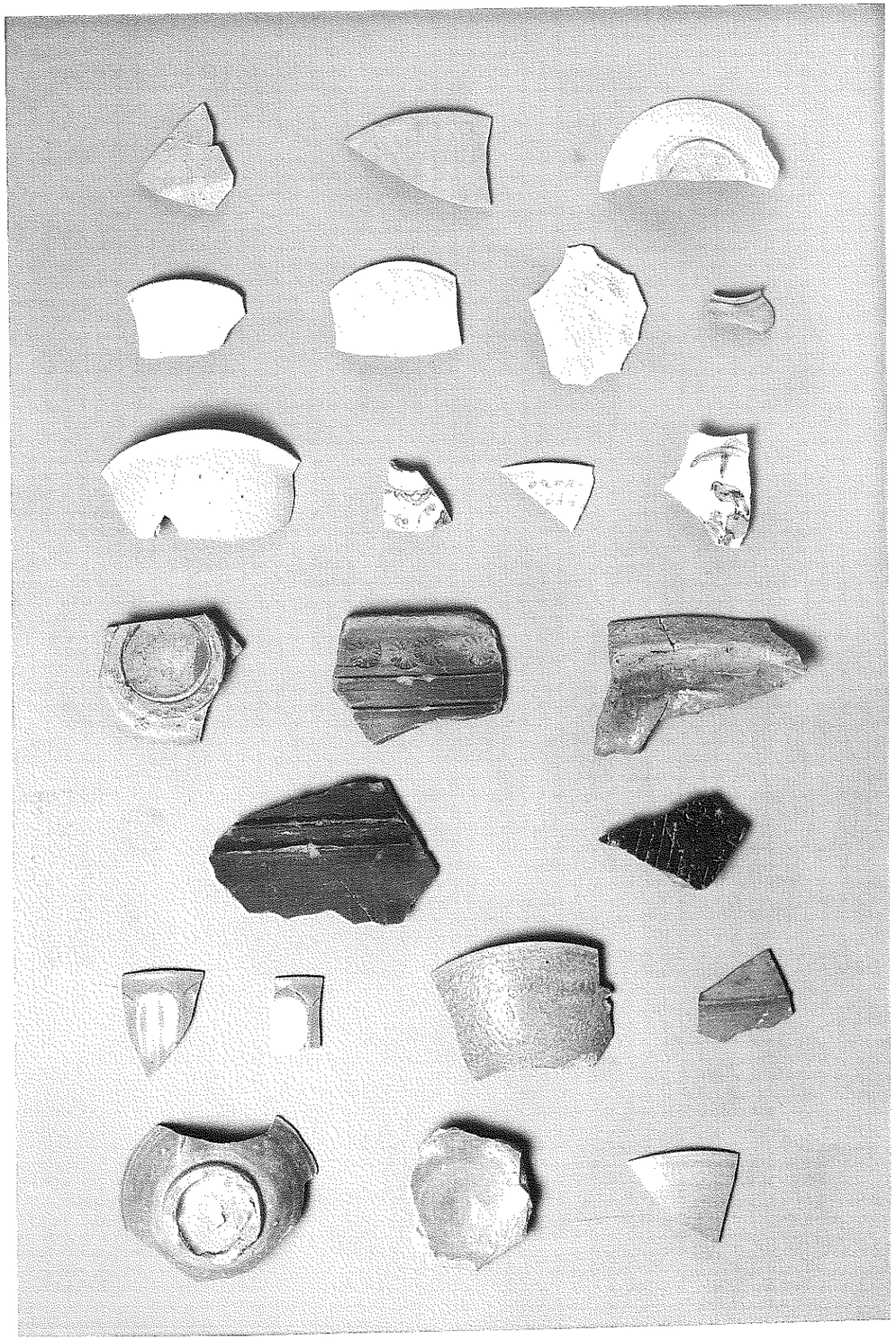
土師器碗・皿・坏（1/3）裏



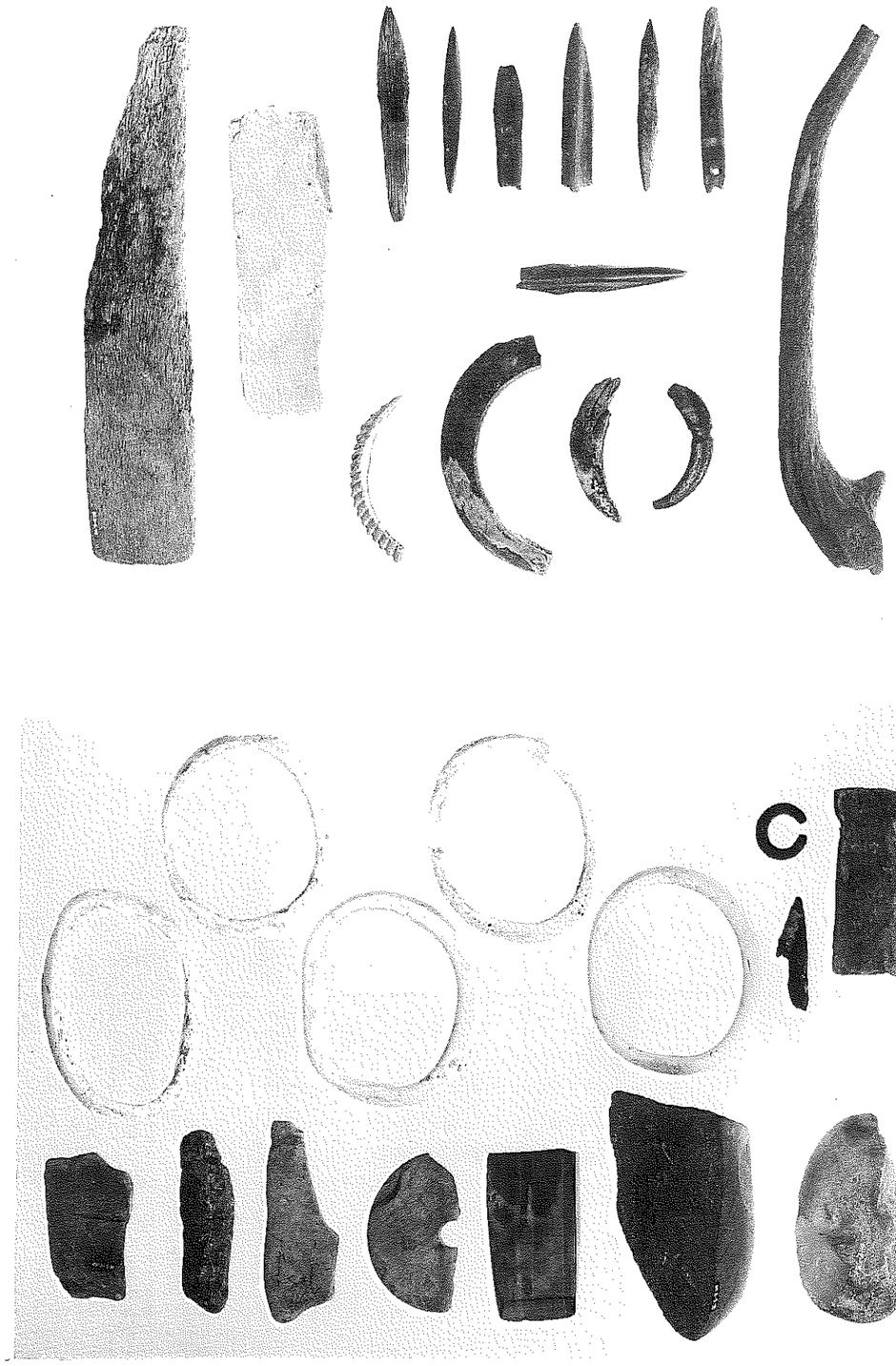
土師器碗・瓦器碗（1/3）



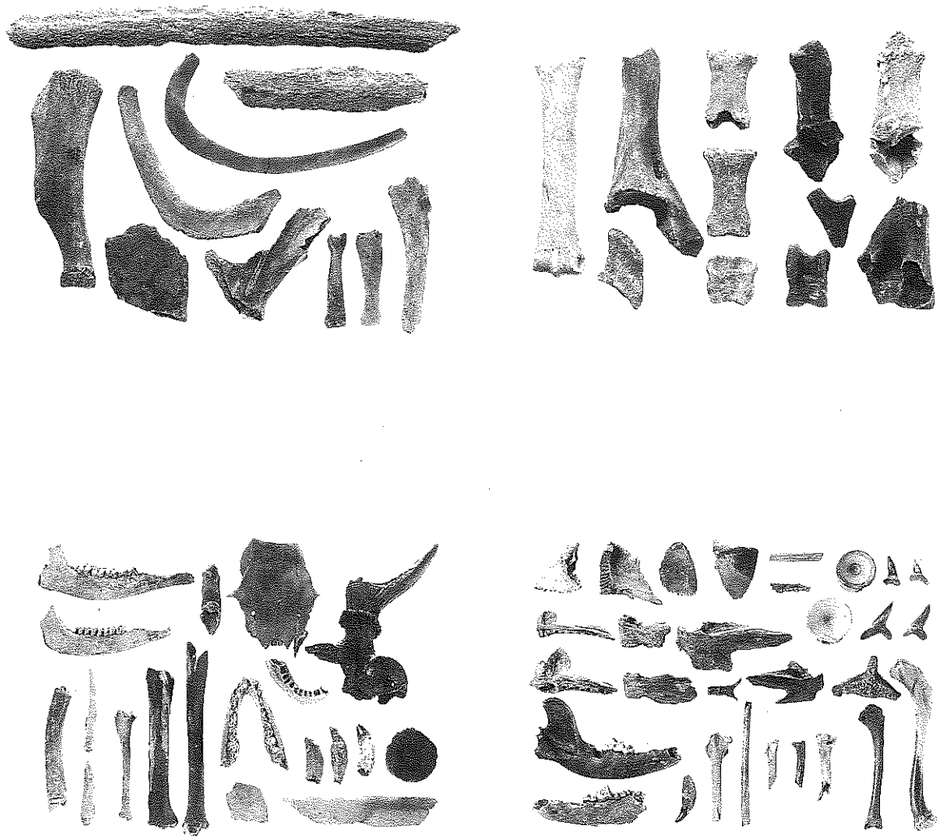
輸入陶磁器（1/3）



輸入陶磁器（1/3）

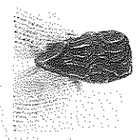


Ⅶ層出土の骨角器（上段）・その他の遺物（下段）



大浜遺跡出土の動物遺存体

放射性炭素年代測定資料A～D



Aの上面観

動物遺存体・放射性炭素年代提出試料

報告書抄録

ふりがな	おおはまいせき
書名	大浜遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第141集
編著者名	福田一志
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850-8570 長崎県長崎市江戸町２－13 ＴＥＬ(095)824-1111(代表)
発行年月日	西暦 1998年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おおはまいせき 大浜遺跡	長崎県福江市	42206	036	32° 39′ 10″	129° 48′ 50″	19971108 ～ 19971221		道路拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大浜遺跡	縄文 弥生 古墳 古代 中世	古墳～古代	弥生時代の 配石墓	鼓形器台 緑釉陶器 須恵器	遺物は沼に投棄したかたちで出土、馬を主体とする獣骨が多量に出土

長崎県文化財調査報告書　第141集

大　浜　遺　跡

平成10年３月31日

発　行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町２－１３

印　刷　㈱クイックプリント
長崎市樺島町８番12号